



 **ものつし大学**
Institute of Technologists

目 次

| | |
|--|----|
| 巻頭言「10周年を迎えて」総長 梅原 猛 | 4 |
| 「基本理念のさらなる実現に向けて」学長 神本 武征 | 6 |
| 「10年の系譜」 | 12 |
| 「製造学科10年のあゆみ」製造技能工芸学科（現製造学科）長 龍前 三郎 | 18 |
| 「建設学科10年のあゆみ」建設技能工芸学科（現建設学科）長 白井 裕泰 | 28 |
| 「ものづくり研究情報センターにおける共同研究史」—開学から10年の歩み— ものづくり研究情報センター長 東江 真一 | 38 |
| 「インターンシップ10年のあゆみ」—準備から定着まで— 学生課 | 44 |
| 「ものづくり大学 キャンパス10年の変遷」総務課 | 48 |
| 「彩の国におけるものづくり大学 地元との関係史」—様々に展開してきたものづくり— 教務・情報課／学生課 | 54 |
| 「学生活動10年」—学生による大学づくり— 学生課 | 58 |
| 「学園祭の10年」 | 63 |
| 「ものづくり大学 卒業生の10年」—卒業生に聞く— | 66 |
| 「組織の変遷」 | 74 |
| 「学校法人役員・評議員・大学教職員・非常勤講師一覧」 | 76 |

「10周年を迎えて」

総長 梅原 猛

ものづくり大学が創立十周年を迎えた。今は亡き野村東太学長とともにこの大学の設立に努力した私にとって感慨無量である。開学直前に思いがけない事件が起こり、私も野村学長も苦労を経験した。しかし多くの人の助けにより困難も解決され、開学を迎えたことは私たちにとって大きな感激であった。

ものづくり大学は陽明学の精神に従って設立された大学であると思う。陽明学とは、幕府が採用したいたずらに不毛な理屈を積み重ねる朱子学に対して、「知行合一」を説く儒学である。この陽明学の精神を学んだ人間に、「忠臣蔵」で有名な大石内蔵助や明治維新を起こした西郷隆盛がいる。

ものづくり大学の校舎内は、右手に学問の授業を受ける教室が並んでいると、左手に実際に技能を習得する教室が並んでいる。それはまさに陽明学の知行合一の精神の象徴で、このように「行」すなわち技能を重視した大学は日本に例がないであろう。

日本は甚だ精巧な技能の伝統をもっている。岡本太郎が絶賛した縄文土器はたしかに世界に誇れるすばらしい芸術品であるが、そこには優美にして精巧なものを創り出すことのできる技能の高さが見られるのである。あの薄い土器に芸術的な縄目文様をみごとに施す技能は並大抵のものではない。このようなすぐれた技能こそ、縄文時代から脈々と現代に伝わる日本の伝統といつてよいであろう。

戦後、来日したスペインのある哲学者が整然と区画された日本の田んぼを見て、まさに芸術品だと称えた。それは少しオーバーな表現であるにしても、日本の稲作農業の緻密な技能は特記さるべきであろう。また奈良時代以降江戸時代にいたるまで実にすぐれた伝統的工芸品がたくさん作られた。

明治の日本の政治指導者は、西洋の科学技術文明を移入することこそ日本の至上課題であると考えた。それで日本は、欧米諸国においては理学部に属する実践科学というべき工学を工学部として独立させ、すぐれた研究者を欧米に留学せしめ、工学を中心とする科学技術文明の移入に全力を挙げた。

そのような政策が世界でも稀なる工業国日本を誕生せしめたのであろう。実際に工業製品を作るには技術も大事であるが、技能も甚だ重要である。日本は短期日に工業立国に成功したが、そこにはすぐれた技能者の功績があったことは間違いない。日本の工業製品のすばらしさはこの技能者に負うところが大きい。日本の最初の技能者の多くは縄文以来の技能を伝えていると思われる木地師出身者であった。このようなすぐれた技能者の育成なしに日本の発展はあり得ないであろう。

大震災復興において新しい日本の国づくりが求められる。この日本復興の任務を担う技能者を育てるものづくり大学はますます重要な役割をもとう。



写真1 ものづくり大学公開講座より

梅原総長作詞によるものづくり大学校歌

校歌

作詞…梅原 猛
作曲…廣瀬量平

一. 縄文の 昔より

国の誇りは ものづくり
遠き世ゆ 伝えきて
みがきみがきし 美しき
たくみのわざを われら学ばん

二. 日の本の 近き世の

国の栄えは ものづくり
豊かなる 世をまねく
きたえきたえし まことなる
たくみのわざに われら励まん

三. この道の すたれなば

国の滅びは きたるらん
身と心 一つなる
にゆうものづくり 世直しの
たくみのわざを われらつくらん

「基本理念のさらなる実現に向けて」

学長 神本 武征

1. まえがき

高校生の 50% 以上が大学と短大に進学するようになって既に 30 年以上が経過した。また大学数も過去 20 年間でほぼ 200 校が増加し、現在 700 校を越すまでになった。大学を取り巻く環境は少子高齢化、情報化の進展、産業構造・雇用形態の変化、経済的格差の増大と固定化に加え、地域社会と家族形態の変容と大きくかつ急速に変化しつつある。大学はこのような環境の変化に対応した柔軟な経営が必要となり、また卒業生の質を保障することが求められるようになった。平成 20 年 4 月には文部科学省令により「大学は授業の内容と方法の改善を図るための組織的な研修と研究を実施する」ことが義務付けられ、教育の質の向上を目指す継続的な活動が必須となっている。各大学の教育の目標、換言すればどのような資質の学生を社会に送り出すかは各大学独自の基本理念に基づいており、本学においては建学時に定められた 6 箇条の理念を基本的な教育の目標としている。2001 年の創設から 10 周年の節目を迎えたいま、設立時の大学理念を改めて見直し、理念に忠実な教育が効果的になされてきたかを検証し、今後の進むべき方向を述べてみたい。



2. 大学の理念

本学の育成する人材は大学案内に明記されるように Technologists の養成である。すなわち、ものづくりの現場で必要とされる高度の技能を持った技術者を育てることである。建学時に定められた 6 箇条の教育理念は次の通りである。

1. ものづくりに直結する実技・実務教育の重視
2. 技能と科学・技術・経済・芸術・環境とを連結する教育・研究の重視
3. 時代と社会からの要請に適合する教育・研究の重視
4. 自発性・独創性・協調性を持った人間性豊かな教育の重視
5. ものづくり現場での統率力や起業力を養うマネジメント教育の重視
6. 技能・科学技術・社会経済のグローバル化に対応できる国際性の重視

項目 1 の実技・実務教育に重点を置いた教育と項目 3 の社会のニーズにあった教育は当初より着実に実施されている。建設学科のカリキュラムには各種資格に合わせて 4 コースが設けられており、資格取得と教育内容がマッチし、分野的にもバランスのとれた体系的な教育がなされている。

一方、製造学科の教育は建設学科のように資格ベースで割り切れないところがある。機

械系製造業はグローバル化と円高対策で生産工場を海外にシフトしつつあるが、国内には開発拠点とマザー工場は残るので、広い基礎知識と柔軟な思考を持つ Technologists に対する需要は多い。国内の生産工場はコスト削減を目指して無限に自動化を迫及してゆくが、ここでも Technologists の活躍の場はある。このように産業構造は変化するものの、Technologists に要求される能力と知識は変わるわけではなく、基本理念に基づく教育内容を変える必要はない。ただし航空機、ロボット、マイクロ技術など今後進展の期待される先端技術に関する知識は逐次教授する必要がある。

6項目の基本理念の中で課題となるのは項目2の総合力、項目4の人間性、項目5のリーダーシップあるいはマネジメント力、項目6の国際性に関する教育である。これらの項目にかかる教育の強化の必要性は理事会・評議員会においてたびたび指摘されている。最近の統計によれば、企業はコミュニケーション力、自立心、協調性など項目4に関わる豊かな人間性を若者に求めている。以上の項目2、4、5、6を絡げると、幅広い知識と豊かな人間性、力強い統率力、国際性を備えた理想的な Technologists 像が浮かび上がる。このような全能的な人物を4年間の大学生活で完成させることが困難なことは言うまでもなく、高校での勉強と卒業後の継続的な研鑽が不可欠である。次項では本学における教養教育あるいは人間性教育について考える。

3. 教養教育

現代の若者は携帯電話やパソコンを通して意志疎通する習慣が強く、直接の対話を苦手とするものが多い。このような学生にコミュニケーション力や協調性を体得させるには複合的な学習の組み合わせによる教育が必要である。建設学科では「ものづくり・ひとつくりに総合講義A」で文章表現の基礎的技術を教え、インターンシップ実習の終了時にレポートの提出を義務付けている、全学生が携行するポータフォリオへの日常的な活動記録の記入も重要な訓練の一環である。

コミュニケーション力、協調性、リーダーシップ、創造力を培う場として5~6名の学生で構成するチームによるグループ学習が有効と考えている。製造学科の Freshmen seminar における「からくりマシンコンテスト」がそれに該当する。ここ数年は泰日工業大学から4名のチームも参加するので、国際性を学ぶ場ともなっている。約2ヶ月のグループ学習によって多くの基礎的能力が向上すると評価されている。通常の講義に加えて課外活動も有益な方法である。毎夏実施される Student Formula JSAE とロボットコンテストのチームで活動する学生は自然にいろいろな能力を身につけている。リーダー格の学生の会話力、説得力、自信あふれる態度などにその感を強くする。サークル活動の成果を見るにつけ学生の部活動参加率の向上が望まれる。建設学科の2年生の第3・4クォータに行われている木造応用実習では、12名程度がチームを組んで一軒の小屋を制作しており、コミュニケーション力、協調性、リーダーシップ、創造力を培う場として、同様の効果を挙げている。

社会学、経済学、エネルギー・環境工学、芸術など一般教養に属する教育はどうか。こ

これらの科目は 1 年次のカリキュラムに組み込まれているが、実習と実験に割かれる時間に制約されて少ない。限られた時間内で将来へつなげる興味を持たせるには、体系的な知識の講義だけでなく、新聞種などを話題にした対話型の講義が望ましいのではなかろうか。ハーバード大学のサンデル教授の対話型講義の進め方は学生が自ら考える能力を鍛える点でおおいに参考になる。

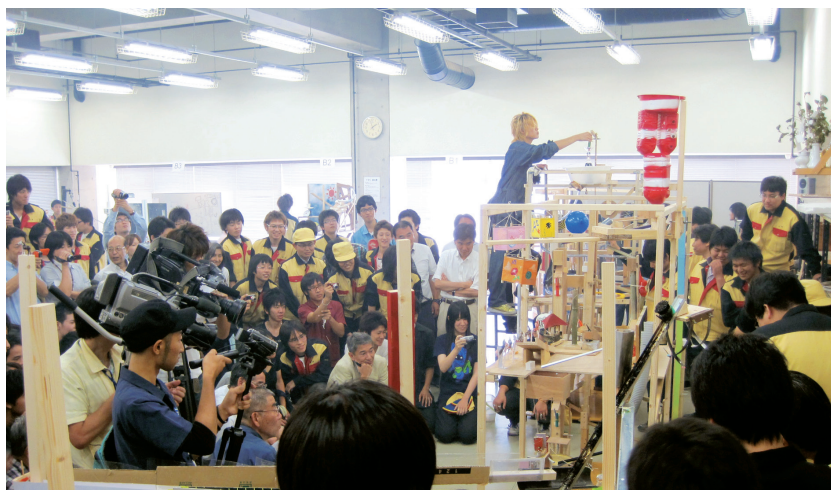


写真1 製造学科のからくりマシンコンテスト風景



写真2 スチューデントフォーミュラ大会におけるもの大チーム

4. 国際教育

国際性を養う教育については、製造学科は1年次の英語基礎から3年次の実用英語まで週に2コマずつ英語の講義を組んでいる。機械系産業のグローバル化に対応する先端的な取り組みであり、これほど英語教育に時間を割いている工科大は珍しい。問題は受講者数が年次の進行につれて減少し、かならずしも意図した教育効果が挙がっていないことである。新入生アンケートによると、高校時代に最も苦手な教科として英語を挙げる学生

が多く、このことが低い英語学習意欲に反映している。現在は担当教授を中心に魅力的な英語教育を目指して改善が図られつつある。

国際性の教育とは単に英語を学ぶことではない。建設学科は英語教育こそ 1 年次の 2 教科だけであるが、教育・研究活動において国際的な取り組みを展開している。ひとつは白井裕泰教授を研究代表者とする「ベトナム・フェ王宮修復プロジェクト」(文部科学省海外学術調査研究助成金による 2005-2008 年度、2010-2015 年度研究)であり、過去 5 年間で 31 名の学生が現地でフィールドワークを実施している。他のひとつは八代克彦教授を代表とする「世界を変えたモノに学ぶ」原寸プロジェクト(学長プロジェクト 2010、2011 年度)であり、2011 年 2 月にル・コルビジエ「カップマルタンの休憩小屋」を見学するため南仏 Cap-Martin へ教員 6 名と学生 10 名が訪問した。2011 年 10 月の学園祭に実物大のレプリカを構内の池の脇に建設する予定である。

国際性とは外国の文化を良く理解し、寛容の精神を持って国際社会で活躍する力であろう。文化とはものの考え方、人生観、それに裏づけされた生活様式などであって、講義を聴いただけで簡単に分かるものではない。外国人との交流が不可欠であり、製造学科で毎年海外インターンシップの一環として実施している泰日工業大学の 4 名の学生との交換制度は有益な活動である。2012 年度からサウジアラビアからの工業系の教員となる留学生の受け入れを検討しており、今後アジアを中心に国際活動を活発化させたい。

5. 専門教育

製造学科、建設学科とも理念の項目 1 に従って実践教育に力を入れている。製造学科では他の大学でははるか昔に廃止した鋳造やアーク溶接などの実習を必修科目にしている。企業の工場長クラスにその必要性を問うと一様に「企業に入って直接やらないにしても、そのような基礎知識を持っていることは生産現場で非常な強みである」と回答され、本学の“モノづくりの原点”である基礎技能を重視する姿勢に誤りのないことを実感する。



写真 3 建設学科の第 3 連絡橋の建設風景

エンジニアの基本的能力として高度な製品を分解し、部品を観察して形状、材料、機能を考察したのち組み立てて原状に復する技術がある。多くの大学では内燃機関などの分解組み立てを実習として課し、設計思想と製作過程を理解すると同時に工具と計測器の正しい使用法を学んでいる。製造学科に分解・組み立ての授業が導入されることを期待する。

一方、建設学科はより専門家教育に力を入れている。詳しくは本 10 周年記念誌の「建設学科 10 年のあゆみ」を参照されたいが、年間 4 クォータとして 200 余名の非常勤講師による実習を行っている。写真 3 は 3 年生が取り組む第 3 連絡橋の製作模様である。全員が分担する仕事を慣れた手つきで黙々とこなしている。

6. ものづくり教育のモデル

従来のカリキュラムでは数学や物理など基礎知識を習得させてから専門の実験・実習に入る。系統的ではあるがこのやり方の欠点は、基礎を学んでいる時に応用のイメージが湧かないことである。また現場でその知識を応用する時には学んだ知識を忘れてしまっていることが多い。基礎を教えたらずぐに応用も学ぶ仕組みが理想的と思われる。理論と実践が一对になった“Parallel learning of theory and practice in production engineering”をものづくり教育のモデルとして提唱している。例えば、モノづくりの基本は材料の知識であり、材料の性質を知らないと、設計も加工も出来ない。アルミ、鉄、プラスチックなど材質が違うが形状の同じ棒を数本用意して一グループに与え、密度、硬度、電気抵抗、熱伝導など多くの性質を理論と実際の両面から同時に学ぶ体感教育のモデルである。

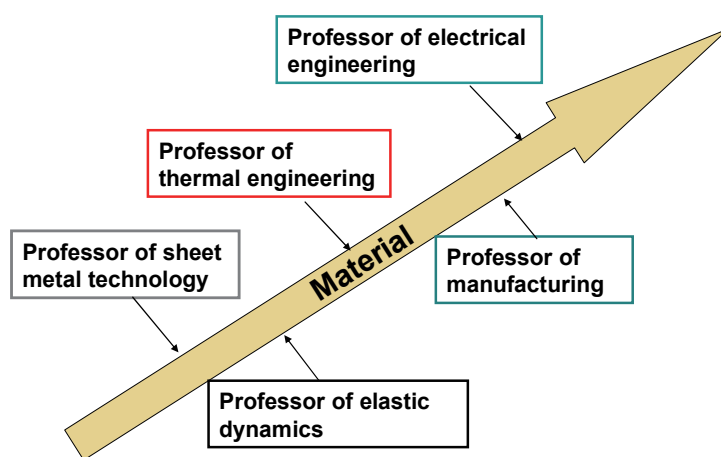


図 1 Parallel learning of theory and practice in production engineering

7. 卒業研究

卒業研究は小学校から 16 年間受けた教育の総決算の学習として極めて重要な意味を持つ。また大学としては社会に対して卒業生の質を保証する証しとなるべきものである。毎年、

卒業研究発表会に出席するが、1年間をかけて素晴らしい成果を挙げる学生が居る反面、不十分な学生がいるので改善する必要がある。クォータ毎の中間発表と出席率の管理による研究時間の確保を推進すると共に、簡単な卒業試験などを導入して更なる卒業生の質の向上を図りたい。

8. まとめ

以上概観したとおり、本学の基本理念は理想的な Technologists の素養を網羅している。たとえグローバル化による産業構造の変化があるとしても、製造の現場で Technologists の価値が下がる訳ではなく、したがって教育方針を変更する必要はない。ただし、時代によって要求される資質に強弱があるので、メリハリのある柔軟な対応を心がけたい。

問題はカリキュラムに組み込まれた教育理念が体系的、組織的そして効果的に教えられ、学生が習得しているかである。これを定常的に点検し、教育の改革につなげることが重要である。質の高い学生を継続的に輩出することが大学の評価を高める最も基本的な要因であるからである。競争の激化する私学の中で“ものづくり学の拠点校”として創造性あるものづくり教育を確立して本学の存在感を増してゆきたい。

「10年の系譜」

| 年度 | 大学の沿革 | 卒業生・学生・教員の活躍（製造学科） |
|---------------------|---|--|
| 1999 (平成 11年) | 1月 財団法人国際技能工芸大学設立準備財団設立許可申請書を文部大臣に提出 2月 「財団法人国際技能工芸大学設立準備財団」を文部省が認可 9月 「国際技能工芸大学（仮称）」を「ものづくり大学」に変更する。財団法人国際技能工芸大学設立準備財団寄付行為変更認可申請書を文部大臣に提出 9月 「財団法人ものづくり大学設立準備財団」に名称変更認可。学校法人国際技能工芸機構寄付行為認可申請書、ものづくり大学設置認可申請書を文部大臣に提出 12月 大学本部棟、製造棟、建設棟、大学会館工事を着工 | |
| 2000 (平成 12年) | 5月 ドーミトリ、体育館工事を着工 12月 文部大臣が学校法人国際技能工芸機構設立、ものづくり大学設置を認可 3月 建物 竣工 | |
| 2001 (平成 13年) | 4月 ものづくり大学（技能工芸学部 製造技能工芸学科・建設技能工芸学科）開学 4月 図書情報センター設置、ものづくり研究情報センター設置 4月 第1回 ものづくり大学入学式を挙行  11月 第1回 ものづくり大学学園祭を開催 | 8月 第1回（自作艇）カヌー競漕大会 開催（製造技能工芸学科Fゼミ 2001～2007）  |
| 2002 (平成 14年) | 4月 ふれあいルーム設置 3月 中央棟 竣工  | 5月 エコランカー大会初出場  |
| 2003 (平成 15年) | 5月 事務局学務部の厚生課を学生課に改称。ものづくり研究情報センターが大田サテライトオフィスを開設 6月 ものづくり研究情報センターが川口サテライトオフィスを開設 | 5月 エコランカー大会出場 8月 人力ボートレース大会初出場  春岡幼稚園壁画制作 |
| 2004 (平成 16年) | 11月 韓国技術教育大学 (Korea University of Technology and Education) (大韓民国)と協定締結 11月 文部科学大臣が大学院ものづくり学研究科（修士課程）設置を認可 3月 第1回 ものづくり大学卒業式を挙行 第一連絡橋「梅原橋」 開通  | 4月 第17回優秀板金製品技能フェア 学生作品の部 金賞受賞（田島直道、渡壁 正） 6月 NHK 大学ロボコン初出場 特別賞  8月 ループゴールドバーグマシンコンテスト優勝 人力ボートレース大会出場 9月 技能検定機械加工2級埼玉県優秀賞（森 圭祐、佐々木紀栄） |

| 卒業生・学生・教員の活躍（建設学科） | 特別公開講座 |
|--|--|
| | |
| <p>5月 日本建築仕上学会学会賞論文賞（近藤照夫非常勤講師・現教授）</p> | <p>5月 特別公開講座（永六輔氏）を開催「ものづくりを考える」 7月 特別公開講座（瀬戸内寂聴氏）を開催「職人の誇り」  11月 特別公開講座（西澤潤一氏）を開催「21世紀をよむ」</p> |
| <p>5月 (社)日本コンクリート工学協会論文賞受賞（中田善久専任講師）</p> | <p>5月 特別公開講座（野田一夫氏）を開催「ものづくりと経営」 7月 特別公開講座（大塚初重氏）を開催「木と石と金属と古代人の心」 7月 特別公開講座（梅原猛氏）を開催「ものづくりは日本の誇り」</p> |
| <p>11月 技能五輪全国大会地方大会（予選・建築大工）埼玉県知事より成績優秀者表彰（星野公亮）</p> | <p>11月 行田市と共催の特別公開講座（丹保憲仁氏）を開催「たくさんの人の住む狭い日本」</p> |
| <p>11月 技能五輪全国大会地方大会（予選・建築大工）埼玉県知事より成績優秀者表彰（高草知泰、根岸正名） 3月 日本建築仕上学会 学生研究奨励賞受賞（昇 愛華） 3月 弓道場建設（卒業制作）</p>  | <p>11月 埼玉県経営者協会と共催の特別公開講座（三浦雄一郎氏）を開催「高く遠い夢～70歳、エベレスト登頂～」</p> |

| 年度 | 大学の沿革 | 卒業生・学生・教員の活躍（製造学科） |
|---------------------|---|---|
| 2005 (平成 17年) | 4月 ものづくり大学大学院 開学 4月 製造技能工芸学科3コースから6コース(8系)に改組 4月 建設技能工芸学科3コースから4コースに改組 4月 第1回 ものづくり大学大学院入学式を挙げる | 6月 NHK 大学ロボコン出場 8月 ループゴールドバグマシンコンテスト優勝 11月 TOKYO DEDIGNER'S WEEK 初出展 |
| 2006 (平成 18年) | 7月 キングモンクット工科大学 (King Mongkut's Institute of Technology North Bangkok) (タイ国) と協定締結 3月 正門前バス待合所開所  3月 第1回 ものづくり大学大学院修了式を挙げる | 5月 エコランカー大会出場 9月 全日本学生フォーミュラ初出場 9月 技能検定機械加工2級埼玉県優秀賞 (佐成 弘) |
| 2007 (平成 19年) | 4月 事務局学務部の教務課及び情報課を教務・情報課に改組、入試課を設置 6月 埼玉県立久喜工業高校と教育連携協定締結 10月 泰日工業大学 (Thai-Nichi Institute of Technology) (タイ国) と協定締結  1月 埼玉県立熊谷高等技術専門校と教育連携協定締結 1月 千葉県工業系高大連携協定に加盟 3月 第二連絡橋「野村東太橋」開通 | 6月 NHK 大学ロボコン 2007 準優勝 9月 全日本学生フォーミュラ出場 (デザイン部門2位) 9月 技能検定機械加工2級埼玉県優秀賞 (川口悟史、名取宋弥、安田 慎)   |
| 2008 (平成 20年) | 8月 東京都立工芸高校と教育連携協定締結 11月 泰日工業大学 (Thai-Nichi Institute of Technology) (タイ国) と交換留学に関する覚書を締結 2月 NSTDA (National Science and Technology Development Agency) (タイ国) と技術交流に関する覚書を締結 3月 「たくみの心」(多目的広場) 竣工  | 6月 NHK 大学ロボコン出場 特別賞 7月 第1回 MONO からくりマシンコンテスト 開催 (製造技能工芸学科Fゼミ2008～) 9月 技能検定機械加工2級埼玉県優秀賞 (飯田紘子、張 博、高橋健二) 10月 NPO 法人埼玉 SOHO 起業家協議会主催 第4回懸賞付学生論文 埼玉県知事賞受賞 (大竹雄介)  10月 埼玉起業家学生論文埼玉県知事賞受賞 (大竹伸和) |

| 卒業生・学生・教員の活躍（建設学科） | 特別公開講座 |
|---|--|
| <p>6月 日本コンクリート工学協会主催「第2回コンクリートアートミュージアム」立体部門金賞受賞（内海範一、丸山大祐、小田新二）</p>  <p>11月 技能五輪全国大会地方大会（予選・建築大工）埼玉県知事より成績優秀者表彰（古屋正人、星野公亮、郷拓郎）</p> <p>11月 技能検定建築大工3級埼玉県知事より成績優秀者表彰（原聖光、橋野ふみ、阿多由佳子、金箱隼也、若林廷充、佐山拓也、箕輪絵里、加藤香菜恵、大塚祐治）</p> <p>11月 第2回住まいのデザインコンテスト優秀賞受賞（高橋邦明）</p> | <p>12月 埼玉県経営者協会と共催の特別公開講座（梅原猛氏）を開催「ものづくりとしての円空」</p> <p>2月 行田市と共催の特別公開講座（宮川泰夫氏）を開催「魅力ある街とは～のど自慢12年の旅から～」</p> |
| <p>8月 第2回若年者ものづくり競技大会建築大工敢闘賞受賞（後藤保樹）</p> <p>10月 第44回技能五輪全国大会建築大工敢闘賞受賞（田島宏晃、古屋正人）</p> <p>11月 技能五輪全国大会地方大会（予選・建築大工）埼玉県知事より成績優秀者表彰（出井慎一、郷拓郎）</p> <p>11月 技能検定建築大工2級埼玉県知事より成績優秀者表彰（古屋正人）</p> <p>11月 技能検定建築大工3級埼玉県知事より成績優秀者表彰（森美有貴、加藤大樹、栗原由貴）</p> <p>3月 日本建築仕上学会優秀修士論文賞受賞（鈴木大介）</p> | <p>1月 埼玉県経営者協会と共催の特別公開講座（蛭川幸雄氏・上田清司・野村東太氏）を開催「人づくりものづくり 地域づくり ～それぞれの挑戦～」</p> <p>3月 行田市と共催の特別公開講座（吉川英治氏）を開催「世直しボクサーの平和への願いを行田のまちへ」</p> |
| <p>10月 第10回建設埼玉組織内訓練校競技大会 埼玉県知事賞（古屋正人）、埼玉県職業能力開発協会会長賞（岡野大）</p> <p>11月 技能検定建築大工3級埼玉県知事より成績優秀者表彰（板橋悠、齋藤雄斗）</p> <p>11月 技能五輪全国大会地方大会（予選・建築大工）埼玉県知事より成績優秀者表彰（田島宏晃）</p> <p>3月 2007年度日本建築学会関東支部研究発表会「若手優秀研究報告賞」受賞（森田鉄也）</p> <p>3月 第45回技能五輪全国大会建築大工 敢闘賞受賞（田島宏晃）、銅賞受賞（古屋正人）</p> | <p>9月 行田市と共催の特別公開講座（三浦雄一郎氏）を開催「人生はいつも『今から』～75歳 エベレスト再挑戦～」</p>  <p>2月 埼玉県経営者協会と共催の特別公開講座（澄川喜一氏）を開催「日本のものづくり」</p> |
| <p>8月 第3回若年者ものづくり競技大会建築大工金メダル、厚生労働大臣賞受賞（橋本紗希）</p>  <p>10月 第11回建設埼玉組織内訓練校競技大会 埼玉県知事賞受賞（田島宏晃）</p> <p>第46回技能五輪全国大会家具敢闘賞受賞（外山紗江）</p> <p>11月 技能検定左官3級埼玉県知事より成績優秀者表彰（仁田香織、白川麻理子、岡田愛美、時津麻知子、石川大樹、鈴木康平、金子高文、田中康介）</p> <p>11月 技能検定建築大工3級埼玉県知事より成績優秀者表彰（鴻巣裕也）</p> <p>11月 彩の国青年マイスター表彰（古屋正人）</p> <p>11月 第16回技能まつり競技大会 建設埼玉技能士会会長賞（田島宏晃）</p> | <p>11月 行田市と共催の特別公開講座（矢内理絵子氏）を開催「戦いは最後の5分間にある」</p> <p>3月 埼玉県経営者協会と共催の特別公開講座（椎橋章夫氏）を開催「Suicaが世界を変えるー新しい社会インフラ創造への挑戦ー」</p> |

| 年度 | 大学の沿革 | 卒業生・学生・教員の活躍（製造学科） |
|---------------------|---|--|
| 2009 (平成 21年) | <p>4月 製造技能工芸学科6コース（8系）から4コースに改組</p> <p>4月 建設技能工芸学科4コースの名称変更</p> <p>4月 就職支援本部を設置</p> <p>8月 ものづくり大学通信創刊</p> <p>3月 埼玉県立吹上秋桜高校、埼玉県立鴻巣高校、埼玉県立鴻巣女子高校、大東文化大学と2大学3高校の教育連携協定締結</p> <p>3月 調整池・浮橋「坂東太郎橋」開通</p> | <p>9月 全日本学生フォーミュラ大会（私立大学5位）日本自動車工業会会長賞受賞</p>  <p>9月 技能検定機械加工2級埼玉県優秀賞（石川尚幸）</p> <p>10月 ボックスカートレース「RED BULL BOX CART RACE TOKYO」第2位（製造学科二期卒業生チーム）</p> <p>11月 振り込め詐欺防止装置 埼玉県警より感謝状 第13回スターリングテクノロジー初出場 MDクラス11位</p> <p>12月 全国手作り楽器アイデアコンテスト09優秀賞受賞</p>   |
| 2010 (平成 22年) | <p>4月 「学校法人国際技能工芸機構」を「学校法人ものづくり大学」に変更</p> <p>4月 製造技能工芸学科学習支援室を設置</p> <p>6月 埼玉県立寄居城北高校と教育連携協定締結</p> <p>6月 ものづくり大学紀要創刊</p> <p>8月 東京都立総合工科高校と教育連携協定締結</p> <p>8月 埼玉県立熊谷工業高校と教育連携協定締結</p> <p>8月 埼玉県立進修館高校と教育連携協定締結</p>  <p>12月 埼玉県立小鹿野高校と教育連携協定締結</p> <p>2月 埼玉県立秩父農工科学高校と教育連携協定締結</p> | <p>4月 振り込め詐欺防止シミュレーションソフト埼玉県警より感謝状</p>  <p>9月 全日本学生フォーミュラ大会（総合18位）日本自動車工業会会長賞受賞</p> <p>9月 技能検定機械加工2級埼玉県優秀賞（鈴木琢也）</p> <p>10月 埼玉起業家学生論文さいたま市長賞受賞（小谷野翼）</p> <p>11月 学生フォーミュラマシン「MF-005d」がフォーミュラニッポン最終戦（鈴鹿サーキット）のデモ走行に参加</p> <p>11月 第14回スターリングテクノロジー出場 MSクラス28位</p>  |

| 卒業生・学生・教員の活躍（建設学科） | 特別公開講座 |
|---|---|
| <p>4月 (社)埼玉建築設計監理協会主催「第9回卒業設計コンクール」審査員特別賞受賞（栗原由貴）</p> <p>9月 第25回全国青年技能競技大会 金賞・厚生労働大臣賞・鳥取県知事賞・米子市長賞・全建総連委員長賞受賞（田島宏晃）</p> <p>10月 第47回技能五輪全国大会 家具敢闘賞受賞（野沢周平）、金賞受賞（外山紗江）</p> <p>11月 技能五輪全国大会地方大会（予選・家具）埼玉県知事より成績優秀者表彰（野沢周平）</p>  <p>11月 技能検定造園3級埼玉県知事より成績優秀者表彰（緑川和寿、角田脩一、柴原大受、関根弘樹）</p> | <p>12月 行田市と共催の特別公開講座（丸山晃氏）を開催「埼玉の玉はどこへいった？」</p> <p>2月 埼玉県経営者協会と共催の特別公開講座（吉村作治氏）を開催「エジプト発掘の魅力～エジプト調査隊・発掘レポート～」</p>  |
| <p>7月 行田市総合福祉施設「やすらぎの里」中庭改修事業に協力し、行田市市長から感謝状（横山研究室）</p> <p>7月 北条鉄道田原駅（兵庫県）駅舎設計施工により、北条鉄道、河西市から感謝状（上田晃弘、小澤良洋、小林優平 他）</p> <p>8月 第5回若年者ものづくり競技大会木材加工 銀賞受賞（渡辺薫恵）、銅賞受賞（榎本将紀）</p>  <p>10月 第1回全国合板1枚作品コンペ 一般の部 優秀賞（西田雄紀）</p> <p>10月 第48回技能五輪全国大会 建築大工敢闘賞受賞（橋本紗希、上田晃弘）、とび銅賞（新里靖）</p> <p>11月 技能五輪全国大会地方大会（予選・建築大工）埼玉県知事より成績優秀者表彰（橋本紗希）</p> <p>11月 技能五輪全国大会地方大会（予選・とび）埼玉県知事より成績優秀者表彰（新里靖）</p> <p>11月 彩の国青年マイスター表彰（新里靖）</p> <p>11月 技能検定建築大工3級埼玉県知事より成績優秀者表彰（大関卓史）</p> <p>(社)日本家具工業連合会・技能競技大会振興功績者表彰（赤松教授）</p> <p>1月 「椅子の日本人デザイナー65人」として、株式会社ART BOX インターナショナル発行の「ART BOX Vol.14 Chair（チェア&テーブル デザインファイル）」に作品掲載（宮向健司）</p> <p>2月 東京都左官職組合連合会杉並支部 伝統的左官技術・技能貢献賞（片平秀・星野絢子）</p> <p>2月 第5回彩の国人にやさしいまちづくり賞 活動・アイデア部門 埼玉県知事賞（大島研究室）</p>  <p>3月 2010年度日本建築学会関東支部研究発表会「若手優秀研究報告賞」受賞（高梨洗平）</p> <p>3月 2010年度日本建築仕上学会「学生研究奨励賞」受賞（高梨洗平）</p> <p>3月 技能グランプリ（建築大工職種）敢闘賞（田島宏晃）</p> | <p>12月 埼玉県経営者協会及び行田市と共催の特別公開講座（和田竜氏・利根忠博氏・工藤正司氏・神本武征氏）を開催「のぼうの城・和田竜氏に聞く一現代のあるべきリーダー像とは？」</p> |

「製造学科10年のあゆみ」

2009年度～2010年度 製造技能工芸学科（現製造学科）長 龍前 三郎

1. 学科の目的及び名称

製造学科は、2000年12月にもものつくり大学が文部省より大学設置認可を受ける際、大学の設立基本理念のもと、「技能と技術を融合した実践的な技能工芸に関する教育及び研究を行い、加えて豊かな社会性・創造性・倫理性を身につけた技能技術者を育成する」という目的を、材料・機械・電気・情報など広範なものづくりを対象に実現する学科としてスタートした。このことから、学科の名称は従来のような学問分野名ではなく、工業製品の製造・生産に必要な実践的スキル・技術全般という意味から「製造技能工芸学科」とし、学科の教育目的も「製造技能技術者としての広い視野に立って提案する人材、個別の技術を様々な分野に応用し新しいものを創り出す人材、実際にものをつくる側からの知見をフィードバックする人材、基盤技術、先端技術を支える人材等の育成」と設定した。

以来、学科の目的はこれを堅持し、目的に基づいて教育・研究及び社会貢献を行ってきたが、後述する入学志願者数・入学者数の変遷（主として減少）の一因として学科名称の問題が度々指摘されるようになり、2009年度から本格的に議論を開始した。わかりにくさの改善、名称のつけ方における両学科の統一性、そして開学以来の名称の定着性を勘案して、これまでの学科名称から学部名称と重複する「技能工芸」を除き、「製造学科」と変更するための所要の手続きを終えて、2011年4月1日より実施した。

2. 学科の人員構成

2-1 学生数

開学以来2010年度まで製造学科の入学定員は180名であり、これに対して各年度の入学者数は表1の通りに変遷している。年度ごとの波があるものの、'07年度から減少傾向が続き'10年度では100名を下回った。10年間を通して見ても、180名の定員を充足したのは'05年度のみであり、2011年度より入学定員を150名に削減した。

表1 製造学科年度別入学者数 (単位：人)

| '01年度 | '02年度 | '03年度 | '04年度 | '05年度 | '06年度 | '07年度 | '08年度 | '09年度 | '10年度 | '11年度 |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|----------|
| 175 (5) | 130 (2) | 155 (3) | 142 (2) | 186 (3) | 176 (4) | 137 (6) | 142 (5) | 147 (3) | 92 (4) | 126 (2)* |

()内は女子学生数 (内数)

*2011年度は入学定員 150名

入学試験については、開学年度のみは一般入試（学科試験・総合試験）のみで選抜を行ったが、2年目からは推薦入試・一般入試（センター利用を含む）・AO入試を実施している。開学時から社会人や家業後継者及び外国人留学生に対しては別枠で入学試験を実施してい

るが、当初よりほとんど志願者がいない状態である。本学の使命と大学の国際化への対応を考えれば、社会人、後継者及び留学生入学者の確保に向けた対策が急務である。一方、入学前の教育課程では工業高校出身者の絶対数が減少する傾向にあり、入学者数減少の要因となっている。そのため、2004年度で60%弱であった普通科高校出身者の比率が年々増加し、2011年度では80%以上に上っており、ものづくりの経験を持たない入学者の比率が増加している。

入学者の出身地域は当初より本学所在地である関東が大半を占めているが、ほぼ全国にわたっている。ただし、この10年間で東海や近畿、中国地方からの入学者は減少傾向にある。

表2 製造学科年度別卒業生数及び退学者数 (単位：人)

| | '01年度 | '02年度 | '03年度 | '04年度 | '05年度 | '06年度 | '07年度 | '08年度 | '09年度 | '10年度 |
|------|-------|-------|--------|---------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 卒業生数 | | | | 127 (4) | 97 (1) | 117 (2) | 121 (2) | 144 (3) | 141 (3) | 110 (6) |
| 退学者数 | 2 (0) | 5 (0) | 18 (0) | 29 (1) | 23 (0) | 26 (0) | 25 (0) | 31 (0) | 34 (1) | 29 (0) |

()内は女子学生数 (内数)

表2に製造学科の2010年度末までの卒業生数、及び各年度の退学者数の変遷を示す。毎年100～140名程度の卒業生がある。これに対して、退学者数は、完成年度(2004年度)以降はほぼ30名前後で推移しており、入学者の20%前後が卒業に至らなかったことになる。

以上のように、製造学科の入学者数はこの10年間全体としては減少傾向にあり、出身地域や出身高校に多少の変化があった。また、退学者の割合はほぼ一定であり、入学者の資質と学科教育の相互作用としての教育成果には、大きな変化がなかったと言える。

2-2 専任教員

製造学科の基本構想は、開学前の設立準備財団のときから、吉川昌範東京工業大学名誉教授をはじめとして教員予定者6名(内、建設学科と共通の教員予定者1名)のスタッフの下にまとめられた。2001年4月の開学時にはこの6名に加え10名(内2名は両学科共通)の教員が着任し、教授10名、助教授3名、講師3名の専任教員でスタートした。その後、第1期入学者の学年進行に伴って順次教員が着任し、完成年度2004年4月の段階で教授12名、助教授6名、講師5名の構成となった。以後、学科の教員定数は23名(内1名は両学科共通、外国語担当)として推移し、2011年度の入学者定員削減に伴い、教員定員も退職に伴う補充をせず段階的に19名程度まで削減することになった。なお、開学時より学科の基礎づくりに精力的に活躍した堀聡教授が2008年10月ご逝去された。

専任教員の職位別構成は、若手である准教授(助教授)、講師とベテランである教授の比率が、2004年度でほぼ1:1であったものが、2011年度で1:3となっている。これまでは退職者がほとんどなく、昇任による自然な変化によるものであるが、開学当初からの教授陣

の定年退職が目前に迫っており、学科の目的達成に支障がないように補充していく必要がある。

表3 職位別教員数の変遷 (単位：人)

| | '01年度 | '02年度 | '03年度 | '04年度 | '05年度 | '06年度 | '07年度 | '08年度 | '09年度 | '10年度 | '11年度* |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 教授 | 10 | 11 | 12 | 12 | 10 | 12 | 14 | 13 | 16 | 16 | 15 |
| 助教授 | 3 | 6 | 6 | 6 | 7 | 7 | | | | | |
| 准教授 | | | | | | | 5 | 5 | 7 | 5 | 3 |
| 講師 | 3 | 4 | 5 | 5 | 5 | 3 | 3 | 3 | 0 | 1 | 2 |
| 助教 | | | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 助手 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 教務職員 | 0 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |

一方、本学科が「製造技能技術者」を育成することを目的としていることから、教員募集に際しては実務経験を重視して選抜を行ってきた。2011年度4月における専任教員20名の内実務経験を有する者は12名であり、他の大学工学系学科に比して顕著に高い比率を示している。これらの教員は主として機械（輸送機械を含む）・電機の製造業における研究・開発の担当経験者である。

専任教員の専門分野の構成は、大別すると2011年4月現在で加工系7名、機械設計・開発系7名、電気電子・制御系が4名、生産管理系1名、外国語1名となっている。

専任教員以外では、本学科が多数の教育・研究用の設備・機器を保有しており、その保守及び実習の補助を必要とすることから、2002年度に1名、2003年度からは現在まで2名の教務職員を配置している。

2-3 非常勤教員

本学及び学科の教育においては実務に関する実習等の占める割合が多い。このような授業では、少人数クラスで実施する必要があることや製品の製造にかかわる技能・技術の多様性から、専任教員以外に多数の現役実務者あるいは実務経験者に非常勤教員として担当いただいている。表4に年度ごとの非常勤教員数を示す。

表4 年度別非常勤教員数 (単位：人)

| '01年度 | '02年度 | '03年度 | '04年度 | '05年度 | '06年度 | '07年度 | '08年度 | '09年度 | '10年度 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 26 | 24 | 51 | 64 | 76 | 102 | 107 | 125 | 117 | 103 |

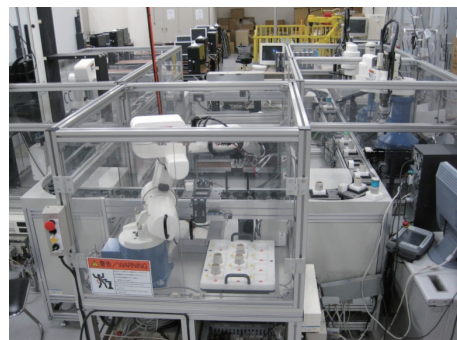
3. 設備・機器

製造業実務における実践的スキルを教育・研究するため、本学科では開学当初より多

数の設備・機器を有しており、中には企業からの寄贈によるものも多い。主なものに、レーザ加工機 放電加工機 ロボドリル 電気炉 原子間力顕微鏡 X線検査装置 クリーンルーム 3次元測長機 表面粗さ計 光干渉計 ロボット搬送システム などがある。



NC マシン (ロボドリル)



ロボットセンター (モデルプラント)

写真1 製造学科の教育設備の一部

これらの機器の中には導入から10年を経過し老朽化したり、その性能が先端的とは言い難くなっているものもある。10年を経過したことを機に、今後の学科の方向性を踏まえて、更新や入れ替え、新たな活用方法等を検討する必要がある。

4. 学科の教育

4-1 教育課程 (カリキュラム)

本学科のカリキュラムは、開学当初のものから2005年度及び2009年度の2回改編を行った。

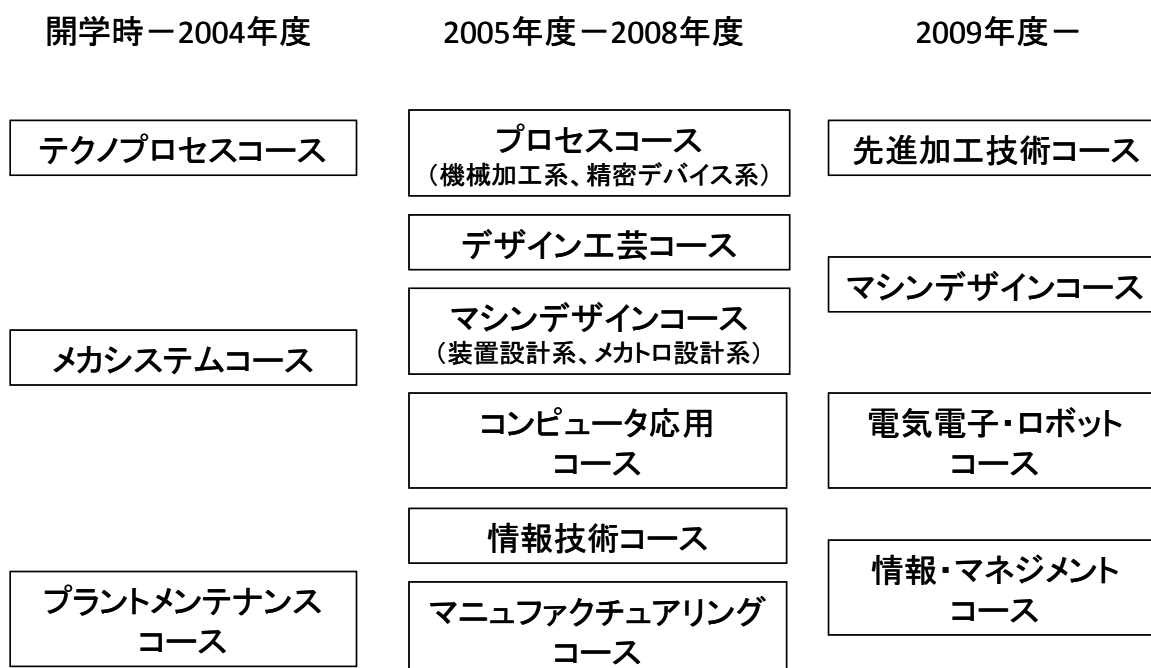


図1 製造学科コース編成の変遷

開学時は、1、2年次を基礎課程、3、4年次を専門課程とし、3年次からの専門課程には3つの履修モデルコースを設定した。「テクノプロセスコース」は加工技術を中心とした技能技術を、「メカシステムコース」は機構や機能の設計における技能技術を、「プラントメンテナンスコース」は自動化や保全などの生産管理における技能技術をそれぞれ習得するためのコースとなっている。基礎課程では専門課程で必要とされる各種の工学基礎科目と共に、英語・人文科学・社会科学等の教養科目が用意された。

2005年度からは、学生が習得する技能技術の完成像をわかりやすくする目的から、専門課程の履修モデルコースを技術分野別に6コース8系に区分し、2年次から履修するように改めた。用意したコースは加工を主とする「プロセスコース」(機械加工系、精密デバイス系)、加工される素材の扱いとインダストリアルデザインのための「デザイン工芸コース」、設計を主とする「マシンデザインコース」(装置設計系、メカトロ設計系)、設計のための数値解析を主とする「コンピュータ応用コース」、生産技術を主とする「マニュファクチャリングコース」及びソフトウェア開発を主とする「情報技術コース」である。一方、基礎課程に数学や多数の工学基礎科目を用意するなど、入学者の学力不足と専門課程のための基礎力の強化を図った。

このカリキュラムにより、完成像が理解しやすくなり学生のコース選択に明確な動機付けを与えることになったが、コース希望者の偏り、コース間課程修得難易度の差異、科目数の増加による教員負荷の増加や設備・機器等の配当などが問題となるようになった。そこで、2009年度より現行のカリキュラムに移行した。コース細分化による弊害を避けつつ、初期カリキュラムにおける完成像のわかり難さを改善するものとして編成し、3年次から履修することとした。「先進加工技術コース」は製品の高精度化・高品質化を実現する製造技術を、「マシンデザインコース」は機能的で確実かつデザイン性を実現する設計技術を、「電気電子・ロボットコース」は高機能・高付加価値を実現する研究・開発を、「情報・マネジメントコース」は効率的でスマートなものづくりとそのマネジメントを実現することをそれぞれ習得目標としている。

以上のように、この10年の間に2度のカリキュラム改編を行ったが、学科の教育目的は不変であり、「製造技能技術」という学生にとって把握しにくい習得目標をいかにわかりやすく整理するかのための努力を重ねてきたといえる。

カリキュラムの中でも、ものづくりのための導入教育であるFゼミ(フレッシュマンセミナー)、各種技能技術の総合としての創造プロジェクト、実務を経験し理解を深めるインターンシップ、そして技能技術者としての自己の確立のための卒業研究及び制作は、10年間を通して常に教育の重要な柱であった。

Fゼミは開学から2007年度までは、ボートの製作を課題として安全教育、ボート製作にかかわる技術の学習、ものづくりの体験、そしてグループ作業を通じてのコミュニケーション能力や協力精神の育成を行ってきた。最終段階の競漕大会は初年度は利根川で、2年目からは荒川で実施し、学科の恒例イベントとして毎年盛り上がりを見せた。2008年度からは

課題をからくりの制作に変更して現在まで継続している。写真2にそれらの様子を示す。



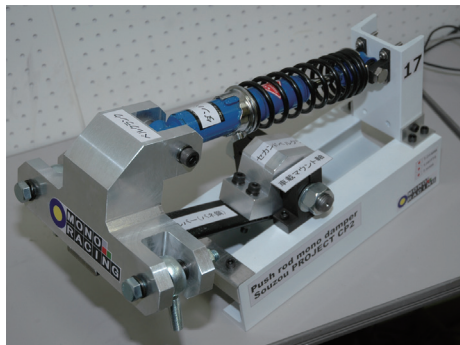
自作ボート競漕大会



からくりマシンコンテスト

写真2 Fゼミ（フレッシュマンセミナー）の様子

創造プロジェクトは2003年度から3年次第3、第4クォータに実施され、初期カリキュラムにおいては全学生に対して自由なものづくりプロジェクトチームを編成させて、市場調査、企画、設計、製作そして完成品の評価を学生自身に実施させた。



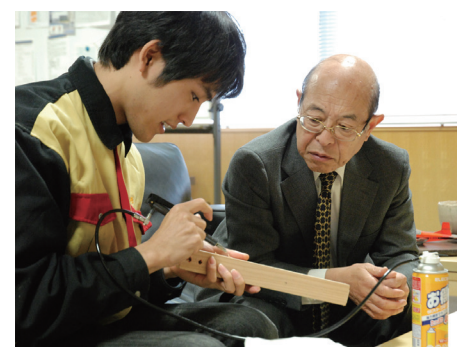
プッシュロッド・ダンパ



発泡スチロール粉碎機



バス接近自動認識通知装置



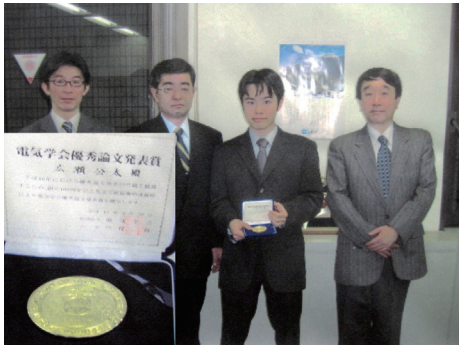
カセットポンプを利用した彫刻機
(埼玉県起業家協会学生優秀論文賞)

写真3 創造プロジェクト成果物の例

2007年度からは8コース制のカリキュラムの下、各コースが想定する技術分野内での開発プロジェクト実習に変更して実施した。コース毎に独自の開発課題を与え、熱機関（スターリングエンジン）の開発、金型の試作・評価、情報システムの設計・制作などをチームとして実施させたが、課題解決型のプロジェクトであったため、教育的な効果は認められたものの、イノベティブな成果が不足ぎみになった。2011年度からは新カリキュラム対

応の3年次生が、再び「創造プロジェクト」として実施する。写真4に創造プロジェクトの成果物の例を示す。

「卒業研究及び制作」については、カリキュラムの変遷に関わらず、一貫して教員指導の下でものづくりに関する広範な分野において研究・開発の成果を上げてきた。これらの中には、学会で高い評価を得た研究や指導教員を介して企業で実用化された開発などがある。なお、インターンシップについては別稿に詳細が述べられているため省略する。



保守作業における知識獲得システム
(電気学会優秀論文発表賞)



オト靴の開発
(全国手作り楽器コンテスト優秀賞)

写真4 卒業研究及び制作における成果の例

4-2 教育支援活動

① 学科支援学生プロジェクト



エコランカー



板金技能



東京デザイナーズ・ウィーク



学生フォーミュラ

写真5 学生プロジェクト

開学時より、本学にはものづくりに意欲的な学生が入学し、ものづくりに関わる多くの課外活動が行われてきた。当初はクラブ・サークル活動や自主活動としてスタートしたが、2006年度から学科支援学生プロジェクト制度とし、製造学科としてその目的や活動内容、実施計画などを評価し、有意義であると認めた課外活動に対して資金援助をするものとした。現在までに十数のプロジェクトに対して支援を行った。中でも「ロボコンプロジェクト」と「学生フォーミュラプロジェクト」は本制度が開始される前から活動を続けており、全国レベルで優秀な成果を上げている。

② 資格取得支援

本学科は開学以来、ものづくりに関わる技能・技術の習得に対して、授業内外において資格取得のための教育支援を行ってきた。

- ・技能検定 機械加工（旋盤）2級
- ・技能検定 機械加工（溶接）2級
- ・安全管理者選任時研修修了資格
- ・電気主任技術者
- ・CAD設計技術者
- ・Webデザイナー

また、TOEIC認定試験に関しては英語の科目において関連の授業を実施したり、得点により単位認定を行うなど、成績向上への支援を行っている。

5. 研究活動

地域産業と密着した実用的研究が多いのが本学の特徴であり、ものづくり研究情報センターを通じた企業との研究活動が盛んである。

表 5 科学研究費補助金採択状

| 研究種目 | 研究代表者 | 職(当時) | 期間 | 研究課題名 |
|---------|-------|-------|-----------|--------------------------------------|
| 基盤研究(C) | 市川 茂樹 | 助教授 | 2002-2003 | セラミック軸受の高温における定格寿命及び摩擦 摩耗特性に関する研究 |
| 基盤研究(C) | 吉川 昌範 | 教授 | 2002-2003 | 気相成長ダイヤモンドの合成及び機械的特性の 評価 |
| 基盤研究(C) | 堀 聡 | 助教授 | 2003-2004 | 人間の行動から保守技能・知識を獲得する手法 に関する研究 |
| 基盤研究(C) | 山崎 敦子 | 助教授 | 2004-2006 | 海外ものづくり現場における英語使用についての ESP調査と分析 |
| 基盤研究(C) | 山崎 敦子 | 教授 | 2007 | 中小ものづくり企業における英語使用に関するE SP調査と分析 |

しかし一方で、たとえば科学研究費補助金（科研費）に採択されるような研究が少ないのは否めない。これまで科研費に採択された研究は表5に示すものにとどまっている。外部からの研究資金調達は今後ますます必要になってくる。科研費等、競争的研究資金の獲得にも力を入れなければならない。

なお、本学科教員は製造技能技術に関わる多分野において、実務関連の実績を有する者が多く、学会活動のほか、技能五輪を始め、各種技能資格の審査員、審査員長を務める教員が多いのが特徴である。

6. その他の学科活動

6-1 国際交流

2007年に学術交流協定を結んだ泰日工業大学とは2008年度から学生交流を開始し、先方が主として製造業系の工業大学であることから、毎年第1クォータに4名の学生と1名の教員が製造学科で研修（学生は短期留学）を行っている。本学で履修した授業科目については泰日工業大学で単位認定される。また、本学からは3年次学生をインターンシップAとしてタイに派遣し、大学を拠点として現地企業での研修等を実施している。

なお、2010年度には、サウジアラビアからの留学生の受け入れについて検討を開始した。

6-2 社会貢献

本学科は製造業における実務経験教員が多く、また実習用に実務レベルの設備・機器を多数備えていることもあり、未就業者への技術訓練等に積極的に取り組んでいる。当初より、本学ものづくり研究情報センターを通して埼玉県産業労働部から委託された訓練プログラムを毎年実施してきたが、最近では大学新卒未就職者支援対策としての基金に基づく、技術系キャリア教育訓練プログラムも実施するようになった。

6-3 地域貢献 他

地域貢献については、開学以来行田市をはじめ近隣自治体や埼玉県、あるいは本学と高大連携協定を締結している高等学校等との連携を密にして、地域イベントへの学生・教員の人的支援や、授業等の成果物の寄贈、教育活動への協力などを行ってきた。また、本学科の特色ある授業内容を広く役立てていただく観点から、埼玉県のリカレント教育に参加し、毎年一般の方が受講されている。

これらの活動の内には、その貢献が大なることを評価され、表彰や感謝状を受けたものも多い。主な地域貢献活動を表6及び写真6に示す。

また、2006年度からは県立高等学校教諭の研修を委託されている。これまでに5名の工業高等学校教諭がそれぞれ1年間ずつ本学に派遣され、終了後は研修の成果を生かして活躍されている。

表6 主な地域貢献活動リスト

| 名称 | 実施年度 | 連携先 | 内容 |
|------------|-----------|---------|------------------------------|
| マンガカーレース | 2004～現在 | 行田市 | 市内の小学生を対象とした模型自動車製作指導と競技の実施。 |
| 中学生ロボコン | 2002～2005 | 行田市、埼玉県 | 中学生チーム対象のロボコン運営と製作指導。 |
| ものづくり教室 | 2005～ | 行田市 | 市民を対象にした彫金や鍛金などの作品制作の指導。 |
| 市民大学 | 2007～ | 行田市 | 市民を対象とした各種講座の講師を担当。 |
| 岩槻人形プロジェクト | 2007～ | 岩槻商業高校 | 高校生と学科学生のコラボによる人形制作と指導。 |
| 公立高校教員研修 | 2006～2010 | 埼玉県 | 1年間の内地留学による研修指導。累計5名。 |
| 寄贈品の制作 | 2008～ | 行田市 | 行田市の景観をつくる鑄造オブジェ等の製作と寄贈。 |
| 防犯への協力 | 2009～2010 | 埼玉県警察 | 携帯電話の電波を検知する振込め詐欺防止装置の開発。 |



岩槻人形プロジェクト



行田市に寄贈した鑄造オブジェ

写真6 地域貢献活動の例

最後に

これまでの10年間、未整備や不十分であった制度や設備は、年々改善され、また教育成果も上げてきたと思う。しかしながら、本学開設に当たって想定された社会動向は、経済、産業及び教育いずれにおいても大きく変化している。世の中の動向が不安定である以上、もとより現在の状況に即時的に反応する必要はないと考えるが、社会的存在である大学の一組織として製造学科もその社会的役割を改めて確認し、50年あるいは100年先までを想定して、学科の目的や教育・研究、社会貢献の在り方を、根本から再検討しなければならないと思う。

「建設学科10年のあゆみ」

2009年度～2010年度 建設技能工芸学科（現建設学科）長 白井 裕泰

1. 建設学科の教育

1-1 教育の理念

①学科設置の意義

わが国の建設産業は、江戸時代以前から続く木造建築や左官、指物などの建築と石積や築堤、掘割などの土木の歴史を基礎として、明治以降西欧から導入した鉄筋コンクリート造や鉄骨造、煉瓦造などの組積造、ダムや橋梁などの大型構造物の技術を重ね、さらに現代の免震工法やシールド工法などの先端技術が加わる重層的な流れの中で、様々な技能者を必要とし、育成してきた。

しかし、戦後復興期から高度成長期へ至る産業・経済構造の中で、スクラップアンドビルド的な量産型より省力簡略型の技術を追求する傾向にあつて、必ずしも社会的、文化的付加価値の高い良好な建設ストックを形成しておらず、また、そのための良質の技能を尊重してきたとは言い難い。

したがって、既に伝承されてきている技能と一層の発展が予測される技術を融合させ、さらに経済、芸術、マネジメントなどの知識を下敷きに、それを応用、展開してより良いモノと技術を、次世代に伝えることのできる技能工芸に携わる人材の育成に力を注ぐことは、緊急かつ必要不可欠の課題である。このような人材を育成する建設技能工芸学科（2011年度建設学科に改称）設置は極めて重大な意義を有している。

②学科の目標

建設業の社会的な意義と役割の理解と、広く建設に必要な基礎的な技能および知識の上に、社会の要請と各自の適性に応じた専門的な技能工芸を修得させ、総合的に建設現場の運営のできる人材や特定の技能に熟達した人材として、実践的な役割を果たす専門的技能工芸者を育成することを目標とする。

③履修モデルコース

3年次以降、各専門分野の技能技術および専門知識の修得を目的に、木造建築コース（旧ティンバーワークコース）、都市・建築コース（旧ストラクチャーコース）、仕上・インテリアコース（旧フィニッシュコース）、建築デザインコース（旧デザインコース、2005年度新設）の4つのモデルコースを設置している。

木造建築コースでは、木を中心とした素材を理解し、技能の伝承とあわせて新たな創意工夫を行い、木造系の建築物を総合的に建設する基礎技能・技術、さらに、伝統的建造物の復原修理、再建などの基礎技能・技術を修得するために、在来の木構造を主体とする組立造作に関わる専門技能および関連知識についての教育・研究を行う。

都市・建築コースでは、コンクリートや鉄などの材料や構工法、現場のマネジメント、構造物の維持管理の基本技能・技術を修得し、社会資本の有効活用にも配慮し、コンクリートや土石などの塑性系の材料を扱って構造物を築造することを主体に、鉄骨や石積みな

どを含めた専門技能および関連する知識についての教育・研究を行う。

仕上・インテリアコースでは、建造物の仕上げに関わる材料や製品、下地となる構造物との関係について理解し、様々な職種を統合するマネジメントのもとに、仕上げ、装備を施す基礎技能・技術を修得するため、湿式および乾式の材料、部品および装置などにより、建築物に仕上げ、装備を施すための専門技能および関連する知識についての教育・研究を行う。

建築デザインコースでは、木造・鉄筋コンクリート造・鉄骨造の各種建築物は、その基本的な形態、構造、仕上げから成立するものであり、それらを総合するデザイン力が求められることから、各種構造物の特性を踏まえてデザインする専門技能および関連知識についての教育・研究を行う。

1-2 教育上の特色

①教育システムの特徴

まず、1・2 学年ではものをつくってみることから始まり、ものづくりの喜びを知り、人間形成やものづくりに関する基礎教科および基礎実習を修得する。3・4 学年では、履修モデルコースに沿いながら、専門とする分野を中心に選択し、技能工芸と関連する知識を修得する。また1 回目の基礎インターンシップ（2 年 2Q）は、実際の現場体験を通し、自己の適性にあう進路選定に役立てる。2 回目の専門インターンシップ（4 年 1・3Q）では、専門技能、技術の修得レベルの確認をし、実践的技能工芸を体得する。

②めざすテクノロジスト像

社会人となってから、高度専門職業人（テクノロジスト）として、能力を実務で発揮していくためには、それに相応しい資格などを取得する必要がある。建設学科のカリキュラムは、技能士・施工管理技士・建築士・測量士などの資格を取得できる内容となっている。

③初年次教育

大学生の大衆化、入学の容易化、学力差の拡大、価値観の多様化などに対応するために、初年次教育関連科目を設置している。また創造プロジェクトⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳによって、継続的な精神的コンサルティング・ケア、履修科目指導などを徹底的に行う。

④生きたものづくり教育

学理に秀でた教員と実務に秀でた教員とのチームティーチングを編成し、このチーム構成により、勉学の中で座学・演習と実習・実験などを有機的に関連づける教育を行い、実践的実学を重視した教育を推進する。これにより、ものづくり教育を通して創造力・実践力を養う総合的教育を展開する。

⑤技能工芸者としての倫理教育

広い視野に立った真に有益なものづくりに必要な技能工芸者の社会に認知された倫理教育を展開する。

⑥マネジメント能力を養う教育

学内外の教育を通して、企画、開発、製作、管理などを総合的に教授し、ものづくり現場の管理能力を養う教育を実施する。

⑦在職者の修学に配慮したシステム

クォータ（3 ヶ月）ごとで完結するカリキュラム編成とし、クォータ単位の履修を可能にして、年間の受講期間の柔軟化を図る。

⑧地域社会との連携

建設学科の教育を広く地域社会に公開し、生涯学習に対する社会および市民の多様なニーズに答えることを目的とし、市民またはボランティアが行うものづくりに必要な技術・技能の修得を支援する目的から、ものづくり市民工房特別課程木造建築科を2010年度より開設している。この課程は、学校教育法に基づく文部科学省の履修証明プログラムであり、建築士指定科目を40単位修得したものは、二級建築士・木造建築士の受験資格が与えられる。

⑨地域社会への貢献

ものづくりに関わる社会貢献活動として、各方面で開催される「出前講座」や「ものづくり教室」などに積極的に参加し、また実習授業で制作された木製ベンチ・コンクリート遊具・東屋などや卒業制作で制作された作品を地域社会に寄贈している。そのことで学生の意識高揚に役立て、ものづくりへの社会認識を高めることに寄与している。

1-3 カリキュラムの構成

①カリキュラム構成の概念

建設学科が目標とする人材教育は、建設技能技術者として建設現場をとりまとめ、安全かつ的確にものを創り出す人材である施工管理技士および建築士、先人の優れた業績を越えながら新しい技能や技術でものを創り出す創造力豊かな人材である技能士、ものづくりの組織を起し、広い視野で社会的な活動を行う先見性と経営力を備えた人材である企業経営者、すなわち専門職業人（テクノロジスト）の養成をめざしている。

技能士をめざす学生は、主に建築大工として工務店・ハウスメーカー、また家具・造園・左官職人として専門工事会社に就職を希望し、施工管理技士をめざす学生は、主に建築・土木・造園・設備の施工管理技士として総合建設会社、専門工事会社に就職を希望し、建築士をめざす学生は、主に1級・2級建築士、木造建築士、測量士として、設計・測量事務所、不動産会社に就職を希望する傾向がある。企業経営者をめざす学生は、建設関連会社での専門的・技術・知識を高めた上で、起業することになる。

建設学科のカリキュラムは、ものづくり大学の人材教育がめざすテクノロジスト像に対応して、コースごとの基礎・応用・総合の専門的・技術・知識を段階的に向上させるように関連科目を配当している

②カリキュラム構成の特色

2001年度カリキュラム構成表では、1・2年次に配当された専門講義系科目と専門実技系科目は、3年次の専門コースとの関連性が意識されていなかったが、2005年度以降専門コースとの関連性を意識するようになった。2010年度カリキュラム構成表によると、専門講義系科目、専門実技系科目があり、講義系科目と実技系科目の実施コマ数比率は43%:57%である。また1年から4年の課程を習熟度の内容によって、基礎（1年1Q-2年1Q）、応用（2年2Q-4Q）、総合（3年1Q-4年4Q）に分けている。

3年に木造建築、都市・建築、仕上・インテリア、建築デザインの各コースを設けていることから、専門講義系は各コース8~13科目、専門実技系は各コース12科目程度を配当し、充実を図っている。

今後については、専門講義系科目の中から一般教養科目と専門共通科目を峻別すること

が望まれる。

ところで2007年度に、多くの科目で科目名称をわかりやすく変更した。さらに2009年度入学生からは、建築士法改正に対応して建築士基礎インターンシップ、建築士専門インターンシップなどを新設した。また2010年度には、初年次教育に対応して創造プロジェクトⅡ・Ⅲなどを新設した。これらを含め、この間カリキュラムの充実を図るため、環境調査および実習、環境・設備および総合実習など33科目を新設した。一方、2010年度までに、構造物総合および実習Ⅸ、石造基礎および実習、木造応用および実習AI・II、BI～IV、建設文化、国際経済学、コンピュータ基礎および演習Ⅳなど、12科目をカリキュラム変更のため削除した。

1-4 コース名の変更

建設学科は、2001年度開学時において、3年次以降、各専門分野の技能技術および専門知識の修得を目的に、ティンバーワークコース、ストラクチャーコース、フィニッシュコースの3つのモデルコースを設置した。卒業要件として、各コースに開講されている科目から講義系9単位、実技系18単位を選択必修として取得する必要があるが、必ずしもコースに縛られて履修しなければならないわけではなく、科目履修にある程度自由度が認められていた。2009年度入学生からは、3年次モデルコースにおける科目の選択必修をはずし、科目履修の自由度を増加させた。ただし時間割の関係（同じ時間帯に複数の科目が開講されている）から完全に自由に履修できるわけではない。

設置基準の完成年度を終えた2005年度から、3年次に設置した3つのモデルコースにデザインコースを追加した。これは、1・2年次の実習を経験した上で建築デザインを志向する学生が相当数いることが確認されたので、建築デザイン関連のカリキュラムを充実させるために取った措置であった。

また開学して2サイクル8年を経過した段階で、2009年度からコース名を高校生に分かるように木造建築コース、都市・建築コース、仕上・インテリアコース、建築デザインコースと変更した。

1-5 学科名称の変更

ものづくり大学の入学者の定員は各学科とも180名であり、2001年度から2010年度の建設学科の入学者数は表1の通りである。

過去10年間で製造学科を含めた学部の定員360名を超えたのは、2005年度の387名のみであり、他の9年は定員割れの状態が続いた。また2001年度から2006年度まで定員を超えていた建設学科は、2007年度以降定員を割り続け、2010年度は定員の72%にとどまった。

表1 入学者数推移 (単位:人)

| | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 建設 | 181 | 207 | 193 | 201 | 201 | 182 | 166 | 146 | 129 | 129 |

この長期凋落の傾向に歯止めをかける1案として、建設技能工芸学科という名称が高校生にわかりづらいとの意見を汲み取り、また「技能工芸」が学部名称にあることから、2011年度から、建設学科というシンプルな名称に変更し、さらに定員を150名とした。

2. 建設学科教員の研究

2-1 研究成果

過去 10 年間に於いて発表された建設学科教員の著書、学術論文、学術講演、解説・報告・その他などの研究成果について概観する。

著書は、学術図書 30 件、学術報告書 13 件あり、学術報告書の出版も多いことが特徴的である。

学術論文は、日本建築学会計画系論文集 6 編、日本建築学会構造系論文集 7 編、日本建築学会環境系論文集 1 編、日本建築学会技術報告集 4 編、日本建築学会建築教育シンポジウム論文報告集 7 編、日本建築学会建築生産シンポジウム論文報告集 4 編、コンクリート工学年次論文集 11 編、土木学会建設マネジメント研究会論文集 3 編、土木学会安全問題研究論文集 2 編、ものづくり大学紀要 4 編などがあり、歴史・意匠系、コンクリート材料・構造系、環境・設備系、土木系の研究が多くみられた。

学術講演は、日本建築学会大会に 33 件、土木学会に 10 件、日本道路会議に 2 件、セメント・コンクリート研究討論会、デザイン学研究、安全工学協会に各 3 件、日本非破壊検査協会シンポジウムに 5 件、海外に 12 件などの発表があった。

解説・報告・その他として、「日本左官業組合連合会」に 10 件、「建築技術」に 8 件、「日本建築学会建築雑誌」に 6 件、「木の文化 FORUM」に 5 件、「日本建築学会シンポジウム」「日本コンクリート工学協会」「土木学会誌」に各 3 件、「建材フォーラム」「左官総覧」「全国解体工事連合会」に各 2 件、「環境情報科学」「木の建築」「(財) トステム建材産業振興財団」「強化プラスチック協会誌」「土木コスト情報」に各 1 件などの発表があった。

2-2 科学研究費補助研究

過去 10 年間に科学研究費補助金申請が採択された建設学科教員の研究は、表 2 の通りである。2002 年度から 2007 年度・2009 年度（2004 年度を除く）に 1 件の採択があり、2008 年度は 2 件、2010 年度は 4 件の採択があり、次第に採択数が増える傾向にある。また基盤研究(A)が 2 件採択されたのは特筆される。

表 2 科学研究費補助金決定者一覧（建設学科）

| | 研究代表者 | 職 | 2002 (千円) | 2003 (千円) | 2005 (千円) | 2006 (千円) | 2007 (千円) | 2008 (千円) | 2009 (千円) | 2010 (千円) | 研究課題名 |
|---------|--------|----|--------------|--------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|--------------|------------------------------|
| 若手研究(B) | 土居 浩 | 講師 | 1,300 | 800 | | | | | | | 幕末維新期日本における外国人墓地の成立に関する基礎的研究 |
| 基盤研究(A) | 白井 裕泰 | 教授 | | | (直)7,700 (間)2,310 | (直)9,200 (間)2,760 | (直)7,500 (間)2,250 | (直)7,500 (間)2,250 | | | 阮朝・太廟・隆徳殿の修復計画 |
| 基盤研究(C) | 佐々木 昌孝 | 講師 | | | | | (直)1,100 (間)330 | (直)500 (間)150 | (直)800 (間)240 | | 初期大工技術書に関する研究 |
| 基盤研究(A) | 白井 裕泰 | 教授 | | | | | | | (直)7,300 (間)2,190 | | 阮朝・太廟・昭徳殿の復原計画 |
| 基盤研究(C) | 北條 哲男 | 教授 | | | | | | | (直)1,800 (間)540 | | 炭素繊維材を用いた伝統的建築物の保存補修法に関する研究 |
| 若手研究(A) | 林 英昭 | 講師 | | | | | | | (直)3,100 (間)930 | | ベトナム中部の伝統木造建築の設計技術 |

3. 建設学科の社会連携および貢献

3-1 授業制作（卒業制作を含む）作品の寄贈

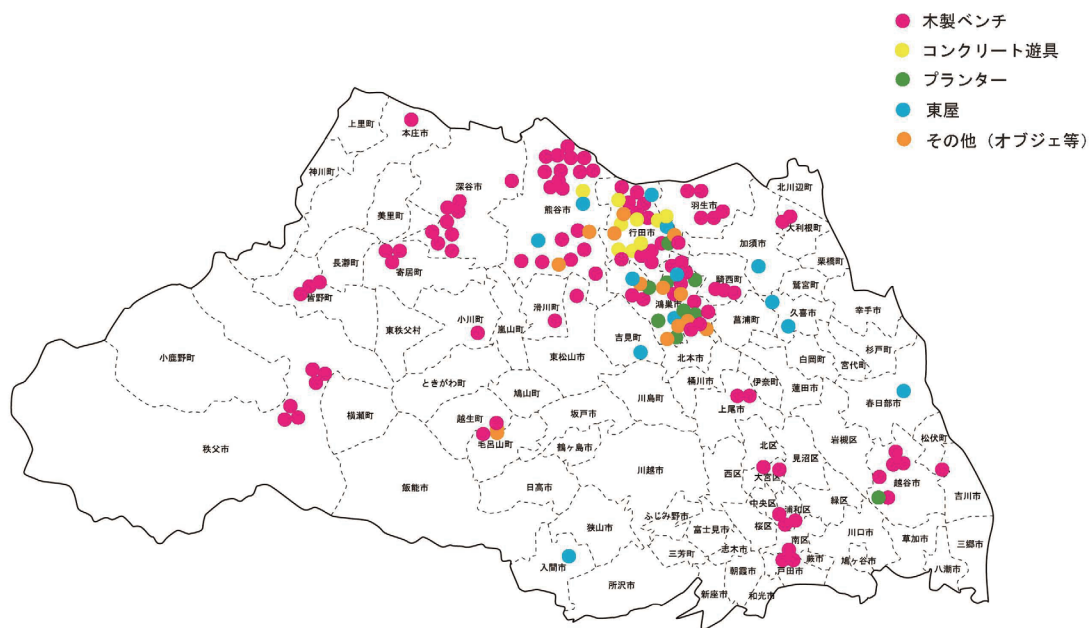
過去 10 年間に建設学科の授業で制作された作品を寄贈した主な寄贈先は表 3 の通りである。埼玉県内の寄贈先のみをプロットして図 1 にまとめた。設置先は、鴻巣市 30 件、行田市 27 件、熊谷市 16 件が多く、その他に越谷市 5 件、さいたま市・深谷市 3 件、上尾市・皆野町・国交省荒川下流河川事務所各 2 件、山口県岩国市・兵庫県加西市・羽生市・旧大里町・本庄市・旧大利根町・小川町・旧川本町・旧騎西町・松伏町・寄居町・旧都幾川村・埼玉県農林公園各 1 件などがある。埼玉県内の多数の会社や個人にも寄贈されたが、木造総合および実習で制作された東屋は、行田市、鴻巣市、国交省荒川下流河川事務所などの公園に 8 棟が移設され（写真 1・2）、とくにテレビ東京の「出沒！アド街っく天国」という番組で、抽選で東屋が寄贈されると放送したところ、70 名を越える応募があり、2010 年度に 10 棟の移設が行われた。



写真 1 行田市向町公園移設（2005 年 6 月） 写真 2 荒川河川敷移設（2007 年 4 月）

表 3 寄贈した主な授業制作作品

| 寄贈品 | 年度 | 主な寄贈先 |
|---------------------|-----------|--|
| テーブルベンチ | 2002～2007 | 小川町、埼玉県農林公園、越谷市、鴻巣市、大里町、行田市、本庄市、行田養護学校、学校法人栄学園埼玉栄高校など |
| コンクリート製遊具 | 2005～2007 | 行田市、国際十王交通、行田市自治会など |
| 東屋 | 2005～2010 | 鴻巣市、行田市、国土交通省荒川下流河川事務所、埼玉土建入間支部、テレビ東京アド街っく天国当選者など |
| コンクリート製 ゴミステーション | 2007～2010 | 行田市矢場 2 丁目公園、行田市真名板自治会、行田市一斎条自治会、行田市在家衛生協力会 |
| 木製ベンチ | 2006～2010 | 鴻巣市、埼玉県立上尾高校、国土交通省荒川下流河川事務所、大利根町、熊谷市、行田市、埼玉県秩父環境管理事務所、埼玉県花植木流通センター、吹上中央幼稚園など |
| 木製プランター | 2004～2010 | 彩の国まごころ国体鴻巣市実行委員会、鴻巣市、越谷市立荻島小学校など |



presented by dousoukai

図1 埼玉県における寄贈先

3-2 研究室活動としての社会貢献

研究室が行った主な社会貢献として以下のようなものがある。

- ・小野研究室：2005年度に、鴻巣市の子供神輿を修復・寄贈した。2006・2007年度に、吹上本町せせらぎ公園の水車小屋の建て替えをした(写真3)。2007年度に、行田本町の御飯屋を寄贈した。2007・2008年度に、鴻巣市中央せせらぎ公園に東屋・テーブルベンチ・太鼓橋を製作・寄贈した(写真4)。2009・2010年度に、鴻巣市常光公民館、つつみ学園などにプレイハウス・テーブル・掲示板・木製玩具などを制作・寄贈した(写真5)。2010年度に、熊谷市老人憩いの家などに滑り台、ターザンロープなどを制作・寄贈した。
- ・北條研究室：2005年度に制作した錦帯橋の模型を、2007年度に、山口県岩国市立の博物館「岩国徴古館」に寄贈した(写真6)。



写真3 鴻巣市吹上本町せせらぎ公園水車小屋



写真4 鴻巣市中央せせらぎ公園東屋

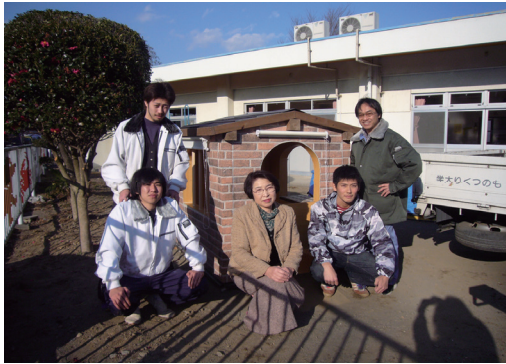


写真 5 鴻巣市つつみ学園プレイハウス

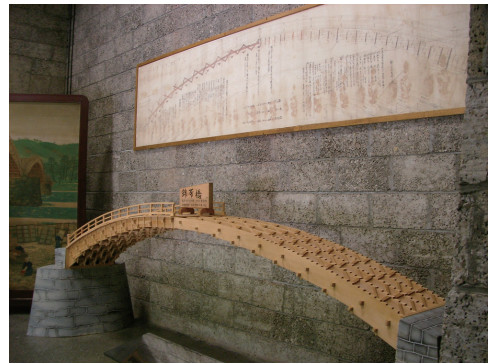


写真 6 岩国市立博物館錦帯橋模型

- ・大島研究室：2008 年度に、行田市障害者多機能支援施設「カフェギャラリーそれいゆ」基本設計を行った（写真 7）。その後この建物が建設され、また熊谷市障害者多機能支援施設「スペース K」の設計、テーブル・家具の設計制作を行った（写真 8）。これらの取組に対して 2010 年度に「彩の国人にやさしいまちづくり賞」の活動・アイデア部門埼玉県知事賞を受賞した。



写真 7 行田市障害者多機能支援施設



写真 8 熊谷市障害者多機能支援施設

- ・坂口研究室：2008 年度から 2010 年度にかけて、籠原駅・熊谷駅にイルミネーションを設置した（写真 9）。
- ・白井研究室：2010 年度に、熊谷市上之地区に竪穴式住居を復元した（写真 10）。
- ・深井研究室：2010 年度に、兵庫県加西市北条鉄道田原駅に待合所およびプラットホーム屋根を設計・施工した（写真 11）。
- ・三原研究室：2007 年度に、ジャパンフラワーフェスティバルさいたまにおいてドリームガーデンを設計した。2006・2008 年度に、吹上駅ロータリーに時計台を製造学科と共同制作により設置した（写真 12）。
- ・赤松研究室：2006 年度に、鴻巣市総合福祉センターにベンチ、テーブル、棚を制作・寄贈した。2008 年度に、吹上駅改札口前コンコースにベンチを制作・寄贈した。2010 年度に、鴻巣市中央公民館に椅子を制作・寄贈した。
- ・佐々木研究室：2010 年度に、鴻巣市中央公民館に椅子を制作・寄贈した。
- ・澤本研究室：2005 年度～2010 年度に、モルタル人形製作教室を開催した。



写真 9 熊谷市籠原駅イルミネーション



写真 10 熊谷市竪穴式住居



写真 11 加西市北条鉄道田原駅待合所



写真 12 鴻巣市吹上駅ロータリー時計台

・横山研究室：2007年度に、鴻巣駅東口公園を設計・施工し、フラワーボックス、テーブルベンチ、休憩所、竹垣などの施設を設置した（写真 13）。2009・2010年度に、行田市総合福祉会館「やすらぎの里」中庭に東側マウンド、リハビリテーションコース、水洗い場、サンドテーブルつき砂場などの施設を設置した（写真 14）。2010年度に、熊谷市平戸公園に休憩所「平戸のやすら木」の設置（写真 15）、熊谷市指定文化財根岸家住宅長屋門の修復を行った（写真 16）。また、鴻巣市役所に折りたたみテーブルを制作・寄贈した。



写真 13 鴻巣市鴻巣駅東口公園



写真 14 行田市総合福祉会館中庭



写真 15 熊谷市平戸公園「平戸のやすら木」 写真 16 熊谷市指定文化財根岸家住宅

3-3 大学内施設としての制作

大学内施設として、卒業制作および実習で制作した主なものは、以下の通りである（詳細は「キャンパス 10 年の変遷」を参照）。

- ・弓道場：卒業制作
- ・多目的広場の整備：鋼構造物仕上および実習で制作した。
- ・製造棟・建設棟第 1・2・3 連絡橋：構造物総合および実習で制作した。
- ・浮橋：構造物総合および実習で制作した。
- ・バス待合所：構造物総合および実習で制作した。
- ・コンクリート製倉庫および観覧席：RC 構造基礎および実習で制作した。
- ・木製柵：木造基礎および実習で制作した。

おわりに

建設学科の教育・研究・社会連携および貢献・就職について 10 年を振り返ってみた結果、教育に関しては、大学創設時の教育理念を忠実に遵守し、生きたものづくり教育を実践してきたと考える。しかし、大学の大衆化、入学の容易化、学力差の拡大、価値観の多様化に対応した初年次教育については、今後の組織的取組が不可欠である。また研究に関しては、各教員が研究成果をホームページに公表し、科学研究費補助研究の件数は次第に増加する傾向がみられる。地域社会との連携は、市民のものづくりを支援するものづくり市民工房を 2010 年度に開設し、また研究室単位で地域社会と連携したものづくりの実践を行っている。さらに地域社会への貢献は、学科の授業で制作した作品（卒業制作を含む）を行田市・鴻巣市・熊谷市などに寄贈している。この点は、ものづくり大学らしさが遺憾なく発揮されている。最後に建設学科の卒業生の就職は、過去 7 年間の就職率の平均が 93.6% と、比較的好調であり、大学でのものづくり教育を生かして、幅広い建設現場に多くの人材を送り出している。

このように 10 年間の建設学科を俯瞰してみると、概ね所期の目標を達成していると考えられるが、学生数は、2007 年度に定員 180 名を割って以来、減少傾向に歯止めがかからず、2010 年度は定員の 7 割に落ち込んでいる。建設学科における将来の課題は、詰まるところ学生数の確保にあるといっても過言ではない。教育内容を継続的にアップデートして、魅力ある教育を実施することにより、質の高い卒業生を送り出してゆくことが必要である。

「ものづくり研究情報センターにおける共同研究史」

ー開学から10年の歩みー

2009年度～2010年度 ものづくり研究情報センター長 東江 真一

1. はじめに

ものづくり大学ものづくり研究情報センターの大きな業務は、公的機関や企業とのひとつづくり・ものづくり連携事業、技術開発および技術相談、工業所有権取得、ならびに大学広報などを含む同センターの展示広報活動である。大学の使命には、学生への教育と共に外部との連携事業が挙げられ、これらの2つを両輪として実績をあげることが大学としての証になっている。この10年間を振り返ると、本センターは業績を確実に残して来ているといえよう。学生へのものづくり教育と研究とに絡み合っただけで大学の発展の屋台骨になっていると自負している。ここでは企業や公的機関との共同研究等の詳細な内容について述べる。

2. ものづくり研究情報センターの概要

本センターは、開学以来、本学が展開しているものづくりに関する情報の発信基地として、また産官学連携を推進するための機関として、その役割を果たしてきた。開学当初は、本館3階のA3050室で事務所を構えていたが、中央棟の完成とともに、現在の事務所がある中央棟3階に引っ越して業務を行っている。尚、現センター室には、旧センター室には無かった比較的大きな会議室が隣接していて、外部からの技術相談や学内での打ち合わせに使われ、研究情報センターの幅広い業務を遂行する上で大いに役立っていると同時に、資料を管理・保存するためのロッカースペースとしても重宝に使われている。

主たる業務としては、開学から8年間は、厚生労働省の委託調査研究が大きな比重を占めていたが、最近では、埼玉県産業労働部等から委託事業を通しての企業技術者の人材育成と雇用対策としての大学等委託訓練が予算上では大きな比重を占めるようになってきた。表1にこれまでの委託訓練コースの受け入れ人数の状況を示す。

上記の人づくり委託業務等とは別に、企業からの受託研究や共同研究に重きをおいている。これら1件1件の予算規模は小さくても、積み重ねれば大きくなるし、技術を通しての社会貢献であるので、大学の実力の見せ所でもある。同センターに配属された主幹と事務職員は、教員と企業とを結び付ける強力なサポート役を果たし、受託研究等を推進する上でおおいに役立っている。

初代ものづくり研究情報センター長は、平成13年度の開学から平成16年度の4年間は野村東太学長が兼務した。平成17年度から平成18年度の2年間は神谷聖志学部長が兼務し、平成19年度から平成20年度の2年間は製造技能工芸学科（現製造学科）の桜井大八郎教授が図書情報センター長と兼務で研究情報センター長として業務に当たった。平成21年度から平成22年度は、筆者がものづくり研究情報センター専任のセンター長として就任した。平成23年度からは、製造学科市川茂樹教授がセンター長として就任している。

表1 大学等委託訓練 受入状況

| 年度 | コース名 | 募集人数 | 入校者数 | 修了者数 |
|------|-------------------------|------|------|------|
| 2002 | コンピュータ応用技術(CAD/CAM/CAE) | 30 | 38 | 35 |
| | リフォームビジネス | 15 | 15 | 13 |
| | 高度金型製作 | 15 | 10 | 9 |
| 2003 | コンピュータ応用技術(CAD/CAM/CAE) | 30 | 27 | 27 |
| | リフォームビジネス | 15 | 18 | 17 |
| 2004 | コンピュータ応用技術(CAD/CAM/CAE) | 30 | 22 | 22 |
| | 高度金型(三次元CAD) | 15 | 6 | 6 |
| 2005 | コンピュータ応用技術(CAD/CAM/CAE) | 20 | 24 | 23 |
| 2006 | コンピュータ応用技術(CAD/CAM/CAE) | 24 | 24 | 21 |
| | コンピュータ応用技術(CAD/IT技術) | 24 | 24 | 24 |
| 2007 | コンピュータ応用技術(CAD/CAM/CAE) | 24 | 28 | 26 |
| | コンピュータ応用技術(CAD/IT技術) | 24 | 30 | 29 |
| 2008 | コンピュータ応用技術(CAD/CAM/CAE) | 30 | 30 | 23 |
| | コンピュータ応用技術(CAD/IT技術) | 30 | 30 | 26 |
| 2009 | 平成21年度機械系CAD設計製図(11月) | 20 | 31 | 31 |
| 2010 | 実践デジタルものづくり(9月) | 20 | 8 | 8 |
| | 建築CAD設計製図(10月) | 20 | 21 | 20 |
| | | | 合計 | 360 |

センター長が専属となって本センターの体制が強化された時期を見計らうように、埼玉県産学官連携支援ネットワークの幹事校になるなど、本センターの業務は地元埼玉県により密着するように発展してきている。このような体制の中、2009年度に中央職業能力開発協会から基金訓練を受託し、2010年度からは、表2に示すように、埼玉県産業労働部から「ものづくり未来人材カレッジ」や「企業ビジネス・イノベーション支援事業」などを、また、さいたま市や岡谷市からも人づくりのための委託事業を受託した。

表2 2010年度における埼玉県等からの受託

| テーマ | 委託元 |
|---|-------------------------------------|
| ものづくり未来人材カレッジ 「3次元CAD設計のための金属加工の講義と実習」 | 埼玉県商工労働部産業人材育成課 |
| ものづくり未来人材カレッジ 「光学に関する基礎理論と最新の設計・製造技術」 | 埼玉県商工労働部 産業人材育成課 |
| 「企業ビジネス・イノベーション支援事業」 | 埼玉県産業労働部 新産業育成課 (平成21年度に引き続いて受託) |
| さいたま市研究開発人材高度化タスクフォース事業 | さいたま市産業創造財団 |
| 岡谷市 技術交流会 | 岡谷市経済部工業振興課 |

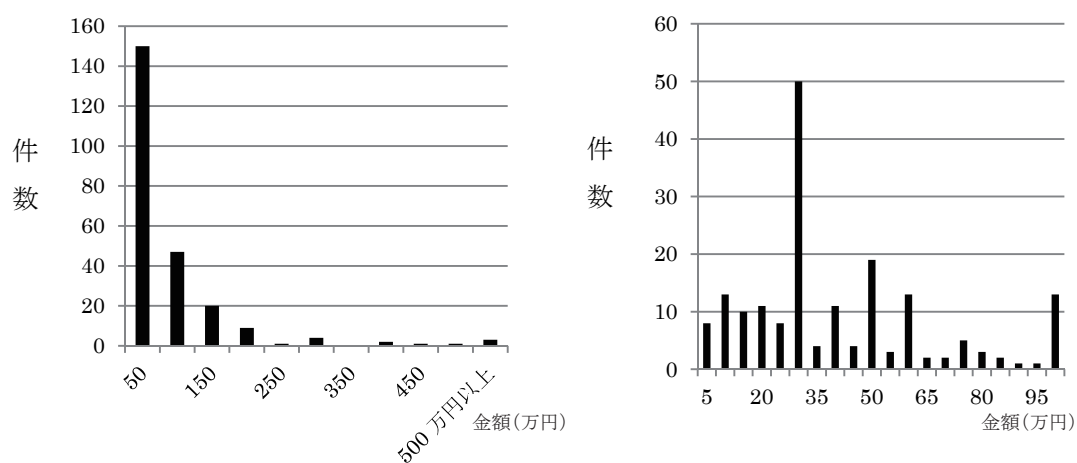
本センター事務局は、開学から2009年までの9年間を尾藤俊和氏が主幹として務められ、その基礎をつくった。2010年度は郡山力郎氏が主幹として就任し、2011年度からは、埼玉県庁出身の嶋野泰男氏が主幹に就任して、埼玉県内企業や県民に対する一層の社会貢献が期待されている。

3. 10年間の受託研究等の実績

表3に、過去10年間で受託額が大きかった受託研究、共同研究および奨励研究の3テーマを年度別に示す。表3では建設学科の教員が受けた研究テーマが目立つ。しかし、件数ベースでは、10年間において製造学科は141件、(総額78,877,897円、1件当たり平均559,418円)、建設学科は99件(総額94,260,450円、平均952,126円)と、製造学科が5割程多い。製造学科と建設学科では、産業の規模と広がりおよび企業数の差が異なることが影響していると思われる。一般に建造物に対しては多額の資金を要し、人件費も大きくなり、金額が膨らむ。一方製造関係の研究では、1つの製品の価格は低い但其数は多くなる性質をもつ。たとえば製造学科では、埼玉県警と開発した3件の振り込め詐欺に関する共同研究が含まれ、その契約費用は0円であって、材料費は大学の研究費でまかなったが、社会的な価値や宣伝効果は、他と比べものにならないくらいの影響をもった。しかも、学生が主体となって研究開発を行っており、このようなケースの件数を増大させたいところである。したがって、単に金額ベースで評価されるべきではなく、内容や件数も重要な評価ファクターとなっている。

表3では、筆者が受けた研究テーマがいくつかあるが、企業から資金を得ているものの、資金の大本はほとんどが公的競争資金によるものである。企業が公的資金による技術開発を進める際でも、大学が協力することで、より効果的、客観的データを基に技術開発を進めることが可能である。企業の技術開発の一翼を担うことで、公的競争資金を使った研究が成り立っている。大学は、もともとシーズをもっており、それがニーズと絡み、さらに公的な補助金が重なれば、より早いスピードでより大きな成果をあげることができる。逆に言えば、公的な資金が無い場合には、必然的に規模は小さくなる。したがって、企業と大学が連携して、公的な競争資金を獲得することがより大きな規模での技術開発に繋がることになる。このように、企業と連携しつつも、公的競争資金を得ることで研究規模を大きくして欲しい。そのためにも、ものづくり大学に相応し研究テーマの1つとして、普段から企業との共同研究を視野に入れておくことが必要である。

図1は、受託研究等の金額とその発生度数である。左図は、10年間における契約金額と



受託研究等の金額別分布

100万円以下の受託研究等の金額別分布

図1 10年間の受託研究等の金額別分布

表3 10年間の金額ベース上位3位までの受託・共同・奨励研究テーマ

| 年度 | 種別 | 学科 | 担当教員 | 研究テーマ |
|------|----|----|-------------|---|
| 2001 | 共同 | 建設 | 岩下繁昭 | 建築サブユーザーの立場から見た電化機器の調査研究 |
| | 受託 | 建設 | 中田善久 | 埼玉県内におけるレディーミクストコンクリート用骨材のアルカリシリカ反応の調査研究 |
| | 受託 | 製造 | 野村大次 | ディーゼルエンジン軸系戻り振動解析の合理化 |
| 2002 | 受託 | 建設 | 中田善久 | 溶融スラグを用いたコンクリートの実大実験 |
| | 共同 | 建設 | 岩下繁昭 | 電化機器に配慮した建築設計をするための調査研究 |
| | 受託 | 製造 | 野村大次 | ディーゼルエンジン・クランク軸強度計算システムの開発 |
| 2003 | 共同 | 製造 | 東江真一 | C/C コンポジットを基材とする超軽量金属複合新素材の研究開発 |
| | 受託 | 建設 | 田中文男 | 木造建築の架構発展の研究 |
| | 共同 | 製造 | 藤澤・東江 市川 | シリンダーヘッド バブルシート面取り加工(CHR)の刃具寿命向上 |
| 2004 | 受託 | 建設 | 中田善久 | スラグを用いたコンクリートの耐久性 |
| | 受託 | 建設 | 中田善久 | 高強度コンクリートの実験検討 |
| | 受託 | 製造 | 東江真一 | C/GMC 素材加工のためのトランスファーライン対応 グラインディングセンターの研究開発 |
| 2005 | 受託 | 建設 | 中田善久 | 高強度 Pca 部材の表面仕上がり性状に関する 実験的研究 |
| | 受託 | 建設 | 中田善久 | 溶融スラグの建設材料への適用に関する実験研究 |
| | 受託 | 建設 | 中田善久 | 左官モルタルに関する研究 |
| 2006 | 奨学 | 建設 | 河谷史郎 | 型枠のシステム化 |
| | 受託 | 製造 | 市川茂樹 | 板金製品のバリ取り |
| | 受託 | 建設 | 中田善久 | 高強度 Pca における床部材の表面仕上がり状態に 関する実験的研究 |
| 2007 | 奨学 | 製造 | 東江真一 | 発泡スチロールの簡易型粉碎圧縮減容化装置の開発 |
| | 奨学 | 製造 | 東江真一 | 環境対応型近接総型ノズル(Pノズル)の開発に関する研究 |
| | 共同 | 製造 | 櫻井大八郎 | 溶融金属の凝固について |
| 2008 | 奨学 | 製造 | 櫻井大八郎 | 鑄造材料の基礎研究 |
| | 共同 | 製造 | 日向輝彦 | 埼玉の自動車部品軽量化をめざすチタン・マグネ溶接 自動化の開発 |
| | 受託 | 建設 | 大塚秀三 | 高強度コンクリートに関する研究 |
| 2009 | 共同 | 製造 | 櫻井大八郎 | 溶融金属凝固について |
| | 受託 | 建設 | 小野 泰 | 伝統構法の軸組の性能検証に関する研究 |
| | 奨学 | 建設 | 大塚秀三 | コア供試体の強度性状に及ぼす各種要因に関する検討 |
| 2010 | 受託 | 建設 | 伊藤大輔 | 植物園の為の最適ブラインド制御に関する研究 |
| | 受託 | 建設 | 北條哲男 | 炭素繊維材の建設機械への適用に関する基礎的研究 |
| | 受託 | 建設 | 田尻 要 | 団地再整備基本計画業務 |

その度数である。図から分かるように、50 万円以下がほとんどで、たいていは 100 万円以下の金額となっている。企業の規模によるところもあるが、1 研究テーマに対して企業が出せる金額としては、順当と思われる。200 万円以上の研究規模となるとかなり難しく、教員と企業との関係が良好で良い研究テーマがある場合や公的競争資金に裏付けられた場合に限っていると思われる。

規模としては、100 万円以下の研究が集中しているのので、100 万円以下に限りその分布を見たのが図 1 の右図である。最も大きなピークは、30 万円で 50 件である。その次は、50 万円で 19 件となっている。さらに 100 万円と 60 万円が同じで 13 件になっていて、区切りよい数字の件数が多い。全般的に 50 万円以下であり、さらに 30 万円以下が多い。前述のように、大学の資産を使って、中小企業をも含む技術支援を行うので、金額の大小を問うことなく、このように多くの技術支援を行うことで、大学の実績をあげたいと思う。

図 2 は、受託研究等における学科別、年度別の契約金額の分布である。左図は製造学科の場合で、右図は建設学科の場合である。建設学科では、金額の大きい研究が比較的多く見られる。一方、製造学科は、受託研究件数が多いが、金額的にも 100 万円を超える研究も少なくはない。両学科とも、開学から 4 年間ぐらいに大きい金額で受託しており、開学時の勢いが感じられ、1 件の金額では、むしろ開学時の方が多い。バブルがはじけた後の長引く不況で政府や産業界も何とかしなければという精神的な気持ちが強く現れた時期で、時代の変化も影響しているのかもしれない。

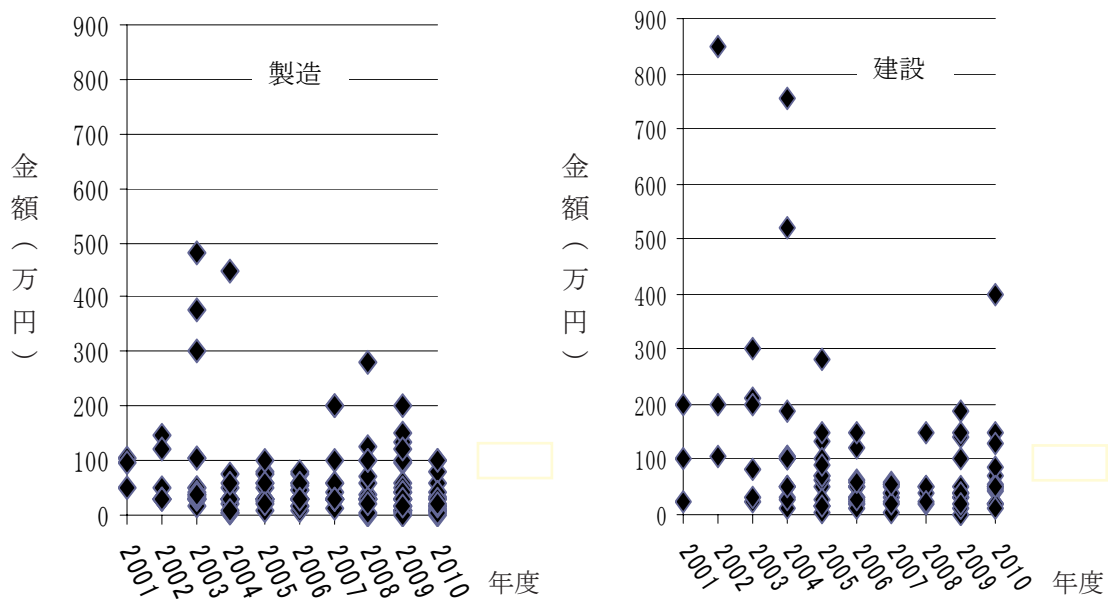


図 2 学科別契約金額の分布

図 3 は、学科別、年度別の受託研究等の件数であり、教員数に対し、健闘しているといえる。開学時から、徐々に件数は増えており、研究分野は製造学科も建設学科も、製造業全般、建築・土木の全般を網羅した広い範囲にわたっていることから、さらに件数を増やせる余地があると思われる。教員数当たりの件数で示せば、1 倍を切っており、更なる教員の奮闘を期待したい。

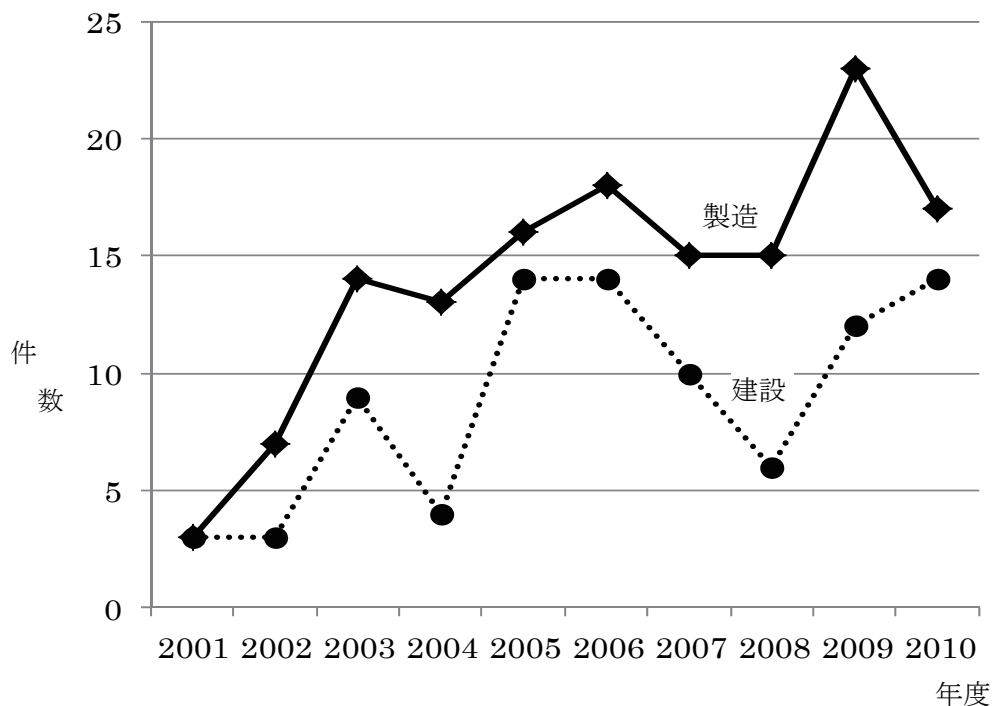


図3 受託研究等件数の推移

10年間の受託研究等の総額を表4に示す。総額は2億円に届く勢いである。件数は10年間で240件、年当たり平均で24件になっている。ものづくり大学は、中小企業との連携を大事にすることをモットーにしているため、件数も大事な指標である。受託研究等の件数を増やすことで、結果的に総額が増えるようにする観点が大変であると思う。

表4 受託・共同・奨学寄付研究の契約実績(2011.3.31現在)

| 奨学寄附研究 | | 受託研究 | | 共同研究 | | 合 計 | |
|--------|------------|------|-------------|------|------------|-----|-------------|
| 件数 | 契約額(円) | 件数 | 契約額(円) | 件数 | 契約額(円) | 件数 | 契約額(円) |
| 88 | 39,163,000 | 112 | 100,043,410 | 40 | 33,931,937 | 240 | 173,138,347 |

4. おわりに

10年間に、教員だけでなく、同センターに従事した多くの事務職員もものづくり大学の社会・地域貢献活動を支えて頂いた。皆、多くの苦労があったと思われるが、その1人1人に対して深く感謝の意を表すとともに、今後とも活躍してもらいたい。同時に、次なる同センター10年間の飛躍を楽しみにする次第である。

「インターンシップ10年のあゆみ」

—準備から定着まで—

学生課

1. 開学から開始準備

2001年10月9日、第1回のインターンシップ検討会を開催した。参加メンバーは太田教務長、神谷製造技能工芸学科長、岩下建設技能工芸学科長、池田専務理事・事務局長、山下常務理事・学務部長、重谷事務部長、教務課の古賀課長、宮本教務主幹、森部教務係長、柏谷教務係員である。設立計画時にちょうどインターンシップが日本に定着しようとする時期であったこと（1997年はインターンシップ元年と呼ばれる）もあり、カリキュラムの正課として1クォータをインターンシップに使い切る計画を立てたが、実際にどのようにしたら実行できるかを詰める必要があった。いわゆる形式的な会議を設置するのではなく、自在に意見交換しつつ、内容を作り上げていくための検討会という姿勢をとった。

先例としては、長期間の企業での研修を行っている長岡技術科学大学、豊橋技術科学大学が挙げられ、このときには豊橋技術科学大学の資料を取り寄せて様式等の下敷きとしたが、他にやるべきことが多々あり、毎月1~2回程度のペースで手法を決め、各所にインターンシップ受け入れの呼びかけをし、また学生へのイメージ喚起を図る方法を準備した。特に第一段階では、常勤の教員から提出された候補企業のリストにDMを送付すると同時に先生方から直接声を掛けることで、確実なインターンシップ先の確保を狙った。更に埼玉県地域連絡協議会を窓口として埼玉県経営者協会、埼玉経済同友会などから県内企業に依頼し、各種業界団体などにも依頼することで幅広い受け入れ先の開拓を行ったことも特筆すべきことである。

当面2002年度は建設技能工芸学科の2年生の基礎インターンシップであり、製造技能工芸学科のインターンシップAは2003年度開始であったが、両学科の議論を並行することで、その後の齟齬などを起こさないように心がけた。また、この時点でインターンシップを設定する時期について再検討を行い、基本方針を決定した。

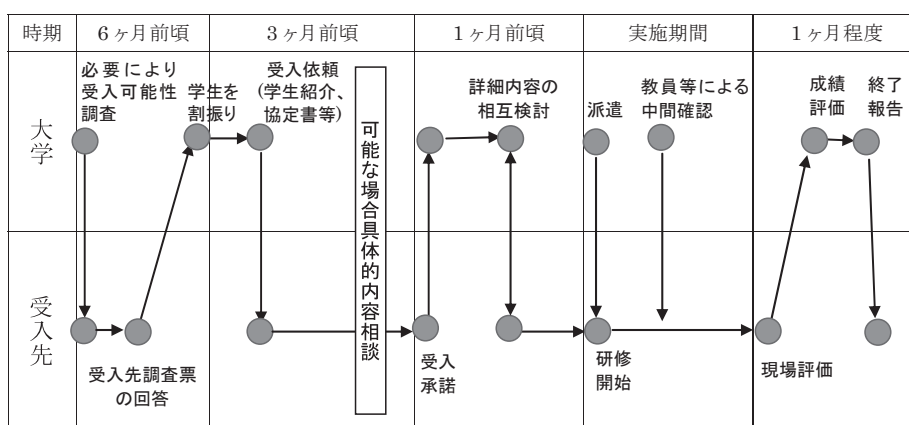
建設技能工芸学科においては、早期に建設業を体験させることで建設分野の現場に強い人材としての基礎力を身に付けさせたいという観点から、当初予定通り2年生の2クォータに1回目の基礎インターンシップを実施し、建設業の体験という点に重きを置くものとした。一方で4年生の専門インターンシップにおいては、就職活動との兼ね合いから、2クォータ分を1~3クォータの中で履修できるように柔軟な対応をする方向となった。

製造技能工芸学科においては、ある程度の技術や知識を身につけてから製造業の業務体験をさせたいという観点から、当初の予定通り3年生で1回目のインターンシップAを履修させるものとしたが、想定していた4クォータでは就職活動に支障をきたすおそれがあることから、建設と同様の2クォータに実施するものとした。また、製造の4年生のインターンシップBも建設と同様に、1~3クォータの中で柔軟に履修できるものとした。

なお、インターンシップ制度については、建設技能工芸学科が建築士制度との兼ね合いから、建築士インターンシップと一般インターンシップの2種類となり、2009年度入学生からは基礎インターンシップが選択必修に、専門インターンシップが選択性となった。製

造技能工芸学科のインターンシップBには20日間という短期のコースが設けられた。また、当初40日間で6単位であったが、2007年度入学生から8単位に変更となった。

これらの検討準備を進める過程で、概ね次のようなインターンシップ履修の流れが決定し、その後はほぼ同様の形で運用している。



2. 9年間のインターンシップの実績（2002～2010年度）

開学2年目から、この9年間にインターンシップを受けた延べ人数は、3,524名（科目認定42名を含む）である。そしてそのインターンシップを実現するために受入を表明していただいた企業数が延べ3,460社であり、ほぼ学生数と同等の受入可能性が必要であるとの予測となる。実際には、複数名を派遣している企業もあり、その年度ではだれも派遣がなかったという企業もある。大学としては、派遣者数ゼロを複数年度続けないように、学生に企業内容の紹介等を行っているが、なかなか実現が難しい。

なお、ここ数年は不景気による業務の減少などにより、新規受入開拓が困難な情勢となっており、学生には少し視野を広げて様々な体験をするように進めざるを得ない。

2002年度から2010年度のインターンシップ履修状況

| 年度 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 計 |
|-------------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|
| 新規開拓受入可能企業数(社) | | | | | | | | | | |
| 製造技能 工芸学科 | 0 | 107 | 48 | 55 | 56 | 34 | 41 | 21 | 28 | 390 |
| 建設技能 工芸学科 | 141 | 119 | 201 | 186 | 152 | 115 | 131 | 77 | 75 | 1,197 |
| 計 | 141 | 226 | 249 | 241 | 208 | 149 | 172 | 98 | 103 | 1,587 |
| 当該年度インターンシップ受入可能企業数(社) | | | | | | | | | | |
| 製造技能 工芸学科 | 0 | 107 | 128 | 133 | 151 | 122 | 126 | 97 | 101 | 965 |
| 建設技能 工芸学科 | 141 | 187 | 289 | 331 | 372 | 317 | 329 | 273 | 256 | 2,495 |
| 計 | 141 | 294 | 417 | 464 | 523 | 439 | 455 | 370 | 357 | 3,460 |
| 当該年度インターンシップ学生派遣企業数(社) | | | | | | | | | | |
| 製造技能 工芸学科 | 0 | 79 | 78 | 90 | 77 | 86 | 81 | 68 | 79 | 638 |
| 建設技能 工芸学科 | 98 | 147 | 253 | 256 | 248 | 236 | 246 | 198 | 174 | 1,856 |
| 計 | 98 | 226 | 331 | 346 | 325 | 322 | 327 | 266 | 253 | 2,494 |

| インターンシップ履修学生数(人) | | | | | | | | | | |
|------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 製造技能 工芸学科 | 0 | 131 | 114 | 129 | 122 | 154 | 142 | 118 | 114 | 1,024 |
| 建設技能 工芸学科 | 140 | 175 | 296 | 330 | 333 | 330 | 329 | 272 | 253 | 2,458 |
| 科目認定 | 14 | 3 | 14 | 3 | 1 | 5 | 2 | 0 | 0 | 42 |
| 計 | 154 | 309 | 424 | 462 | 456 | 489 | 473 | 390 | 367 | 3,524 |

* 各年度とも授業科目として単位が取得されたもののみとした。

* 科目認定とは、社会人入学生等で一定の要件を満たした場合等で単位として認定された場合等である。

インターンシップが定着した近年では、日本インターンシップ学会などでも、事前事後の教育の重要性が問われている。本学ではインターンシップをほぼ100%の学生が受講、単位を取得し、事後アンケートなどでも9割の学生がインターンシップを受けてよかったと回答していることから、今後ますます事後教育を充実する必要がある。2010年度からは「大学生の就業力育成支援事業」の一環として、学生のレポートの取りまとめと発表会の実施を行いはじめたところである。

また、インターンシップと就職の関係であるが、2011年3月の卒業生まででは、一期生が2割強、二期生では3割弱と上がったが、その後下がり、現在は1~2割程度で、7期全体の平均では21%である。

3. インターンシップの内容と実例

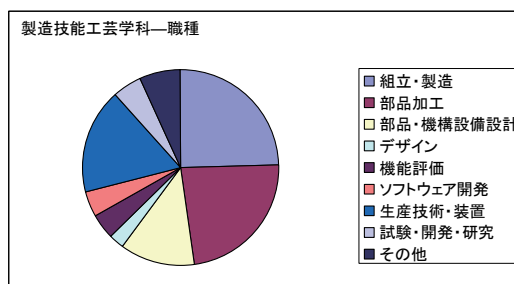
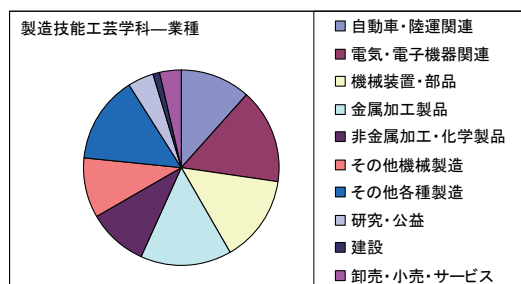
(1) 製造技能工芸学科（現製造学科）

① インターンシップ先の業種、職種の特性




インターンシップ先の企業の業種、インターンシップで携わらせて頂いている職種は、年によって多少の変動はあるが、概ねの傾向は一定である。下の図は、2003年度から2010年度までを合計したものである。

業種としては、自動車・運送、電気・電子機器、機械装置・部品、金属加工、非金属加工、その他機械製造、各種製造（食品等）などが、10~15%ずつとなっている。自動車関連は根強い人気だが、電気関係や加工が上位となるなど、一定の特性は見出し難い。

職種は、インターンシップの調査票と計画票に記載されたもので判断し、いくつかの職種を経験している場合は、主なものをひとつとらえるものとした。部品加工と組み立てが多いが、生産技術も次第に増えており、この3職種が多い。設計はそれに続く部門となっており、デザインやソフトウェア、試験などは少なくなっている。



② インターンシップ実例

| | | |
|---|--|---|
| <p>製造現場の加工組立の経験 装置の機構、制御方法等を学び、実際の加工組立を実施</p> | <p>性能・品質確認業務の経験 塗装業務の体験とともに、その品質管理方法を学ぶ</p> | <p>生産技術部門の経験 トヨタ生産方式による現場の改善提案を企業内で発表</p> |
|  |  |  |

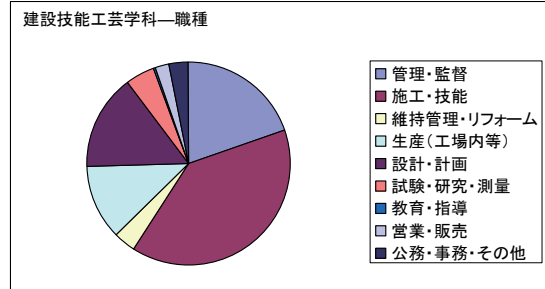
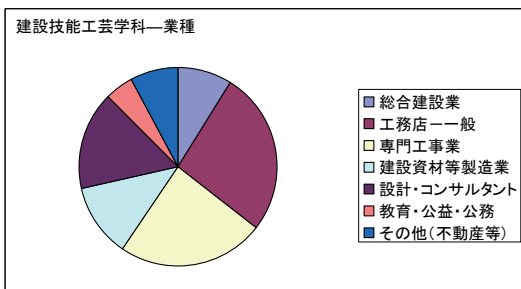
(2) 建設技能工芸学科 (現建設学科)

① インターンシップ先の業種、職種の特性

建設技能工芸学科の場合も企業の業種、職種の傾向は一定である。下の図は、2002年度から2010年度までを合計したものである。

業種としては、工務店、専門工事業が1/4程度ずつで多く、続いて設計、資材等メーカー、総合建設業が10~15%ずつとなっている。製造と同様に一定の特性があるとは言い難いが近年は設計部門への希望が増える傾向が見受けられる。

職種は、施工・技能経験が4割を占めており、この傾向は特に基礎インターンシップで強く、2年生段階での入りやすさや分かりやすさが影響していると見られる。次いで管理・監督、生産、設計が10~20%で多く、試験や公務などは少ない状況である。



② インターンシップ実例

| | | |
|---|--|---|
| <p>総合建設業の施工管理経験 図面と現場の確認、工程進捗状況の確認、記録作成など</p> | <p>建築現場での施工作業経験 左官施工工程を経験し、様々な材料や施工方法を学ぶ</p> | <p>設計部門での設計業務経験 CADによる設計図書作成業務や模型製作業務など</p> |
|  |  |  |

「ものづくり大学 キャンパス10年の変遷」

総務課

敷地面積 11 万 4,337 m²を有するものづくり大学は、製造棟、建設棟、大学本部・図書情報センター、大学会館、ドーMITリ・合宿研修センター、体育館を 2001 年度までに竣工し、2001 年 4 月に開学した。その後 2002 年度には中央棟を新築すると同時に屋外スポーツ施設の充実を図るためにグラウンド及びテニスコートを整備した。（写真 1）（表 1）

その他、ものづくり大学の建学の精神・基本理念に則り、本学の実習や卒業制作の成果物による学内施設の充実も図っている。



写真 1 大学正面

表 1 校舎等面積一覧

| 施設名称 | 竣工 | 面積 |
|-----------------|--------|-----------------------|
| 製造棟 | 2001 年 | 10,114 m ² |
| 建設棟 | 2001 年 | 6,737 m ² |
| 大学本部・図書情報センター | 2001 年 | 3,789 m ² |
| 大学会館 | 2001 年 | 1,970 m ² |
| 体育館 | 2001 年 | 1,931 m ² |
| ドーMITリ・合宿研修センター | 2001 年 | 6,111 m ² |
| 中央棟 | 2003 年 | 3,757 m ² |
| グラウンド | 2003 年 | 5,490 m ² |
| テニスコート | 2003 年 | 1,969 m ² |

敷地面積：114,337 m²

校舎面積：34,399 m²

1. 大学施設の変遷

1-1 開学時竣工施設

所在地は埼玉県行田市前谷地区。（写真2）

2001年の開学時には中央棟は竣工しておらず、2003年までは製造棟、建設棟、本部棟のみで授業を行っていた。（写真3）

以下はその開学時の施設の概要と紹介である。



写真2 開学前の様子



写真3 竣工時の様子

① 製造棟（写真4）

製造棟は、加工機器、計測・測定機器、実験装置等約70種類の設備が設置されている。各設備は、基礎及び専門の実験・実習を行うため、必要に応じて増設されている。また、最先端技術を取り入れるため、最新鋭の設備・機器の導入も図っている。

1階は、切削、研削、シートメタル加工、鋳造、溶接等を行えるよう5つのショップに別れており、ショップ別に実習機械等を完備している。また、学生が自由に使用できるスペースとして、「ものづくり工房」が設置され、講義時間外に自学実習を行うことが出来る。

2、3階は、一般講義室、製図室、研究室があり、各研究室では学年を問わず教員から講義外の指導も受けることが出来る。



写真4 製造棟

② 建設棟（写真5）

建設棟は、基礎及び専門の実験・実習を行うため、多様な設備・機器が導入されている。主要設備は、加工機械、試験測定機械等、約50種類の設備を設置している。

1階は、木造系(ティンバー)実習場、築造系(ストラクチャー)実習場、仕上系(フィニッシュ)実習場の3つの実習場に別れており、それぞれ実習機械等を用意している。

また、学生が自由に使用できるスペースとして、各実習場入口前に「ものづくり工房」が3箇所設置されており、講義時間外に自学実習を行うことが出来る。

2、3階は、一般講義室、製図室、コンピュータ演習室、研究室が完備され、各研究室では学年を問わず教員から講義外の指導も受けることが出来る。



写真5 建設棟

③ 大学本部・図書情報センター（写真 6）

大学本部・図書情報センターは、大学の管理・運営及び学生の各種事務手続き等を行う本部棟と図書情報センターからなり、1階に学務部及び就職センター、2階に事務部、3階に講義室を備えている。

図書情報センターは70%を自習可能なスペースに充て、30%を書庫スペースに充てている。



写真 6 大学本部・図書情報センター

④ 大学会館（写真 7）

大学会館は、学生の健康と生活をサポートするための施設で、総面積1,970㎡である。1階には学生食堂が設置され、学生の憩いの場としても利用されている。また、2階の一角に購買部が設置されており、勉学に必要な用具や日常消耗品などを販売している。



写真 7 大学会館

⑤ 体育館（写真 8）

体育館は、1階にアリーナ、2階に部室12室を備え、体育関係の講義、課外活動等に使用されている。



写真 8 体育館

⑥ ドーミトリ（学生寮）・合宿研修センター（写真 9）

ドーミトリ・合宿研修センターは、200室の個室を有し、主に一年次の希望者が入寮している。また、1階に合宿時の宿泊室や研修講義室（合宿研修センター）、教職員が利用できるシングルルーム仕様の宿泊室を備えている。



写真 9 ドーミトリ・合宿研修センター

1-2 2003年竣工施設

① 中央棟（写真10）

中央棟は、1階に築造及び仕上系実習場及び大講義室（2室）、2階に木造系実習場及び講義室（6室）、3階に講義室（4室）、研究室、大学院学生研究室及びものづくり研究情報センター事務室を備えている。

1階の大講義室では、1学年全員が一斉に講義を受けることが出来る。また、1階築造・仕上系の実習場と2階木造系実習場は、使用届を提出すれば、講義時間外に、自学実習を行うことが出来る。



写真10 中央棟

② グラウンド及びテニスコート（写真11・12）

屋外スポーツ施設としてグラウンド及びテニスコートを整備し、体育施設の充実を図った。

グラウンドは5,490㎡の面積を持ち、学生の課外活動のみならず、大学の行事等にも使用されている。また、テニスコートは全3面を備え、学生のみならず、教職員の利用も可能である。



写真11 グラウンド



写真12 テニスコート

2. 実習及び卒業制作による大学施設の充実

ものづくり大学では、通常の講義のほか実技・実務に重点を置いた実際の使用に耐えられる本格的な工作物を製作する実習を行っている。そのため、実習科目や卒業制作を通して製作した成果物を大学内に設置して実際に使用しており、開学から10年が経過した現在では、学内の様々な場所にその成果物が設置されている。

以下は、学内に設置され実際に利用されている成果物の一覧（写真13～29）と、設置場所を示した図（図1）である。

2-1 成果物一覧

車庫

2001 年度竣工。
現在は自動車部へ
貸出している。
(写真 13)



写真 13 ①車庫

ゴミ置場

2003 年度竣工。
食堂業者のゴミ
置場として活用
している。
(写真 14)



写真 14 ②ゴミ置場

倉庫 (RC、鉄骨、木) (写真 15~19)

③・④…2002 年度、⑤・⑥・⑦…2004 年度、⑧…2005 年度、⑨…2006 年度、⑩…2007 年度、
⑪…2009 年度

実習や研究で使用する資材、用具、機械や車両の保管場所として活用している。



写真 15 ③・⑥・⑧・⑩倉庫



写真 16 ④・⑤倉庫



写真 17 ⑦倉庫



写真 18 ⑨倉庫



写真 19 ⑪倉庫

第一連絡橋 2004 年度竣工。
第二連絡橋 2007 年度竣工。
2 ヶ年計画で製作され、各棟間の
移動に活用されている。
(写真 20・21)



写真 20 ⑫第一連絡橋



写真 21 ⑬第二連絡橋

弓道場

2004 年度竣工。
本学の弓道部の活
動場所として使用
している。
(写真 22)



写真 22 ⑭弓道場

バス待合室

2006 年度竣工。
バス待合室とし
て活用している。
(写真 23)



写真 23 ⑮バス待合室

木製アーチ

2006 年度竣工。
センターモールに
設置されており、
実際に通行可能で
ある。(写真 24)



写真 24 ⑯木製アーチ

木柵

2007 年度竣工。
大学の外周に設
置されており、
今後も増設予定
である。(写真 25)



写真 25 ⑰木柵

多目的広場

2008 年度竣工。
本学の学生や、近
隣住民の憩いの場
として活用されて
いる。(写真 26)



写真 26 ⑱多目的広場

日本庭園

2008 年度竣工。
多目的広場と同
じく、憩いの場
として活用され
ている。(写真 27)



写真 27 ⑲日本庭園

観覧席

2008 年度竣工。
今後同一のものを
継続して製作して
いく予定である。
(写真 28)



写真 28 ⑳観覧席

浮橋

2008 年度竣工。
調整池に浮かぶ
橋であり、実際
に通行可能であ
る。(写真 29)



写真 29 ㉑浮橋



図 1 成果物配置図

「彩の国におけるものづくり大学 地元との関係史」

—様々に展開してきたものづくり—

教務・情報課／学生課

1. 概要

2001年4月の開学以降10年間のものづくり大学の歴史は、地域との協働の歴史でもある。開学以前に埼玉県、行田市、さらに地域の企業や業界団体から多くの支援を受けたことによりどのように応えるか、その中心となったのは地元行田市であり、「ものづくり大学埼玉県地域連絡協議会」（事務局埼玉県）である。大学はそれらの関係者とともに試行を重ねつつ、大学が持っている物的・人的資源を提供し、地元行田市をはじめ埼玉県内で以下に挙げるような様々な地域への貢献活動を行ってきた。

その主なものを、施設開放等、公開講座・社会人リカレント教育等、ものづくり教室、学生活動・作品の展開、その他の協力事業に分けて掲げてみたい。なお、共同研究等についてはものづくり研究情報センターの項に、課外活動に関わるものは課外活動の項に譲る。

2. 大学施設の開放等

開学と同時に、学内の体育館、グラウンドなどについては授業や学生の使用に差し支えない範囲で、技能検定試験や各種団体等の催し物会場としての利用に供している。近年では行田市民大学のキャンパスとしても定着してきている。また、図書情報センター（図書館）は学外者にも図書や雑誌の閲覧を許可している。

キャンパス内への立ち入りは特に制限をしていないので樹木、芝生の整備された学内敷地は、ウォーキングや犬の散歩など近隣住民のよき散策コースとして利用されている。また、大学食堂は学外者にも学内利用者と同一料金で開放している。

3. 公開講座・リカレント教育等

公開講座の開催は開学した2001年度及び翌2002年度は、本学の知名度向上に資するため年3回開催するなど年度によって開催回数に変動がある。基本的には地域内企業の「ものづくり」を支援するために体系化し、大学の持つ人的資源などを活用し、「ものづくりの哲学」が普及することを根幹とし、初年度は永六輔氏、瀬戸内寂聴氏その他の方々を招いていたが、近年はものづくりを幅広く捉え、行田市、埼玉県経営者協会とも連携し、地域住民のニーズを汲みつつ実施を図っている。各年度の公開講座の講演者と内容については、本誌12～17ページの10年の系譜の項を参照されたい。

ものづくり大学はそれ自体が社会人（ものづくりの後継者としての若者を含む）の入学を大いに奨励することをもって特色としているが、他にも社会人が学ぶ道がいくつかある。科目等履修生の制度は、大学の授業科目を単独で聴講できる制度であり、ものづくり大学では企業から企業内研修の代替として、特に実習科目などを活用されている例もある。埼

玉県が主唱しているリカレント教育では、特に企業の実務者を招いた授業などに人気があり、毎年受講生が続いている。

さらに建設技能工芸学科（現建設学科）では、2010年度から「ものづくり市民工房」として、1年ないし2年の講座を設け、学生と共に授業を受けて履修成果が認定されると同時に、コースにより二級建築士・木造建築士の受験資格が得られるもので、現在まで延べ10名が受講している。

4. ものづくり教室

開学当初の2001年度は、7月に行田青年会議所が主催した行事に参加し、小さな木片をつないだものづくりをテントで開催した。

2002年度には、大学に近い泉小学校の先生からの希望で、4年生全員を対象とした木工教室を開催し、のこぎり、かんな、かなづちという基本の道具の使い方を学生が指導し、この取組みは現在も続いている。また行田市とタイアップした小学生対象のマンガカーレース大会と中学生対象のロボットコンテストを実施し、マンガカーレースは現在まで続く寿命の長い活動として定着している。以来、地元行田市と連携した地域交流事業として、小中学生などを対照にした様々な「ものづくり教室」を継続している(別表参照)。



木工



モルタル人形



竹とんぼ



木製筆箱



マンガカー

2006年度と2007年度は学生が中心となって「行田市青少年少女発明クラブ」と銘打って会員を募り、ものづくり教室と関連する交流イベントを13回程度開催した。このことによって、従来、学園祭や様々な子ども会、イベント時などに個別の研究室で行っていたものづくり教室を集約するきっかけとなり、2008年度からは「おもしろものづくり教室」として年間7回程度のイベントとして定着させることとなった。

2010年度からは、埼玉県教育委員会、行田市教育委員会、NPO法人子育てネット行田及びものつくり大学の共催で「子ども大学ぎょうだ」を開催し、ものづくりだけではなく、歴史など様々なことを子供たちが大学等にて学ぶ取組みを展開している。また、2010年度末から、地域のNPO法人とタイアップした「ものりか教室」が開始され、子供たちの休みの期間を中心に手でものを作る喜びを伝える取組みを実施している。

一方、高校生に向けては高校とタイアップした高大連携の取組みが中心であるが、それ以外に2004年度から着手した「埼玉県地域連絡協議会」主催の「高校生徒ものづくり教室」

を毎年 8 月に行っている。制御装置などの組み立てや家具や模型の制作などを体験し、参加人数は少ないながら、普通科高校の生徒でも、ものづくり大学に興味を持ち、ものづくりを目的として進学も考えるきっかけともなっている。

5. 学生活動・作品の展開

開学後 3 年目程度から、学生が蓄えたものづくりの力を地域に還元する試みが始まった。ベンチ付テーブルの公園寄贈や個人宅庭先の稲荷社の修復、塗装組合と連携した幼稚園の壁画制作なども実現した。2004 年度末からは卒業研究及び制作により、地域の古い建物等の調査などに着手した。

製造技能工芸学科では夏季休暇中にボランティア活動を行う「サマープログラム」の授業が行われており、福祉型のボランティア活動の他に、地元行田市の協力を得て公園施設の補修作業、高齢世帯の草取り作業、学童保育指導、遺跡発掘調査などに参加している。

同じく製造技能工芸学科において、2009 年には埼玉県警の依頼により ATM（現金自動預け払い機）の振り込み詐欺防止装置を 4 名のチームで開発し、埼玉県内の銀行に取り付けられた。また、2010 年度には同じ観点で「振り込み詐欺被害防止シミュレーションソフト」を開発し、高齢者施設などでの活用支援なども行っている。

建設技能工芸学科では、近隣の市町村や地元地域の公園・広場に、木製ベンチ・木製プランター・東屋等を寄付し、神輿の修復を行うなど地域の人達に親しまれている。

また、授業や卒業研究及び制作による成果物を地元地域の施設に寄贈する取組みが大きく展開している。2009～2010 年度には、鴻巣市及び地元の公民館からの依頼に応じ、ちびっ子プレイハウスや絵本棚、木製玩具を製作したり、行田市の総合福祉会館「やすらぎの里」中庭改修工事の整備・設計施工、熊谷市平戸公園内の休息所「平戸のやすら木」の設計・施工などを行った。

民間の施設等への貢献としては、建設技能工芸学科の横山研究室が設計・管理を担当し、学生が工事・施工に携わった熊谷市指定文化財「根岸家長屋門」の保存修理工事がある。

更に、建設技能工芸学科の大島研究室が推進する、大学生と NPO による福祉施設の増築計画の実現と展示場における家具作りなどのコラボレーション活動が評価され、彩の国人にやさしいまちづくり賞の活動・アイデア部門「埼玉県知事賞」を受賞している。

6. その他の協力事業等

大学には教員という人的資源の果たす役割が大きい。ものづくり大学でも開学以来、地域の大学として様々な委員会、審議会などの委員、委員長として本学の教育職員が依頼を受けているものが多数ある。

特にものづくりに関連して、技能試験の委員に委嘱を受けている例も多く、施設の活用とあわせて、ものづくり大学の特色となっている。

また、開学初年度に行田市とタイアップした「ものづくり大学を核としたまちづくり構想」を始め、地域の未来を考える取組みの例もあり、今後の展開が期待される。

行田市との地域と連携したものづくり教室一覧

| 実施年度 | 教室等の名称 | 内容 | 連携先 |
|------------------------|-------------------|---|--|
| 2001 | 古代蓮まつり | イベント内のテントにおいて、木片をつなぎ合わせて自由に創造するものづくり教室を実施 | 行田青年会議所 |
| 2002～現在実施中 | 泉小学校木工教室 | 4年生を対象とした道具(のこ、かんな、かなづち)の使い方教室 | 行田市立泉小学校 |
| 2002～2005 | ロボットコンテスト | 中学生(小学生)を対象とした簡単なロボットの製作指導と完成ロボットによる競技など | 行田市教育委員会 |
| 2002～現在実施中 | マンガンカーレース大会 | マンガン電池を利用した簡易なミニレーシングカーを作成し、湾曲部などもあるコースでのタイムなどを競う 2005からは事前制作教室を実施 | 行田市教育委員会 |
| 2003 | 室内すべり台の作製 | 刃物のときなどの木工の基本から学び、みんなで部材製作を分担して、畳2枚分程度の大きな室内すべり台を製作し、市内の幼稚園にプレゼントする。講師は、建設埼玉所属の大工 | 行田市 |
| | 積み木小屋の製作 | 刃物のときなどの木工の基本から学び、みんなで部材製作を分担して、畳1枚分程度の大きな組み立て式の小屋を製作し、市内の幼稚園にプレゼントする。講師は、建設埼玉所属の大工 | 行田市 |
| | 古代蓮会館ものづくり教室 | 生きている苔でつくる人形づくり (トビアリー製作) | 財団法人行田市産業文化・スポーツいきいき財団 |
| | 陶芸教室 | 陶芸の基本から学び、湯のみ、コーヒークップ、花器などを製作する。花器は、市内の老人ホームにプレゼントする。 | 行田市 |
| 2004 | 古代蓮会館ものづくり教室 | お菓子を利用したミニチュアハウスの作製 | 社団法人行田市産業文化・スポーツいきいき財団古代蓮会館 |
| 2005 | 親子ものづくり教室体験講座実施事業 | 日干し煉瓦による小さなハウスの作製 | 行田市 |
| 2006 | 折り紙建築教室 | 紙に切り込みを入れて折り上げることで立体をつくる手法で建物などを表現する | 行田市教育委員会 |
| 2006 | 行田市少年少女発明クラブ 全12回 | 開校式、安全講習、道具の使い方講習 コンクリートを使った作品制作(モルタル人形) 竹を使った作品制作(竹とんぼ) まちを探検してみよう(まちのバリアフリー状況調査・発表) 発電コンテスト(簡易発電装置の製作) 発電コンテスト(発電能力コンテスト) みんなで餅つき大会 飛ぶってどんなこと?(ペットボトルロケット、風船飛行機の製作) 飛ばしてみよう(ペットボトルロケットの発射、飛行コンテスト) 竹細工(ガリガリトンボ作製) アイデア工作(ペットボトルロケット、羽子板、ストラップ製作) ストラップ製作、開校式 | 行田市 |
| 2007 | 行田市少年少女発明クラブ 全13回 | 開校式、安全講習、発明とは? 何でもスピーカー作成 ペットボトルを利用した健康器具の作製 ペットボトル工作(フーメラン・風車の作成) 身の回りのものを工夫してみよう アイデアを考える ピンホールカメラの作成 竹細工(竹とんぼ)の製作 アイデアを形にする 磁気の実験を学ぶ みんなで餅つき大会 風力発電で目の光る風見鶏作製 風力発電で目の光る風見鶏作製 | 行田市 |
| 2007 | ふれあいジュエリー体験教室 | 金属を使用し、平打ちリングやペンダントを作成 | 行田市 |
| 2008～現在「おもしろものづくり」で継続中 | モルタル人形づくり | 速乾性のモルタルを使用し、ゴム型枠の中で固めて動物などの形を作る。水性の絵の具で自由に彩色して完成させる。 | 幼稚園PTA 川口市発明クラブ 武州ガス 埼玉県教育局など |
| 2008 | おもしろものづくり教室 | モルタル人形づくり 火薬ロケットを打ち上げよう 鋳物でオリジナルグッズを作ろう 自分のリズムでタンタン鍛金 精密鑄造技術で銀製のペンダントをつくる 竹細工教室 立体風を飛ばそう | 行田市 |
| 2009 | おもしろものづくり教室 | モルタル人形づくり 火薬ロケット シルバーアクセサリー作り 鋳物教室 鍛金教室 石膏文字づくり 竹とんぼづくり | 行田市 |
| 2010 | おもしろものづくり教室 | モルタル人形づくり 火薬ロケット シルバーアクセサリー作り 鋳物教室 鍛金教室 石膏文字づくり 竹とんぼづくり | 行田市 |
| 2010～現在 | 子ども大学ぎょうだ | 入学式、歴史などの学習、マンガンカーなどのものづくり、卒業式 | 埼玉県、行田市、NPO法人子育てネット行田 |
| 2010～現在 | ものりか教室 | ぶんぶんごまを作ろう | NPO法人ふるさと創生クラブ、西小学校 |

「学生活動10年」

—学生による大学づくり—

学生課

1. 開学からの経緯

開学とともに「学生規則」が規程として運用開始となり、その第7章第12条から第18条に定めるところにより、学生団体設立の希望を厚生課厚生係で受け付けることとなった。2001年4月17日の第1回学生委員会の記録では、当面部室は使用せず教室の使用を認めること、メンバー募集の掲示を認めること、日向教授の下で設立願いを受け付けることが記録されている。

そして、6月5日の第4回学生委員会で14団体、6月26日の第5回学生委員会で22団体の合計36団体が第一段階での仮認可を受けた。同時に部室の使用を開始し、クラブ・サークル間の調整のための代表者による協議組織を設けることとした。その後年度内に4団体が仮承認され、初年度の承認団体は合計40となった。

その後、表のように、2002年度に10、2003年度に19、2004年度に1の団体が設立され、途中で休部状態になった団体を含めて完成年度4年目までに設立された団体は70に登った。なお、この間に任意の組織として運営されていた団体（フィールドホッケーなど）が6団体程度あり、また設立が認められなかったり、類似の活動と共同で活動するように学生委員会から指示されたものが数団体存在したことを付記しておく。

2005年度は第一期生が卒業したこともあって、当初に設立されたクラブ・サークルの中で継続できなかった団体がかかりあった。一方で、2005年度は6団体、2006年度は4団体、2007年度は4団体、2008年度は5団体、2009年度は3団体、2010年度は2団体の新設が認められた。また、途中で継続できなかったクラブ・サークルであって、後日新規の申請が後輩から出てきた場合、内容が同等であれば復活として扱うこととしたものもある。

2007年度には、「ものづくり大学クラブ・サークル設立・運営内規」を制定し、学生規則に加えて、当初はサークルとして設立（補助金無し）し、相当の実績をもってクラブ（補助金有り）に昇格できる仕組みを作った。また補助金としては、活動実績に対して一定額を上限とする一般補助と、使用目的内容を審査する特別補助金とが設けられた。

一方で、製造技能工芸学科（現製造学科）では、2002年度に学生からの要望によりエコランカーのプロジェクトへの施設使用や資材使用が認められたことをきっかけに次第に学科のプロジェクトとしての制度が整えられてきた。学生委員会では、学科ごとのプロジェクトについては、それぞれの学科での承認をもって課外活動と認めることとしている。そのため、内容についてはそれぞれの学科の記述とする。

2. 各クラブ・サークルの紹介

初年度から継続するクラブ・サークルを中心に、主な活動などについて概括する。写真等は大学で撮影したもの他、各クラブ・サークルから提供されたものを含む。

ものづくり大学クラブ・サークルの変遷一覧表(2001年度～2011年度)

| No. | 名称 | 区分 | 設立 | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
|-------------------|------------------------------|----|---------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 1 | バドミントン部 | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 2 | スキー部 | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 3 | 文芸部 | 文 | 2001.6/2008.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 4 | 電子機械工作部 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 5 | 創造設計 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 6 | フットサル部(旧フットサルサークル) | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 7 | 台気道部 | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 8 | 溶接工作部(旧溶接部) | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 9 | 軽音部 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 10 | 空手道部 | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 11 | バスケットボール部 | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 12 | PC研究会 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 13 | ものづくりサークル | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 14 | のやき同好会 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 15 | 将棋クラブ | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 16 | 硬式テニス部 | 体 | 2001.6/2006.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 17 | 模型工作部(模型・工作部) | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 18 | 少林寺拳法(部)サークル | 体 | 2001.6/2009.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 19 | 卓球部 | 体 | 2001.6/2010.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 20 | Free Style Circle | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 21 | 建築研究会 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 22 | ラグビー部 | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 23 | 欽ちゃんの仮装大賞に出る部 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 24 | 自動車部 | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 25 | ものづくりボランティアサークル | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 26 | 弓道部(旧弓道サークル) | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 27 | 新し会 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 28 | 木造耐力壁ジャパンカップ実行委員会(ものづくり大学支部) | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 29 | 写真部 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 30 | バレーボール部(旧バレーボールサークル) | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 31 | コンクリート研究会 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 32 | 建設工学研究会 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 33 | まちづくり・すまいづくり研究会 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 34 | 広報・新聞部 | 文 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 35 | サッカー部 | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 36 | 柔道部 | 体 | 2001.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 37 | デザインアート部 | 文 | 2001.7 | ■ | | | | | | | | | | |
| 38 | 数理クラブ | 文 | 2001.9 | ■ | | | | | | | | | | |
| 39 | サークル「たひゆき」 | 文 | 2001.11 | ■ | | | | | | | | | | |
| 40 | 家具研究会 | 文 | 2002.2 | ■ | | | | | | | | | | |
| 41 | 旅サークル(旧旅日記) | 文 | 2002.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 42 | (軟式)野球部(ものづくりB・C) | 体 | 2002.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 43 | ウエイトトレーニング部 | 体 | 2002.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 44 | 釣り部 | 文 | 2002.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 45 | キックボクシング部 | 体 | 2002.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 46 | もえちゃんwithよしお写真展 | 文 | 2002.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 47 | ゴルフ同好会 | 体 | 2002.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 48 | HPVプロジェクト | 文 | 2002.11 | ■ | | | | | | | | | | |
| 49 | DJ同好会 | 文 | 2003.1 | ■ | | | | | | | | | | |
| 50 | エンタメサークル | 文 | 2003.1 | ■ | | | | | | | | | | |
| 51 | ソフトタッチ | 体 | 2003.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 52 | M&M | 文 | 2003.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 53 | ものづくり大学ダンス部 | 体 | 2003.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 54 | ミニFMサークル | 文 | 2003.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 55 | ストリートバスケットサークル | 体 | 2003.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 56 | 行田市ものづくり大学ボランティアサークル | 文 | 2003.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 57 | 撞球部 | 体 | 2003.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 58 | ものづくり大学二輪部 | 体 | 2003.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 59 | 自転車部 | 体 | 2003.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 60 | 演劇部 | 文 | 2003.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 61 | 自主映画製作部 | 文 | 2003.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 62 | ランドスケープ(デザイン)研究会 | 文 | 2003.7/2008.8 | ■ | | | | | | | | | | |
| 63 | 建築遺産研究会 | 文 | 2003.10 | ■ | | | | | | | | | | |
| 64 | 工房組(いノ音番) | 文 | 2003.10 | ■ | | | | | | | | | | |
| 65 | 長距離マラソンサークル | 体 | 2003.10 | ■ | | | | | | | | | | |
| 66 | (ものづくり大学)刺繍部 | 体 | 2003.11 | ■ | | | | | | | | | | |
| 67 | 農業部 第一次産業研究会 | 文 | 2003.12 | ■ | | | | | | | | | | |
| 68 | インテリアサークル「Woody life」 | 文 | 2004.1 | ■ | | | | | | | | | | |
| 69 | 左官技能研究会 | 文 | 2004.2 | ■ | | | | | | | | | | |
| 70 | A.C(architecture club) | 文 | 2004.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 71 | 天文部 | 文 | 2005.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 72 | 器械体操部 | 体 | 2005.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 73 | 新技術開拓地夢工房行田支部 | 文 | 2005.7 | ■ | | | | | | | | | | |
| 74 | ものづくりSnow boarder—GREEN FEET | 体 | 2005.7 | ■ | | | | | | | | | | |
| 75 | シルバークラフト | 文 | 2006.12 | ■ | | | | | | | | | | |
| 76 | 東京デザイナーズ出展プロジェクト | 文 | 2006.3 | ■ | | | | | | | | | | |
| 77 | アートシネマ部 | 文 | 2006.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 78 | ソフトテニス | 体 | 2006.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 79 | 硬式野球 | 体 | 2006.12 | ■ | | | | | | | | | | |
| 80 | ハンドメイドサークルMONOMANO | 文 | 2006.12 | ■ | | | | | | | | | | |
| 81 | インディアカ | 体 | 2007.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 82 | HIP HOP(ダンス) | 体 | 2007.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 83 | サッカーサークル | 体 | 2007.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 84 | ロケット研究会(同好会) | 文 | 2007.10 | ■ | | | | | | | | | | |
| 85 | 茶道(研究)サークル | 文 | 2008.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 86 | フェニチャーサークル | 文 | 2008.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 87 | サウンドウォーカーズ | 体 | 2008.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 88 | 刺繍工芸会 | 文 | 2008.7 | ■ | | | | | | | | | | |
| 89 | MSE(モーターエンジン)同好会 | 文 | 2009.1 | ■ | | | | | | | | | | |
| 90 | ソフトボールサークル | 体 | 2009.5 | ■ | | | | | | | | | | |
| 91 | 建築研究会(地域貢献) | 文 | 2009.9 | ■ | | | | | | | | | | |
| 92 | 家具サークル | 文 | 2009.9 | ■ | | | | | | | | | | |
| 93 | 特撮ヒーロー研究会 | 文 | 2010.4 | ■ | | | | | | | | | | |
| 94 | ラグビーサークル | 体 | 2010.6 | ■ | | | | | | | | | | |
| 95 | SASUKE・筋肉番付サークル | 体 | 2010.12 | ■ | | | | | | | | | | |
| 96 | 映像表現研究会 | 文 | 2011.3 | ■ | | | | | | | | | | |
| 97 | 樹木・実等の会 | 文 | 2011.3 | ■ | | | | | | | | | | |
| 各年度の活動クラブ・サークル数合計 | | | | 40 | 48 | 65 | 66 | 32 | 36 | 28 | 34 | 38 | 37 | 35 |

凡例 名称は2011年度現在における最新名を原則とし、()で旧名、途中段階で付加されていた文言を入れるものとした。
途中で名称が変更されたものは、一で表示するものとした。

区分の文は文化系・ものづくり系を、体は体育系を示す。
設立は学生委員会承認された年月とした。

| 体育・スポーツ系 | | |
|---|---|---|
|  |  |  |
| バドミントン部：高校時代には選手としてならした先輩もいたクラブは、パワフルな1年生中心に継続中。 | スキー部：野村東太前学長も加入。関東大会に出場する先輩もいた。OBも参加する合宿が特色である。 | フットサル部：2008年からは学長杯スポーツの定番にできたのは、審判などを部員がサポートできるから。 |
|  |  |  |
| 空手部：地元行田の空手教室と連携した練習会などを継続。普段の練習のコーチもお願いしている。 | バスケットボール部：大会出場をめざし、練習にも、その他の準備にも気合が入っている。 | 自動車部：カーオリエンテーリング、ステルス走行会などに出場。通常は車の手入りに余念がない。 |
|  |  |  |
| 弓道部：一期生が中心になって作った的場（第1回学長特別表彰）は、他の大学にない特色。 | バレーボール部：他大学などとの練習試合などを中心に活動している。 | 軟式野球部：行田市の野球連盟に所属し、最高位は市内大会での優勝。獲得したトロフィー、賞状多数。 |
|  |  |  |
| ウェイトトレーニング部：部室にあるトレーニング機器などで鍛えている。他の部活でも使用できる。 | ダンスサークル：川越などで行われるイベント出場をめざす。 | 剣道部：礼儀と集中力を重んじ、練習に励む。時々練習試合をすることもある。 |

| 文化・ものづくり系 | | |
|---|---|---|
| <p>Voice 学生・卒業生のページ MSE 聞き手：製造学科 4 年 野口 陽太 (のぐち・ようた) MSE とは MonoStirlingEngine (ものづくり大学スターリングエンジン) の略で 2008 年 11 月に発足しました。現在製造棟 1 階ものづくり第 2 工房にて 4 年生 5 人、2 年生 2 人の計 7 人体制で作業中です。</p> |  |  |
| <p>文芸部：年に数回の部誌の発行を続けている。現在は大学通信の記事作成に参画している。</p> | <p>軽音部：行田・ものづくり音友会とタイアップしたコンサートの他、祭りのステージ、他大学交流など。</p> | <p>PC研究会：パソコンのハードウェアとソフトウェアの両方に取り組む。</p> |
|  |  |  |
| <p>模型・工作部：学園祭での展示発表を中心に、模型製作の腕を磨きオリジナルの作品に取り組む。</p> | <p>コンクリート研究会：コンクリートの謎と深さに取り組んでいるとあつという間に 4 年間で過ぎるらしい。</p> | <p>デザインアート部：1 クォータに 1 冊の部誌の発行とポスターなどの製作。最近は CG 使用のソフト開発も。</p> |
|  |  |  |
| <p>M&M：ジャズの練習と演奏。毎年学園祭で喫茶店とミニコンサートの企画を製造棟の 2 階で開催。</p> | <p>ランドスケープ研究会：造園の勉強、見学とあわせて、多目的広場の管理業務を実施している。</p> | <p>天文部：天体観測のため、望遠鏡を整備し、星、月などの観察会を行っている。</p> |

3. 学長表彰

学長表彰は毎年度卒業式の折に、その年の卒業生の成果や、その年度で特に顕著であった成果に対して、これを顕彰する目的で実施している。その中で、卒業制作や研究など以外で、課外活動と言えるものでは、次のようなものを挙げる事ができる。

第 1 期生の弓道場 (弓道部、学長特別表彰)、春岡幼稚園壁画 (デザインアート部、学長表彰)、第 2 期生のコンクリートアート「チーズ」(建設プロジェクト、学長特別表彰)、第 3 期生他の学生フォーミュラ参戦とその成果 (MONOレーシング、複数回)、第 5 期生他の NHK ロボットコンテストの成果 (ロボコンプロジェクト、複数回、準優勝時は特別表彰) などが挙げられる。

学長表彰一覧

| 年度 | 種類 | 表彰事由 | 氏名 |
|------|----|-------------------------------------|--------|
| 2004 | ◎ | 学内における弓道場の建設 | 本弓他18名 |
| | ○ | 卒業研究「人間の行動から保守技能・知識を獲得する手法その2」 | 広瀬 |
| | ○ | 春岡幼稚園の壁画デザインおよび職人とのコラボレーション | 藤竹他5名 |
| | ○ | 建築工事における膜厚測定による品質管理方法の検討 | 昇 |
| 2005 | ◎ | 第2回コンクリートミュージアム立体部門金賞 | 内海他2名 |
| | ◎ | 錦帯橋の桁組み構造を忠実に再現 | 井田他3名 |
| | ○ | 「NHK大学ロボコン」における3年連続の出場 | 重村他10名 |
| | ○ | 住まいのデザインコンテスト「木造の可能性」が最優秀 | 高橋 |
| 2006 | ◎ | 吹上駅前時計台の制作 | 栗原他16名 |
| | ◎ | 「光る泥玉」「百土箱」の制作・展示 | 北川原、木村 |
| | ◎ | 優秀板金製品技能フェアにおける金賞他の受賞 | 田島他2名 |
| | ○ | 全日本学生フォーミュラへの参戦とアピール | 小山他14名 |
| | ○ | 集成材アーチの製作 | 里見他3名 |
| | ○ | 修士論文「溶接スラグの建設材料への適用に関する研究」 | 鈴木 |
| 2007 | ◎ | 全日本学生フォーミュラ出場完走およびベストフレームデザイン賞2位 | 箕浦他12名 |
| | ◎ | ロボコンプロジェクト準優勝並びに特別賞受賞 | 吉田他6名 |
| | ◎ | 扇垂木による東屋の製作および鴻巣市への寄贈 | 本田、橋野 |
| | ◎ | JR鴻巣駅東口再開発整備事業の緑地帯の設計および一部製作 | 谷田貝他8名 |
| | ○ | もの・カラクリプロジェクトによる活動 | 吉田、箕浦 |
| | ○ | 技能五輪全国大会における連続敢闘賞受賞 | 田島 |
| | ○ | 岩槻商業高校・帝京高校への高大連携指導協力活動 | 館野他6名 |
| | ○ | コンクリート構造（ポンプ圧送等）に関する一連の研究および学会等での発表 | 染谷 |
| | ○ | コンクリート構造（型枠等）に関する一連の研究および学会等での発表 | 久保田 |
| 2008 | ◎ | 「高強度コンクリートを用いた部材から採取したコア強度の研究」 | 大木 |
| | ○ | 高大連携により指導した高等学校の生徒が最優秀賞 | 福田他4名 |
| | ○ | 「振り込め詐欺の防止に係る装置の製作」による社会的貢献 | 渡壁他3名 |
| | ○ | 平成20年度全国若年者ものづくり競技大会「建築大工職種」第1位 | 橋本 |
| | ○ | 平成20年度卒業制作「木造太鼓橋」の製作および寄贈 | 柳 |
| | ○ | 入母屋屋根模型の制作 | 小林 |
| 2009 | ◎ | ユニバーサルデザインを考慮した「音靴」の考案制作 | 喜納 |
| | ◎ | 技能五輪全国大会（家具部門）への出場と敢闘賞受賞 | 野沢 |
| | ○ | 行田市総合福祉会館「やすらぎの里」中庭の整備 | 高出他4名 |

| 年度 | 種類 | 表彰事由 | 氏名 |
|------|--|--|--------|
| 2009 | ○ | 技能五輪全国大会（建築大工部門）への出場 | 鈴木他2名 |
| | ○ | NPOさいたまSOHO起業家協議会主催「平成21年度懸賞付学生論文」敢闘賞 | 菅原 |
| | ○ | 全日本学生フォーミュラ第15位および日本自動車工業会会長賞受賞 | 酒本他11名 |
| | ○ | 小規模木造軸組家屋の設計施工 | 鈴木他3名 |
| | ○ | 本学庭園広場の整備活動とそれをもとにした独自の卒業制作 | 白川、仁田 |
| | ○ | 技能五輪全国大会（家具部門）への出場 | 堀越他2名 |
| | ○ | 鴻巣市子育て支援課とつづみ学園への絵本棚等の製作 | 泉他2名 |
| | ○ | 鴻巣市常光公民館のちびっ子プレイハウス等の製作 | 佐伯、鈴木 |
| | ○ | シャボン玉空気砲等の開発 | 的場 |
| | ○ | 振り込め詐欺被害防止ソフト制作 埼玉県警表彰 | 浅見他8名 |
| 2010 | ◎ | 第48回技能五輪全国大会（とび）銅賞、彩の国青年マイスター受賞 | 新里 |
| | ◎ | 北条鉄道田原駅待合所の設計施工、加西市長・北条鉄道より感謝状 | 上田他2名 |
| | ◎ | 第48回技能五輪全国大会（建築大工）敢闘賞 | 橋本 |
| | ◎ | 第48回技能五輪全国大会（建築大工）敢闘賞 | 上田 |
| | ○ | NPO法人さいたま起業家協議会主催の第6回懸賞付学生論文 さいたま市長賞受賞 | 小谷野 |
| | ○ | （財）素形材センター素形材産業貢献表彰奨励賞 | 鶴飼他6名 |
| | ○ | 第5回若年者ものづくり競技大会（木材加工第3位） | 榎本 |
| | ○ | 第5回若年者ものづくり競技大会（木材加工第2位） | 渡辺 |
| | ○ | 東京都左官職組合連合会杉並支部 伝統的左官技能技術・技術貢献賞 | 片平、星野 |
| | ○ | 御輿の制作 | 小林、常盤 |
| | ○ | 竪穴式住居の復元、イベント参加 | 新井、奥山 |
| | ○ | やすらぎの里中庭整備事業、左官総覧表紙 | 鈴木他4名 |
| | ○ | 熊谷市平戸公園休憩所新設事業 | 友田 |
| | ○ | 熊谷市指定文化財根岸屋住宅長屋門保存修理事業 | 岡部 |
| | ○ | 彩の国ビジネスアリーナ2011出展、埼玉県北部地域振興センターより礼状 | 川添 |
| ○ | 鴻巣市常光公民館への寄贈、鴻巣市長より感謝状 | 稲葉他2名 | |
| ○ | 鴻巣市児童センターへの寄贈、鴻巣市長より感謝状 | 会田他2名 | |
| ○ | 鴻巣市中央公民館への寄贈、鴻巣市長より感謝状 | 本多他2名 | |
| ○ | 大学内卒業設計最優秀案、（社）埼玉建築設計監理協会主催2010年度卒業設計コンクール出品 | 大河内 | |
| ○ | 2011年日本建築士上学会学生研究奨励賞、日本建築学会関東支部・若手優秀研究報告 | 高梨 | |

◎は学長特別表彰、○は学長表彰

「学園祭の10年」

学園祭誕生

ものづくり大学開学初年度の2001年度、「開学したばかりで学園祭は無理ではないか。」という声もあった。

しかし、最初の年は1度しかない。第一期生のパワフルな顔ぶれから「実行委員会」ができた。

太田教務長はじめ教職員がこれに積極的に応援し、初代の野村東太学長も喜んだ。「埼玉県技能士会連合会」からは、技能まつりを大学のキャンパスで開催という心強い声援をいただいた。

かくして、ものづくり大学の学園祭は誕生することとなったのである。

「碧蓮祭」の命名とテーマ

第2回の学園祭を行うにあたって、懸案となっていた学園祭の名称が検討された。そして、「碧蓮祭」(へきれんさい)と名づけられた。

水と緑の豊かな行田の地を表わす「碧」、悠久の眠りから覚めて花開いた古代「蓮」に因む命名である。

学園祭のテーマは実行委員会で議論して決める。「一心不乱」から始まり、「挑戦」「昇華」「励起」「新」「匠」と続いた。7回目には「ものだいせいだもの」という転換点を迎える。「ものだいせい」という言葉がみんなの心に定着した証ではないか。その後「彩～colors～」 「デザイン～設計～」 「CREATE～創造～」 つくることにこだわる響きである。学園祭実行部隊の心意気、旗印とも言えるのではないだろうか。

定番の企画

1. 本部企画：実行委員会が直接運営する企画であり、展示、オークション、お笑い、ゲーム、フリマなど
2. ステージ企画：大学の足場資材とコンパネを使って学生自身が設営。オーディオ機材はレンタルだが運営も学生。内容は、コンサートを中心に、子供たちとのゲームや試合もの、模範演技、表彰など
3. 展示・講演企画：インターンシップ発表や作品展示などのアカデミックなもの、講演会やトークセッション、学外からの参加など
4. 模擬店企画：クラブ・サークルを中心とした飲食品提供、作品の展示即売、行田地元商店の参加など
5. 共催企画：スタンプラリー
6. 後夜祭企画：定番は花火(写真)だが近年中断中



同時開催・特別企画等

埼玉県技能士会連合会の「彩の国技能まつり」をほぼ毎年同時開催。2011年現在では、埼玉県による「人づくり・ものづくりフェア埼玉」の同時開催という形で続いている。

第7回のクラシックカーは所沢の収集家の方の協力で実現。第8回の公開講座の同時開催は行田市の協力で実現。第10回のコバトン登場はフェアの同時開催で実現など。

独自企画では、第3回のお笑いステージの他、第8回以降のものづくりコンペ(写真)等。



2001年度：第1回学園祭

2001年11月17日(土)～18日(日)

実行委員長：倉川 尚志

テーマ：一心不乱

集客：約5,000人

「第9回彩の国技能まつり」併催

オープンキャンパス

総長と学生の懇談会

花火大会

初回であり、新聞4紙にとりあげられる。地域の自治会等に事前にちらしなどを配布した。



第1回を無事に挙行、丸太によるゲート

2002年度：第2回碧蓮祭

2002年11月2日(土)～3日(日)

実行委員長：福島 信弘

テーマ：挑戦

集客：約4,000人

「第10回彩の国技能まつり」併催

オープンキャンパス

マンガカー、中学生ロボットコンテスト

キャンプファイヤー、花火大会

この年から「碧蓮祭」となる。キャンパス内工事中につき、かなり場所の制約を受け、技能まつりは駐車場部分で開催した。



実行委員が学長と意見交換

| 2003年度：第3回碧蓮祭 | 2005年度：第5回碧蓮祭 |
|--|--|
| <p>2003年11月1日(土)～2日(日) 実行委員長：菊池 達也 テーマ：昇華 集客：約5,000人 「第11回彩の国技能まつり」併催</p> <p>オープンキャンパス 講演「天水桶・JIA、「総長・学長と語る」 マンガンカー キャンプファイヤー、花火大会 この年から技能祭りを建設棟南側で開催。総長・学長と語る試みでは恋愛論まで飛び出した。</p>   <p>次第ににぎやかになる模擬店</p> | <p>2005年11月5日(土)～6日(日) 実行委員長：本塚 正浩 テーマ：新(あらた) 集客：約6,000人 「第13回彩の国技能まつり」併催 「全国とび技能競技大会」併催</p> <p>オープンキャンパス 講演会「日本酒について」酒造組合 マンガンカー 花火大会 イベントが3つ併催でかなりにぎやかだった一方で、市内の他イベントと競合した(時代まつり等)。</p>   <p>手作りステージと実行委員会</p> |
| 2004年度：第4回碧蓮祭 | 2006年度：第6回碧蓮祭 |
| <p>2004年10月30日(土)～31日(日) 実行委員長：菊池 達也 テーマ：励起 集客：約4,000人 「第12回彩の国技能まつり」併催</p> <p>オープンキャンパス 講演会「モノつくりと人つくり」田中正知 マンガンカー 花火大会 初めて1日目に雨天、2日目は晴天だったが、来客は減少した。中越地震を受け、新潟出身学生を中心に募金活動実施。</p>   <p>学長と学生の対談会</p> | <p>2006年11月3日(金・祝)～4日(土) 実行委員長：須藤 浩司 テーマ：匠 集客：約5,000人 「第14回彩の国技能まつり」併催</p> <p>オープンキャンパス 卒業生の語らいの部屋 マンガンカー、折紙建築、竹とんぼ 花火大会 初めて土日でない開催であり、市報への掲載ができなかったなどもあったが、人出は例年程度。</p>   <p>もの大元祖からくりマシンが登場</p> |

2007年度：第7回碧蓮祭

2007年11月3日(土・祝)～4日(日)
 実行委員長：鈴木 康平
 テーマ：ものだいせいだもの
 集客：約4,000人
 「第15回彩の国技能まつり」併催
 オープンキャンパス
 同窓会設立準備協議会
 故野村東太学長の思い出の部屋
 講演「アジアで輝くものづくり企業－何が求められるか」
 石井正、他
 マンガンカー、折紙建築、竹とんぼ
 モーターショー(クラシックカー展示)
 トロッコ列車運行のため、技能まつりをグラウンドで開催。近傍大型店開店と重なり日曜来場が減少。



モーターショー：クラシックカー展示

2009年度：第9回碧蓮祭

2009年10月31日(土)～11月1日(日)
 実行委員長：下 弘之
 テーマ：デザイン～設計～
 集客：約32,000人
 「人づくり・ものづくりフェア埼玉2009」(第17回彩の国技能まつり)併催
 オープンキャンパス
 同窓会第2回総会/親子ものづくり教室
 保護者会
 フェア講演会「造園の魅力に取り付かれて」小峯吉衛氏
 マンガンカー、折紙建築、竹細工
 キャンプファイヤー
 初めて人づくり・ものづくりフェアとのタイアップで開催した。広報の効果も大きく人出が多く、駐車場の不足が著しかった。



学生フォーミュラのデザイン募集テント

2008年度：第8回碧蓮祭

2008年11月1日(土)～2日(日)
 実行委員長：鈴木 康平
 テーマ：彩～colors～
 集客：約3,000人
 オープンキャンパス
 同窓会設立総会
 保護者会、第1回ものづくりコンペ
 特別公開講座「戦いは最後の5分にある」
 矢内理絵子
 マンガンカー、折紙建築、竹とんぼ
 花火大会
 初めて大学単独での学園祭となった。行田市とタイアップした公開講座、同窓会設立総会など内容は豊富だった。



インターン企業から木のマリオンネット登場

2010年度：第10回碧蓮祭

2010年10月30日(土)～31日(日)
 実行委員長：高橋 佑一
 テーマ：CREATE～創造～
 集客：約20,000人
 「人づくり・ものづくりフェア埼玉2010」(第18回彩の国技能まつり)併催
 進学相談会
 同窓会第3回総会/親子ものづくり教室
 保護者会
 フェア「ピンキッシュonステージ」
 「世界一のピザ回し職人」
 マンガンカー、折紙建築、竹細工
 学外の駐車場も借りて開催した。1日目が台風で屋内のみの開催であった。2日目は来場者が多く、駐車場が不足した。



おじさんバンドonもの大特設ステージ

「ものづくり大学 卒業生の10年」

—卒業生に聞く—

ものづくり大学が創立してから10年、今年の春で卒業生も2,000人を超え、ものづくり大学を卒業した卒業生は、さまざまな場所で活躍している。

そんな卒業生の活躍の一部を紹介する。

【第47回技能五輪全国大会 家具部門金賞】

— 建設技能工芸学科4期生

外山紗江（とやまさえ）さん —
勤務先：清水建設(株)東京木工場
研究室：赤松研究室



2009年10月23日（金）～26日（月）までの4日間、茨城県で開催された「第47回技能五輪全国大会」（茨城県日立市）に建設技能工芸学科四期卒業生（外山紗江さん）が出場し、金賞を受賞した。

技能五輪とは、製造業等に携わる23歳以下の若者（一部職種を除く）たちにより、40職種で技能の日本一を競う大会のことである。

【RED BULL BOX CART RACE 2位入賞】

— 製造技能工芸学科2期生チーム —

2009年10月11日に日本で初めて開催されたボックスカートレース「RED BULL BOX CART RACE TOKYO」（東京都臨海副都心、夢の大橋）に製造技能工芸学科二期卒業生チーム（M2）が出場し、第2位を受賞した。

ボックスカートレースとは、2000年にベルギーで第1回大会が開催され、これまで各国で50回以上開催されている人気の国際的イベントのことである。

今大会は、日本・オーストリアの修好140周年を記念して、日本で初めて開催され、600組を超える応募の中から書類選考を通過した78チームが出場（1チーム棄権のため77チームが出走）した。

ものづくり大学二期卒業生チームは、2万1千人の観客が見守る中、見事2位入賞を果たした。1位はF1で有名なスーパーアグリ。モータースポーツのプロ集団が出場する中、第2位という素晴らしい結果を残した。



卒業生がものづくり大学を卒業してものづくりに携わり得たこと・感じたことや、大学時代の思い出、大学への思い等を聞きました。

そして、卒業生で唯一ものづくり大学出身の教員となった、大塚秀三さん（1期生、建設学科・講師）に、10年間ものづくり大学に携わり続ける理由、ものづくり大学の魅力について聞きました。

倉川尚志（くらかわたかし）

学科：製造技能工芸学科

卒業年：2005年（1期生）

出身研究室：神谷研究室

現在の勤務先：株式会社 倉川製作所



■ 現在どんな仕事をしていますか？

現在は、父親の経営する会社に勤めています。

私自身はというと、生産技術部門の立ち上げに奔走しています。現場もやり、営業もやり、生産準備もやり…。まだまだ小さな会社で兼業に兼業が重なっている状態ですが、楽しくやっています。

不況下にあって、なおも成長して行かなければなりません。厳しく苦しい中にこそ、喜びがあると思いますし、自分の仕事を高めることでしか幸せは無いと思っています。自分を高める為には、それなりの努力が必要だと思います。人の3倍やって、やっと人並みだと常に心掛けています。

■ 大学生活の思い出、印象に残っていることを教えてください。（サークル、学祭、実習、講義、卒研など）

自慢ではありませんが、ものづくり大学の学園祭という概念を作り上げたのは私だと自負しています。当時は、砂埃が舞い上がるキャンパスで、全く何も無い状態でした。学園祭を立上げるようにと依頼を受けたのが開催日の45日前、当初集まった準備メンバーは、10名いるかないかでした。「どうせやるなら、日本一のものにしたい」と強く思いました。学生というのは、何でもやれる特権があると思います。学祭準備では、消極的だと思っていた奴が率先して仕事に打ち込んだり、学生から理不尽な要求があった際には、「ダメなものダメだ」と突っぱねたり、今まで自分でも思っても見ないような力が発揮されたと思いました。結果として、2日間で延べ4,000人程度（記憶が定かではないですが）の来場者にお越し頂きました。砂嵐の中、露天が点々と置かれ、成功とは程遠い散々たる結果だったと思いますが、言いようのない充実感を憶えたことを思い出します。

■ 今後どのような大学になって欲しいと思いますか？

楽しいことに皆で大きな口をあけて笑い、悲しいことや悔しいことがあれば声を出して泣く、許せないことがあれば怒る。そんな当たり前な人間を育てる学校であってほしいと思います。

戸田祥史（とだよしふみ）

学科：製造技能工芸学科

卒業年：2005年（1期生）

出身研究室：山崎研究室

現在の勤務先：(株)キッズ・コーポレーション



■ 現在どんな仕事をしていますか？

大学・短期大学・専門学校などから広告費をいただき、学校紹介などの冊子を作成しています。また、作成した冊子を高等学校へ無料で配布したり、高等学校内での進路指導のイベントなどを企画、実施なども行っています。その中で、私は企画営業課として毎日各学校へ行き、入試広報の方であったり、進路指導部の方であったりと、色々な人にお会いし、営業活動を行っています。もちろん、ものづくり大学にも営業に行っています。どうしてもしたら、母校を日本一の大学に出来るか、広報の方とお話をさせて頂いています。

■ 大学生生活の思い出、印象に残っていることは？

一期生ということもあり、色々な事を一から作りました。学園祭を一からみんなで作り上げたり、部活動ではバスケットボール部をみんなで盛り上げていきました。

学園祭は、第一回から始まり、数年間実行委員として携わりました。一回目こそ、年長者が中心になりやってくれましたが、その後は同年代の仲間でも一回目よりも、二回目、二回目よりも三回目と少しでも良いものを作ろうと、みんなで話し合い、時には喧嘩しながら作り上げました。部活動では、製造学科、建設学科関係なくみんなで集まり、汗を流し色々な方との交流を深めました。

これら一つひとつの事が、すべて思い出であり、今でも印象に残っています。

■ 大学で学んだことで役に立っていることは？

私は製造学科だったのですが、就職先は製造業とは違います。ですので、授業で学んだ事が直接役に立っていることは残念ながらありません。しかし、間接的に役に立っているような事は多々あります。例えば、チームワークです。FゼミやLゼミなどで、チームで一つのものを作り上げる大変さ、大切さを学びました。それは、現在の職場でも十分に活かされています。

また、マネジメント論なども少しずつですが、活かされてきています。当時は、なかなか理解出来なかった部分も、社会人になり仕事を覚えていくうちに少しずつ理解出来ます。みなさんも、今は役に立たないと思っていてもいつか役に立つ日が来ます。その日のためにも今出来る事は精一杯やった方が良いでしょう。

■ 今後どんな大学になってほしい？

学生時代から、せっかくなら日本一の大学になってほしいと、友人とよく話をしていました。その思いは今でも変わっていませんし、仕事柄いつも気にしています。開学当初の

理念を忘れる事なく、他大学に流されないような学校になって欲しいと思います。そして、授業だけでは学べない知識、経験を得られるような学校になってくれたら嬉しいです。

後藤康聡（ごとうやすあき）

学科：製造技能工芸学科

卒業年：2006年（2期生）

出身研究室：神谷研究室

現在の勤務先：NSKニードルベアリング(株)



■ 現在どんな仕事をしていますか？

私は生産技術部加工技術グループに所属しており、研削・研磨関係の仕事をしています。会社は群馬県高崎市にあり、仕事内容は、自動車用エンジンヘッドの中にあるタペットローラーや変速機（ダブルクラッチミッション）用ベアリングの研削工程の試作対応、設備導入、改善、故障修理などを行っております。現在は来年の自動車各社のエンジンモデルチェンジに向けた試作と量産体制構築を行っております。

■ 大学生活の思い出、印象に残っていることは？

わたしの大学生活は、夜遅くまで仲間と語り合い、毎日ものづくりに没頭したことが一番の思い出です。同じ趣味やものづくり観を持った仲間と大学で初めて出会い、真剣に構想を練り、時には言い合いもしながら作品やマシンを作ることがとても楽しく、講義が終わると作業開始で、充実した学生生活でした。電気自動車や人力ボートを作った時は、大会まで時間が無く、1週間くらい寝ずに作ったのを思い出します。大会では毎回、思うような結果は出ませんでした。自分たちで考えた新しい構造や試みで会場を沸かせた時はその疲れも吹き飛び、次はこういうのを作ってみようと新たな力が沸いたことが、印象に残っています。

■ 大学で学んだことで役に立っていることは？

ものづくり大学のカリキュラムは幅広い分野を勉強するので、社会人になって初めてやる仕事でも大学時代に何かの授業で学んだことがあり、取り掛かりやすく、図面を引く時にも旋盤やフライスなど実際使った事があるので加工方法やその手順を想像しながら早くて安くて作り易い部品を作図することが出来、ものづくり大学でよかったなと思います。

また、新入社員で入った時に、製造業の基本である『報告・連絡・相談』や『3現主義』なども大学時代に教わっていたので同期より若干のアドバンテージがあった気がします。

■ 今後どんな大学になってほしい？

ものづくり大学は特色ある大学なのでその特色をより伸ばし、個性ある卒業生を輩出してほしいと思います。そして、さらにものづくりしやすい環境を整えて頂き、ものづくり

の楽しさや難しさをより実体験できる大学を目指してほしいと思います。

在学生にはもっと大学生生活を楽しんでほしいと思います。在学中しか出来ない勉強やものづくりにもっと没頭してほしいと思います。社会人になると自分の好きなものを好きに作ることは難しくなります。在学中に作りたいものを真剣に時間をかけて作ってほしいです。また、それをよりバックアップする大学になっていくことを希望します。

久保田英樹（くぼたひでき）

学科：建設技能工芸学科

卒業年：2008年（4期生）

出身研究室：澤本研究室

現在の所属：日本大学大学院理工学研究科 研究生



■ 現在どんな仕事をしていますか？

現在は、日本大学大学院の研究生として大学に通っています。主に、研究室の仕事や後輩の指導にあたっています。大学院入学当初は、戸惑うことばかりでしたが、大学を移って3年目になり、ようやく慣れてきました。一番の悩みの種は、構造力学でした。難解な数式が黒板を埋め尽くす講義には、正直、嫌気がさしましたが、なんとか単位を修得でき、無事、大学院を修了することができました。

■ 大学生活の思い出、印象に残っていることを教えてください。（サークル、学祭、実習、講義、卒研など）

大学生活で印象に残っていることは、とにかく実験を多くやったことです。縁があって2年次の後半から、ある研究室に出入りさせてもらっていたのですが、その研究室は実験量が多いことで有名な研究室で、長期休暇の期間はほぼ毎日実験をおこなっていました。また、学外で研究成果を発表させていただく機会をいただいたのですが、その論文を仕上げるために、徹夜したことも多かったです。

■ ものづくり大学で学んだことで役立っていることは？

実習を通して、現業の基礎的なことを学べたことです。他の大学では、講義のみの知識でしかないものが、ものづくり大学では、実際に触れることができるのでイメージしやすかったです。実務寄りの知識は他の院生には、負けていないと思っています（そう思いたいです）。また、授業外でも研究室の活動を通して、人との接し方や忍耐力などもついたと思います。

■ 今後どのような大学になって欲しいと思いますか？

ものづくり大学の特色は、実習中心のカリキュラムにあると思います。実習のできる設備や環境も整っているので、この先も実習に重点をおいてほしいです。また、大学にある設備を有効活用して、ものづくり大学ならではの卒論を作成して欲しいと思います。

栗原由貴（くりはらゆき）

学科：建設技能工芸学科

卒業年：2009年（5期生）

出身研究室：藤原研究室

現在の勤務先：有限会社 ノアノア空間工房



■ 現在どんな仕事をしていますか？

東京の設計事務所に勤めています。

社員は3人と一匹、主にやるのは住宅や店舗の意匠設計で、基本的に図面は手書きです。今は設計士の下、東京の新築・木造三階建ての住宅を2件担当。入社当初から携わってきた1件は偶然にも、担当の構造設計事務所には大学の先輩が、建設会社には元クラスメイトが勤めているので、とても心強く思っています。

■ 大学生活の思い出、印象に残っていることは？

ものづくり工房での時間です。

技能工芸という大きな枠の中で、それぞれみんな違うカリキュラムでの知識、技術を持っているのに、その人たちが繋がっていないのはもったいない！！色んな人が好きなときに好きなだけ集まり、上下関係なく思ったままに意見をぶつけ合ったり、知識や技術を教えあったり出来る場所を作りたい。そんな意見から友が友を呼び始めた指導員のいない特別授業というか、井戸端会議のようなもの。その中で、議論に議論を重ね作ったものや、かかった時間は全て心に残るいい思い出です。

■ 大学で学んだことで役にたっていることは？

ものづくり大学で学んで役立っていることは、実習で現物に触れ、二次元でしかなかったものが三次元となり、より現実的に構想する力がついたことです。また、最初は、「こんなものが建つといいな」という想像をするだけでしたが、実物を作り上げる技術も併せて学んで、想像を形にするのに必要な知識・技能が身についたことです。

■ 今後どんな大学になってほしい？

もっと繋がりを大事にする大学になってほしいです。

私自身、友達の繋がりで有名建築家とのプロジェクトに参加させてもらったり、授業のつながりで大工の現場を体験させてもらったり、地域のつながりで防水工事の体験をさせてもらったりと、本当に沢山の方々のおかげでいろんな体験ができ、知ることができました。また、今でもこの4年間で出会った沢山の方々にお世話になっています。

今の就職先も、遠い遠い繋がりで偶然にも出会うことが出来た、自分にぴったりの事務所です。

ものづくり大学だからこその大きな繋がりを、先生方も生徒も一人ひとり、つなげていって将来に役立てて欲しいなと思います。

大塚秀三（おおつかしゅうぞう）

学科：建設技能工芸学科

卒業年：2005年（1期生）

出身研究室：中田研究室

現在の勤務先：ものづくり大学技能工芸学部建設学科



とにかく何もない。

これが入学当時初めてキャンパスに立ったときの正直な気持ちである。春風吹きすさむまさに西部劇に登場する寂れた田舎町の世界である。未だ駐車場の整備の最中で、外構工事が完成していなかった。とにかく寂しいキャンパスであった。反面、全ては自身の取組み次第で如何様にも出来るという大きな期待感を抱かせる光景でもあった。幸いなことに先輩がいないことに加え、何より先例がなかったからである。

同期生には本当に救われた。1期生は社会人入学が多く、一番の年長者は確か50歳代であった。このことで、当初危惧していた世代間の隔絶を感じることはほぼ皆無であったし、むしろ同期生には助けられることが多く、学ぶことも多かった。全ては自分達で創り上げるという気概に満ちあふれていた。こうしたことからすると、年寄りくさいと言われそうだが、最近の学生が大人しくなってきたことが少々気懸かりではある。いくつかの研究室は放課後となれば学生と教員、さらには非常勤の先生方も巻き込んだ居酒屋と化していた。両者の距離は相当に近いものであり、今となってはとても直接言えないような生意気なことも平気で話せる雰囲気があった。記念すべき第一回の碧蓮祭では、前日の貴重な講義時間を拝借して、全学を挙げてモニュメントやゲートづくりを行ったことが懐かしい。また、協賛企業のご厚意による予算を掻き集め、大花火大会とはいかないまでも、尺玉を含む仕掛け花火を打ち上げて頂いたことも忘れられない思い出である。花火の打ち上げは、その後数回の学祭で継続されたが、季節外れの花火大会に地元住民の評判も良かった。自由で大らかな時代であった。規則もほとんどなく(あったのかもしれないが、意識したことは少なかった)、施設は自由に使うことができた。これに便乗してものづくり工房に屯して朝まで建築について議論したり作業したり、とにかくよく語りよく飲み、多くのことを学んだ。まさに「ものづくり」の一端を担っているという自負心の塊だった。ただ、教員になって思えば、当時の教職員の方々は世代がまちまちで自由闊達に動き回る学生の対応に苦慮されていたかもしれない。

小生の学生生活の場は、ほとんどが研究室であった。研究室で寝起きし、合間に授業に出掛けるような生活だった。これも、ある先生に捕まったのがいけなかった。1年生の暮れ頃だったと思うが、研究室の隅っこに机とパソコンを与えられ、いわば書生のような体で昼夜問わず親身に指導して頂いた。世代が近いということもあり、良き兄貴分として接して頂いたことも幸いだったかもしれない。いきなり論文を書け、実験してみると、意匠設計という畑違いの経験しかなかった小生にとっては面食らう一方で、建築に対する自身の視野の狭さを認めざるを得なかった。しかし、分からないことをいかに理解し、成果を出すかというプロセスは、仕事と通底するものがあり、全てを吸収してやろうと食欲に取

り組むことを心掛けていた。今となっては、その後教員として奉職することになった大きな転換点だったのかもしれない。研究テーマを与えられ、期待されることの悦びと重圧が何より心地良かった。よく研究室に泊まり込み、徹夜してもなかなか終わらない論文と実験を恨めしく思いながらも、早朝の研究室の窓に差す朝焼けを見ることが清々しかった。昨今では不謹慎かもしれないが、同期生の中で小生が最も多く大学の電気代と施設を消費したかもしれない。こうしたこともあってか、研究室の同期生や後輩達とはいまだに頻繁に連絡を取り合うし、一部では研究を共にする関係となっている。先生は、今では出身大学に戻られ本学にはおられないが、本当に感謝してもしきれない存在である。先生の残してくれた貴重な無形の財産を小生の研究室の学生にどう伝えていくかが、自分の能力に照らして悩ましく思う昨今である。

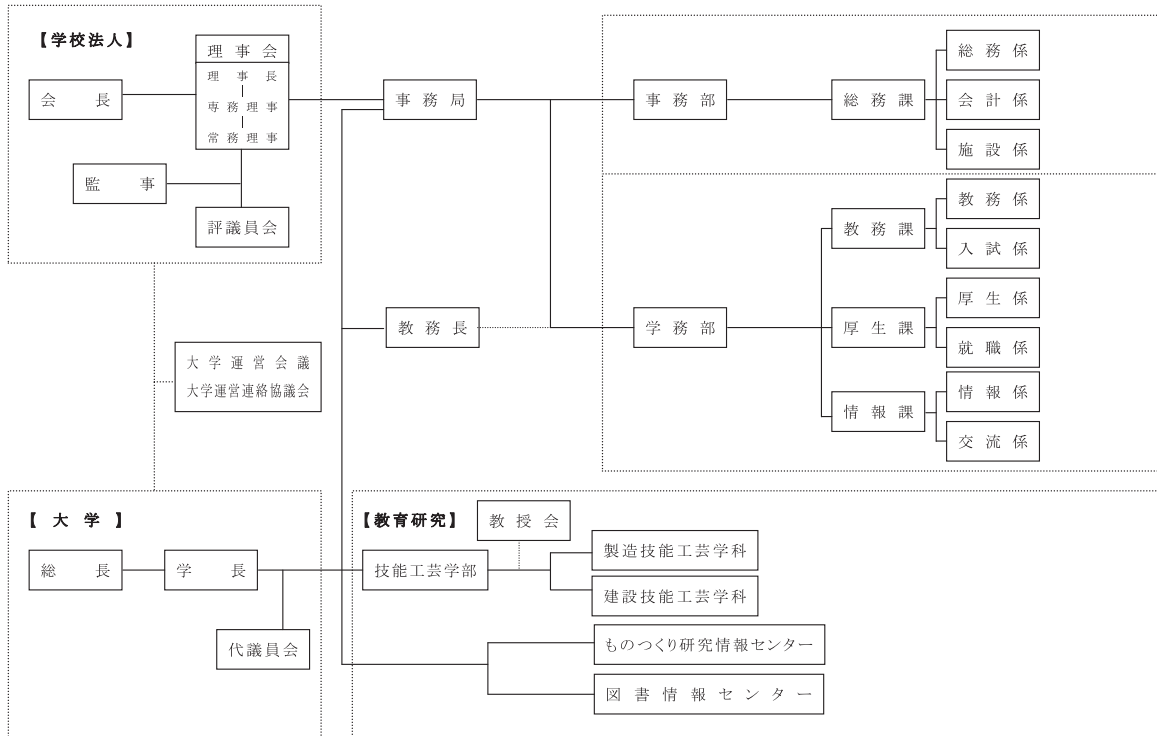
そして忘れてはならないのが同窓会の活動である。学生課の協力により、2008年11月2日の設立総会をもって「ものづくり大学同窓会」が発足した。小生も微力ながら会の運営に携わっている。十数名の役員を世話役として、多忙な同窓生の協力を仰ぎながら、児童対象の体験型工作教室を開催したり、オープンキャンパスにおける高校生向けのノベルティグッズを作製・配布したりと活発に活動している。小規模大学ならではの利点を活かして同窓生の強固なネットワークの構築と大学周辺地域を中心とした社会貢献活動の活発化など、インパクトのある活動をさらに広く展開していきたいと考えている。ぜひとも教職員をはじめとした関係各位には、ご協力・ご支援をお願いする次第である。

これまで学生時代の個人的な思い出をずらずらと書き連ねてきたが、ここに執筆の機会を与えて下さった教職員各位に心より御礼を申し上げる次第である。三十路を過ぎてから、遅ればせながら充実した学生生活を謳歌できたのも、ものづくり大学の懐の深さと同級生の面々の個性に救われたからに他ならない。

末筆になるが、我がものづくり大学が未来永劫持続的に発展していくことを当事者のひとりとして祈念してやまない。卒業生が2,000名を数え、1期生が三十路に差し掛かるこれからが本当の真価を問われるが、その期待に見事に応えるものと強く信じている。

「組織の変遷」

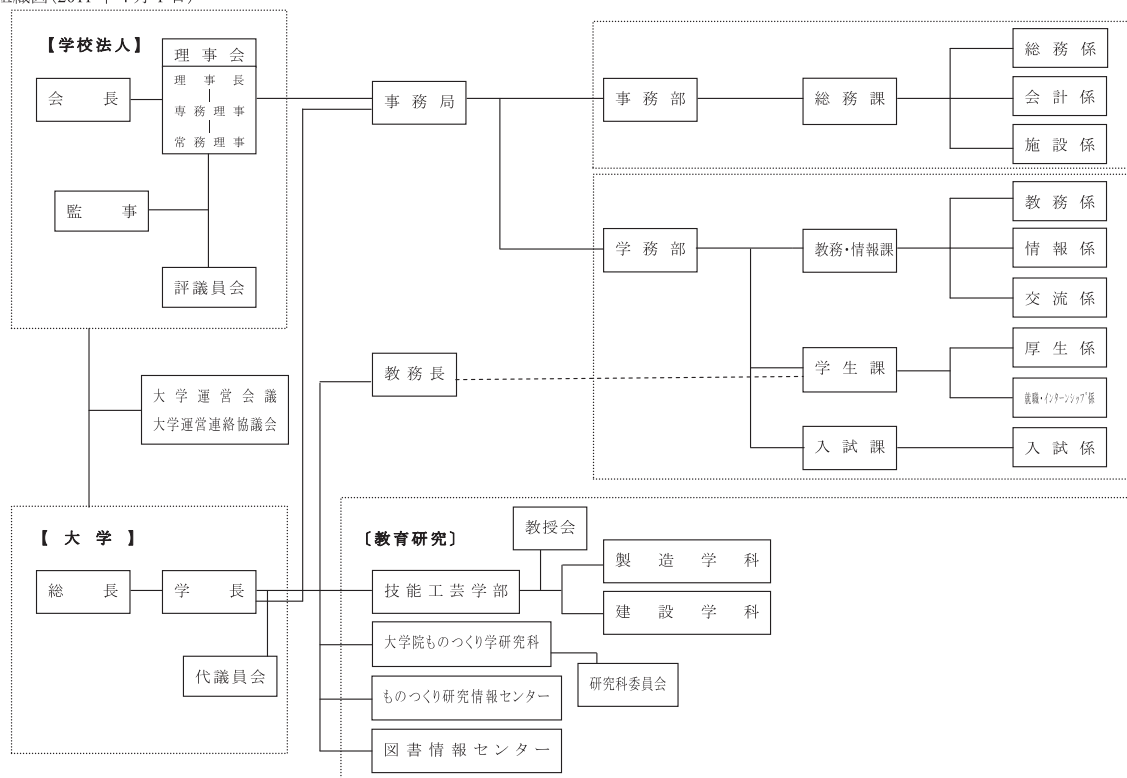
開学時(2001年4月1日)



開学時からの変遷

- ※2003年4月：厚生課から学生課に名称変更
就職係から就職・インターンシップ係に名称変更
- ※2005年4月：大学院ものづくり学研究科設置
- ※2007年4月：教務課及び情報課が教務・情報課として統合
教務課入試係が入試課として独立

組織図(2011年4月1日)



※2009年4月：就職支援本部を新設

※2010年4月：学校法人国際技能工芸機構から学校法人ものづくり大学に法人名称変更

※2011年4月：学科名称変更

製造技能工芸学科→製造学科

建設技能工芸学科→建設学科

「学校法人役員・評議員・大学教職員・非常勤講師一覧」

| 理事 | | | 監事 | | |
|-------|------------|-------------------|-------|------------|------------|
| 氏名 | 就任年月日 | 退任・辞任年月日 | 氏名 | 就任年月日 | 退任・辞任年月日 |
| 西島 安則 | 2000/12/26 | 2001/03/31 | 小野 俊夫 | 2000/12/26 | 2002/03/14 |
| 武田 茂夫 | 2000/12/26 | 2002/03/31 | 菅間 忠男 | 2000/12/26 | 2002/06/30 |
| 山口 治郎 | 2000/12/26 | 2003/05/29 | 九重 達夫 | 2002/07/01 | 2004/03/24 |
| 青木 信之 | 2002/05/31 | 2004/03/24 | 宗岡広太郎 | 2002/03/15 | 2004/03/24 |
| 増野 武夫 | 2000/12/26 | 2004/06/04 | 鬼武 孝夫 | 2004/03/25 | 2011/03/31 |
| 都築 信 | 2004/03/25 | 2004/08/04 | 吉村 憲治 | 2004/03/25 | 2007/03/31 |
| 池田 克忠 | 2000/12/26 | (専務理事) 2005/03/31 | 齋藤 康夫 | 2007/04/01 | 2010/03/31 |
| 清水 傳雄 | 2000/12/26 | (理事長) 2005/03/31 | 山田紘一郎 | 2010/04/01 | |
| 山下 富雄 | 2001/08/01 | (常務理事) 2005/03/31 | 野上 武利 | 2011/04/01 | |
| 齋藤 健 | 2005/01/08 | 2006/03/22 | | | |
| 金井 務 | 2000/12/26 | 2006/03/31 | | | |
| 豊田章一郎 | 2000/12/26 | 2007/03/31 | | | |
| 和田 龍幸 | 2000/12/26 | 2007/03/31 | | | |
| 横田 昭夫 | 2003/05/30 | 2007/04/30 | | | |
| 原 宏 | 2005/01/08 | 2007/05/28 | | | |
| 野村 東太 | 2000/12/26 | (学長) 2007/08/21 | | | |
| 丹保 憲仁 | 2000/12/26 | 2009/03/31 | | | |
| 前田又兵衛 | 2000/12/26 | 2009/03/31 | | | |
| 岡島 敦子 | 2007/04/01 | 2009/03/31 | | | |
| 野田 一夫 | 2001/07/01 | 2009/06/30 | | | |
| 吉川 弘之 | 2000/12/26 | 2011/03/31 | | | |
| 石 弘光 | 2009/04/01 | 2011/03/31 | | | |
| 梅原 猛 | 2000/12/26 | ※総長 | | | |
| 石岡慎太郎 | 2005/04/01 | | | | |
| 北尾 美成 | 2005/04/01 | | | | |
| 庄山 悦彦 | 2006/04/01 | | | | |
| 張 富士夫 | 2007/04/01 | | | | |
| 工藤 正司 | 2007/05/29 | | | | |
| 利根 忠博 | 2007/05/29 | | | | |
| 神本 武征 | 2008/04/01 | ※学長 | | | |
| 中村 芳夫 | 2009/04/01 | | | | |
| 前田 靖治 | 2009/04/01 | | | | |
| 塩川 修 | 2009/05/22 | | | | |
| 寺島 実郎 | 2009/07/01 | | | | |
| 佐々木正峰 | 2011/04/01 | | | | |
| 宮本 洋一 | 2011/04/01 | | | | |

評議員

| 氏名 | 就任年月日 | 退任・辞任年月日 | 氏名 | 就任年月日 | 退任・辞任年月日 |
|--------|------------|------------|-------|------------|------------|
| 池上 恵蔵 | 2000/12/26 | 2001/03/31 | 日向 輝彦 | 2007/04/01 | 2009/03/31 |
| 永井多恵子 | 2000/12/26 | 2001/03/31 | 櫻井大八郎 | 2008/06/01 | 2009/03/31 |
| 守友 貞雄 | 2000/12/26 | 2001/03/31 | 児玉 洋介 | 2005/04/01 | 2009/05/21 |
| 笹森 清 | 2000/12/26 | 2002/03/14 | 田中 正一 | 2007/04/01 | 2009/05/21 |
| 福岡 道生 | 2000/12/26 | 2002/05/28 | 梅原 誠 | 2008/05/27 | 2009/06/25 |
| 稲見 辰夫 | 2000/12/26 | 2003/03/31 | 古賀 伸明 | 2006/03/21 | 2010/03/31 |
| 谷口 弘芳 | 2000/12/26 | 2003/03/31 | 江上 節子 | 2000/12/26 | 2011/03/31 |
| 原田 昭 | 2003/04/01 | 2005/01/07 | 野上 武利 | 2005/04/01 | 2011/03/31 |
| 池田 克忠 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 大野 健二 | 2007/04/01 | 2011/03/31 |
| 上田 惇生 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 立花 貞司 | 2007/04/01 | 2011/03/31 |
| 太田 邦夫 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 越智 道雄 | 2009/04/01 | 2011/03/31 |
| 岡本太右衛門 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 坂口 寛子 | 2009/04/01 | 2011/03/31 |
| 熊倉 賢一 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 白井 裕泰 | 2009/04/01 | 2011/03/31 |
| 清水 傳雄 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 増渕 文男 | 2009/04/01 | 2011/03/31 |
| 田中 文男 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 龍前 三郎 | 2009/04/01 | 2011/03/31 |
| 二宮 睦治 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 前田 操治 | 2003/04/01 | |
| 山崎 善弘 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 石岡慎太郎 | 2005/04/01 | |
| 山田 勝兵 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 北尾 美成 | 2005/04/01 | |
| 吉川 昌範 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 菰田 勇司 | 2005/04/01 | |
| 六波羅 昭 | 2000/12/26 | 2005/03/31 | 飛内 圭之 | 2005/04/01 | 2007/03/31 |
| 山下 富雄 | 2001/08/01 | 2005/03/31 | 飛内 圭之 | 2009/04/01 | |
| 草野 忠義 | 2002/03/15 | 2006/03/20 | 中村 芳夫 | 2007/04/01 | |
| 宗岡広太郎 | 2000/12/26 | 2006/06/27 | 飯山 和人 | 2007/05/29 | |
| 山田 昭夫 | 2000/12/26 | 2007/03/31 | 神本 武征 | 2008/04/01 | |
| 和田 龍幸 | 2000/12/26 | 2007/03/31 | 井上 章一 | 2009/04/01 | |
| 上坂 凱勇 | 2000/12/26 | 2007/03/31 | 川野辺裕幸 | 2009/04/01 | |
| 矢野 弘典 | 2002/05/31 | 2007/03/31 | 川橋 正昭 | 2009/04/01 | |
| 矢次 健志 | 2005/01/08 | 2007/03/31 | 倉川 尚志 | 2009/04/01 | |
| 上村 隆史 | 2005/04/01 | 2007/03/31 | 東江 真一 | 2009/04/01 | |
| 野村 大次 | 2005/04/01 | 2007/03/31 | 中川 武 | 2009/04/01 | |
| 松島 正秀 | 2000/12/26 | 2007/05/28 | 松本 潤 | 2009/04/01 | |
| 野村 東太 | 2000/12/26 | 2007/08/21 | 毛利 昭 | 2009/04/01 | |
| 奥田 久美 | 2007/04/01 | 2008/05/26 | 森山 茂夫 | 2009/04/01 | |
| 紀陸 孝 | 2007/04/01 | 2008/05/28 | 西澤 敏雄 | 2009/05/22 | |
| 大河原愛子 | 2000/12/26 | 2009/03/31 | 渡辺 勉 | 2009/05/22 | |
| 尾島 俊雄 | 2000/12/26 | 2009/03/31 | 南雲 弘行 | 2010/04/01 | |
| 香山 壽夫 | 2000/12/26 | 2009/03/31 | 赤松 明 | 2011/04/01 | |
| 佐藤 壽芳 | 2000/12/26 | 2009/03/31 | 市川 茂樹 | 2011/04/01 | |
| 白幡洋三郎 | 2000/12/26 | 2009/03/31 | 宇居 章 | 2011/04/01 | |
| 橋本 久義 | 2000/12/26 | 2009/03/31 | 生川 朋 | 2011/04/01 | |
| 山根 一眞 | 2000/12/26 | 2009/03/31 | 古橋 衛 | 2011/04/01 | |
| 岩田 一明 | 2005/04/01 | 2009/03/31 | 御手洗尚樹 | 2011/04/01 | |
| 神谷 聖志 | 2005/04/01 | 2009/03/31 | 室久保貞一 | 2011/04/01 | |
| 中村 隆夫 | 2005/04/01 | 2009/03/31 | 森 美有貴 | 2011/04/01 | |
| 岩田喜美枝 | 2007/04/01 | 2009/03/31 | 八代 克彦 | 2011/04/01 | |
| 坂口 昇 | 2007/04/01 | 2009/03/31 | | | |

教育職員

| 氏名 | 入社年月日 | 退職(契約終了)年月日 | 氏名 | 入社年月日 | 退職(契約終了)年月日 |
|-----------------|------------|-------------|-------|------------|-------------|
| 稲山 正弘 | 2001/04/01 | 2002/03/31 | 坂口 昇 | 2003/04/01 | |
| 栗原 幸夫 | 2002/04/01 | 2003/08/31 | 白井 裕泰 | 2003/04/01 | |
| 岩下 繁昭 | 2001/04/01 | 2005/03/31 | 鈴木 雅也 | 2003/04/01 | |
| 上田 惇生 | 2001/04/01 | 2005/03/31 | 平岡 尚文 | 2003/04/01 | |
| 太田 邦夫 | 2001/04/01 | 2005/03/31 | 町田 清之 | 2003/10/01 | |
| 蟹澤 宏剛 | 2001/04/01 | 2005/03/31 | 八代 克彦 | 2005/04/01 | |
| 吉川 昌範 | 2001/04/01 | 2005/03/31 | 横山 晋一 | 2005/04/01 | |
| 田中 文男 | 2002/04/01 | 2005/03/31 | 澤本 武博 | 2005/05/01 | |
| 中田 善久 | 2001/04/01 | 2007/03/31 | 田尻 要 | 2005/09/01 | |
| 田中 正知 | 2001/11/01 | 2007/03/31 | 赤松 明 | 2006/04/01 | |
| 中村 勉 | 2003/04/01 | 2007/03/31 | 菅谷 諭 | 2006/04/01 | |
| 鎌田 誠 | 2005/04/01 | 2007/03/31 | 藤原 成暁 | 2006/04/01 | |
| 山崎 敦子 | 2001/04/01 | 2008/03/31 | 佐々木昌孝 | 2006/09/01 | |
| 堀 聡 | 2001/04/01 | 2008/10/10 | 大島 博明 | 2007/04/01 | |
| 河谷 史郎 | 2003/04/01 | 2009/03/31 | 大塚 秀三 | 2007/04/01 | |
| 石井 隆 | 2002/04/01 | 2009/10/31 | 河内 眞作 | 2007/04/01 | |
| 中村 隆夫 | 2001/04/01 | 2010/03/31 | 三井 実 | 2009/07/01 | |
| 那須 武秀 | 2001/04/01 | 2010/03/31 | 伊藤 大輔 | 2009/09/01 | |
| 神谷 聖志 | 2001/04/01 | 2011/03/31 | 石井 哲也 | 2009/11/01 | |
| 櫻井大八郎 | 2003/04/01 | 2011/03/31 | 林 英昭 | 2010/04/01 | |
| 平谷 雄二 | 2004/04/01 | 2011/03/31 | 土井香乙里 | 2010/09/01 | |
| 高橋 正明 | 2001/04/01 | | 鈴木 克美 | 2011/04/01 | |
| 土居 浩 | 2001/04/01 | | | | |
| 東江 真一 | 2001/04/01 | | | | |
| 野村 大次 | 2001/04/01 | | | | |
| 原 薫 | 2001/04/01 | | | | |
| Vichai Saechout | 2001/04/01 | | | | |
| 日向 輝彦 | 2001/04/01 | | | | |
| 深井 和宏 | 2001/04/01 | | | | |
| 藤澤 政泰 | 2001/04/01 | | | | |
| 細田 保弘 | 2001/04/01 | | | | |
| 増渕 文男 | 2001/04/01 | | | | |
| 松本 宏行 | 2001/04/01 | | | | |
| 三原 斉 | 2001/04/01 | | | | |
| 森山 茂夫 | 2001/04/01 | | | | |
| 市川 茂樹 | 2002/04/01 | | | | |
| 香村 誠 | 2002/04/01 | | | | |
| 近藤 照夫 | 2002/04/01 | | | | |
| 高橋 宏樹 | 2002/04/01 | | | | |
| 飛内 圭之 | 2002/04/01 | | | | |
| 平井 聖児 | 2002/04/01 | | | | |
| 北條 哲男 | 2002/04/01 | | | | |
| 三橋 眞成 | 2002/04/01 | | | | |
| 龍前 三郎 | 2002/04/01 | | | | |
| 渡辺 松男 | 2002/05/01 | | | | |
| 小野 泰 | 2003/04/01 | | | | |

| 一般職員 | | | | | |
|-------|------------|-------------|-------|------------|-------------|
| 氏名 | 入社年月日 | 退職(契約終了)年月日 | 氏名 | 入社年月日 | 退職(契約終了)年月日 |
| 高堂 幸裕 | 2001/04/01 | 2001/03/31 | 関 正幸 | 2007/04/01 | 2011/03/31 |
| 熊川 華恵 | 2001/04/01 | 2002/03/31 | 山崎 幸典 | 2008/08/01 | 2011/03/31 |
| 三宅 奨 | 2001/04/01 | 2002/03/31 | 大原 仁 | 2009/04/01 | 2011/03/31 |
| 生貝 典子 | 2001/04/16 | 2002/03/31 | 郡山 力郎 | 2010/02/01 | 2011/03/31 |
| 竹之内博次 | 2001/04/01 | 2003/03/31 | 柿沼千香子 | 2001/04/01 | 2011/05/31 |
| 中村 和彦 | 2001/04/01 | 2003/03/31 | 岩間 由美 | 2001/04/01 | |
| 吉野 聡一 | 2001/04/01 | 2003/03/31 | 工藤 淳 | 2001/04/01 | |
| 藤沢 翼也 | 2001/04/06 | 2003/03/31 | 窪田 岳領 | 2001/04/01 | |
| 古賀 隆二 | 2001/04/09 | 2003/03/31 | 久力 一誠 | 2001/04/01 | |
| 柏谷 和吉 | 2001/04/01 | 2003/05/31 | 斉藤 由匡 | 2001/04/01 | |
| 宮澤健一郎 | 2001/04/01 | 2003/09/30 | 高村さとみ | 2001/04/01 | |
| 近藤 利枝 | 2001/04/17 | 2003/09/30 | 田巻 雅巳 | 2001/04/01 | |
| 横溝 清貴 | 2001/08/13 | 2004/03/08 | 永島志津江 | 2001/04/01 | |
| 森部 正昭 | 2001/04/01 | 2004/03/31 | 東 隆俊 | 2001/04/01 | |
| 重谷 哲二 | 2001/04/01 | 2005/03/31 | 福田 慎 | 2001/04/01 | |
| 昼間 稔 | 2002/04/01 | 2005/03/31 | 宮本 伸子 | 2001/04/01 | |
| 飯島 英樹 | 2003/04/01 | 2005/03/31 | 糸原 民子 | 2002/04/01 | |
| 児玉 洋祐 | 2003/04/01 | 2005/03/31 | 新井 沙知 | 2003/04/01 | |
| 中牟田 誠 | 2003/04/01 | 2005/03/31 | 高島 良二 | 2003/04/01 | |
| 小峰 正昭 | 2004/04/01 | 2005/03/31 | 長谷川和美 | 2004/01/01 | |
| 並木亜由美 | 2001/04/04 | 2005/05/15 | 石川 一樹 | 2004/04/01 | |
| 湯本 義仁 | 2001/04/01 | 2006/03/31 | 酒井紅仁子 | 2005/04/01 | |
| 横井 健 | 2001/04/01 | 2006/03/31 | 岩崎 一真 | 2006/01/01 | |
| 高野 六雄 | 2003/05/01 | 2006/10/31 | 上原 苑子 | 2006/04/01 | |
| 近藤 元秀 | 2006/01/01 | 2006/11/30 | 江川 弥子 | 2006/04/01 | |
| 森 純夫 | 2001/04/01 | 2007/03/31 | 沼沢 武 | 2006/04/01 | |
| 徳田 昭 | 2003/01/01 | 2007/03/31 | 長谷川真紀 | 2006/04/01 | |
| 湯澤 輝明 | 2003/04/01 | 2007/03/31 | 五位渕 大 | 2007/04/01 | |
| 茂木 英朱 | 2004/04/01 | 2007/05/15 | 砂永 孝 | 2007/04/01 | |
| 黒田 武志 | 2007/04/01 | 2007/05/15 | 堤 茂雄 | 2007/04/01 | |
| 荻野 正夫 | 2006/04/01 | 2007/05/31 | 西島 峯夫 | 2007/04/01 | |
| 柄沢 敏行 | 2005/07/01 | 2008/07/31 | 小川 俊夫 | 2007/06/01 | |
| 近藤 英毅 | 2006/10/01 | 2009/03/29 | 加藤 大樹 | 2008/04/01 | |
| 尾池 康雄 | 2002/04/01 | 2009/03/31 | 若林 裕之 | 2008/04/01 | |
| 竹内 正和 | 2003/11/01 | 2009/03/31 | 中野 信行 | 2009/04/01 | |
| 棚瀬 克彦 | 2003/06/01 | 2009/04/30 | 山口 民弥 | 2009/04/01 | |
| 唐司 征利 | 2001/04/01 | 2010/03/31 | 黒田 俊二 | 2010/04/01 | |
| 長瀬 慎平 | 2003/04/01 | 2010/03/31 | 仁科 昭則 | 2010/04/01 | |
| 南木 征男 | 2003/04/01 | 2010/03/31 | 福島 綾子 | 2010/04/01 | |
| 平井 昭志 | 2003/11/16 | 2010/03/31 | 吉田 由美 | 2010/04/01 | |
| 藤澤 勝好 | 2005/04/01 | 2010/03/31 | 高橋 寛 | 2010/04/15 | |
| 堀口 義雄 | 2009/04/01 | 2010/03/31 | 高岡 道久 | 2010/05/01 | |
| 尾藤 俊和 | 2001/04/01 | 2010/05/31 | 嶋野 泰男 | 2011/04/01 | |
| 櫻木 俊男 | 2010/05/10 | 2010/08/09 | 田村 真人 | 2011/04/01 | |
| 久保 邦正 | 2010/08/10 | 2011/02/09 | 芳賀 勉 | 2011/05/23 | |
| 社浦 竜太 | 2007/04/01 | 2011/03/31 | 松井 隆明 | 2011/09/01 | |

役職者

| 役職名 | 2000 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 | 08 | 09 | 10 | 11 |
|------------------------|------|--------------------|----|-----------|------|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|----|
| 会長 | | 4/1 豊田章一郎 ※名誉会長 | | | | | 3/31 | 4/1 庄山 悦彦 | | | | |
| 理事長 | | 4/1 清水 傳雄 | | | 3/31 | 4/1 石岡慎太郎 | | | | | | |
| 専務理事 | | 4/1 池田 克忠 | | | 3/31 | 4/1 北尾 美成 | | | | | | |
| 常務理事 | | 8/1 山下 富雄 | | | 3/31 | | | | | | | |
| 総長 | | 4/1 梅原 猛 | | | | | | | | | | |
| 学長 | | 4/1 野村 東太 | | | | | 8/21 | | 4/1 神本 武征 | | | |
| 学長代行 | | | | | | | | | 8/22 中村 隆夫 | | 3/31 | |
| 学部長 | | 4/1 吉川 昌範 | | | 3/31 | | 4/1 神谷 聖志 | | 3/31 | | 4/1 飛内 圭之 | |
| | | | | | | | | | 4/1 中村 隆夫 | | 3/31 | |
| 教務長 | | 4/1 太田 邦夫 | | | 3/31 | | 4/1 中村 隆夫 | | 3/31 | | 4/1 森山 茂夫 | |
| | | | | | | | | | 4/1 神谷 聖志 | | 3/31 | |
| 製造技能工芸学科長 (現：製造学科長) | | | | 4/1 野村 大次 | 3/31 | | | 4/1 龍前 三郎 | 3/31 | | | |
| | | 4/1 神谷 聖志 | | | 3/31 | | | | | | | |
| | | | | | | 4/1 日向 輝彦 | 3/31 | | | 4/1 東江 真一 | | |
| 建設技能工芸学科長 (現：建設学科長) | | | | 4/1 飛内 圭之 | 3/31 | | | 4/1 白井 裕泰 | 3/31 | | | |
| | | 4/1 岩下 繁昭 | | | 3/31 | | | | | 4/1 赤松 明 | | |
| | | | | | | 4/1 坂口 昇 | 3/31 | | | | | |
| ものづくり研究情報センター長 | | | | 4/1 神谷 聖志 | 3/31 | | | 4/1 東江 真一 | 3/31 | | | |
| | | 4/1 野村 東太 | | | 3/31 | | | | | | | |
| | | | | | | 4/1 櫻井大八郎 | 3/31 | | | 4/1 市川 茂樹 | | |
| 図書情報センター長 | | | | 4/1 中村 隆夫 | 3/31 | | | 4/1 増渕 文男 | 3/31 | | | |
| | | 4/1 野村 東太 | | | 3/31 | | | | | | | |
| | | | | | | 4/1 櫻井大八郎 | 3/31 | | | 4/1 八代 克彦 | | |

| 役職名 | 2000 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 | 08 | 09 | 10 | 11 |
|-----------------|------|----------------|----|----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------|----|----|
| 事務局長 | | 4/1 池田 克忠 | | | 3/31 | 4/1 北尾 美成 | | | | | | |
| 事務部長 | | 4/1 重谷 哲二 | | | 3/31 | 4/1 北尾 美成 | | | | | | |
| 学務部長 | | 4/1 重谷 哲二 7/31 | | | | | | | | | | |
| | | 8/1 山下 富雄 | | | 3/31 | 4/1 北尾 美成 | | | | 4/30 | | |
| | | | | | | | | | | 5/1 高岡 道久 | | |
| 総務課長 | | 4/1 中村 和彦 3/31 | | | | | | | 8/1 山崎 幸典 3/31 | | | |
| | | 4/1 中牟田 誠 3/31 | | | | | 7/1 柄沢 敏行 7/31 | | | | | |
| | | | | | | | | | | 4/1 田村 真人 | | |
| 教務課長 | | 4/1 古賀 隆二 3/31 | | | | | 4/1 藤澤 勝好 3/31 | | | | | |
| | | 4/1 児玉 洋祐 3/31 | | | | | | | | | | |
| 情報課長 | | 4/1 藤沢 翼也 3/31 | | | | | | 4/1 荻野 正夫 3/31 | | | | |
| | | | | | 4/1 湯本 義仁 3/31 | | | | | | | |
| 教務・情報課長 | | | | | | 4/1 荻野 正夫 5/31 | | | | 4/1 山口 民弥 | | |
| | | | | | | | 6/1 小川 俊夫 3/31 | | | | | |
| 厚生課長 | | 4/1 湯本 義仁 3/31 | | | | | | | | | | |
| 学生課長 | | | | | 4/1 宮本 伸子 | | | | | | | |
| 入試課長 | | | | | | 4/1 藤澤 勝好 3/31 | | | | 5/1 高岡 道久 | | |
| | | | | | | | | | 4/1 北尾 美成 4/30 | | | |
| ものづくり研究情報センター主幹 | | 4/1 尾藤 俊和 | | | | | | | 4/1 郡山 力郎 3/31 | | | |
| | | | | | | | | | | 3/31 | | |
| | | | | | | | | | | 4/1 嶋野 泰男 | | |

製造学科 (旧: 製造技能工芸学科) 非常勤講師

| | | | | | |
|--------|--------|---------------|-------|---------------|--------|
| 青木 日照 | 江森 義雄 | 佐竹 博 | 田中 幹子 | 濱田 奈保子 | 宮寺 稔 |
| 赤川 松男 | 大岡 紀一 | 佐藤 真 | 田中 良和 | 原田 哲也 | 宮本 健二 |
| 阿部 一美 | 大関 親 | 佐藤 正子 | 谷口 慶二 | 坂東 一夫 | 村井 元 |
| 阿部 治久 | 大田 至 | 佐藤 嘉一 | 谷口 守孝 | 平井 聖児 | 村田 泰彦 |
| 新井 郁雄 | 大橋 敏也 | 佐藤 義博 | 田村 博之 | 平尾 尚武 | 村松 武憲 |
| 新井 邦明 | 大寄 越彦 | 地引 啓修 | 茶山 隆秀 | 平岡 麻里 | 室岡 秀保 |
| 荒井 賢 | 岡田 修 | 島田 幸徳 | 土田 裕康 | 平田 清孝 | 守谷 騰 |
| 荒岡 勝政 | 岡本 雅臣 | 新後 寛城 | 土屋 朋子 | 平田 政司 | 門藤 恵子 |
| 安藤 則浩 | 荻原 征三郎 | 鈴木 克美 | 當眞 嗣広 | 福井 星一 | 柳 建太郎 |
| 池山 和子 | 小倉 直美 | 鈴木 隆義 | 富澤 仁博 | 福島 喜久男 | 柳田 さおり |
| 井坂 康志 | 小澤 孝人 | 鈴木 信幸 | 富田 彰男 | 福永 脩 | 山口 淳 |
| 石井 正 | 尾谷 英明 | 鈴木 英生 | 富安 浩 | 藤崎 千秋 | 山田 彰 |
| 石川 俊行 | 柿原 直美 | 諏訪 部正次 | 仲 春男 | 藤田 晃代 | 山田 一夫 |
| 石田 貞良 | 檉村 紀毅 | 仙頭 武文 | 永島 義教 | 堀井 勝男 | 山中 昇 |
| 石田 洋子 | 加藤 剛 | 添田 榮俊 | 中村 強 | Marquet, Paul | 山本 淳子 |
| 一色 正晴 | 門倉 久雄 | Scott, Zolner | 中村 哲夫 | 増田 裕二 | 吉浦 孝 |
| 乾 吉雄 | 加納 裕 | 高木 英二 | 仁科 俊夫 | 松崎 淳 | 吉村 孝 |
| 井ノ原 忠彦 | 鎌田 誠 | 鷹野 正通 | 西村 哲郎 | 松島 正明 | 吉村 孝彦 |
| 今井 裕治 | 河内 真作 | 高橋 暁子 | 沼倉 真澄 | 松本 五一 | 米山 富美雄 |
| 今枝 計之 | 河鱈 公男 | 高橋 敏夫 | 能町 和子 | 松本 秀雄 | 劉 猛 |
| 岩瀬 扶佐子 | 神田 茂雄 | 高橋 信弘 | 野口 勉 | 水谷 卓之 | 龍前 三郎 |
| 岩月 孝三 | 岸 洋 | 高橋 雅和 | 野田 恵子 | 三谷 裕美 | 和賀井 彰 |
| 植木 達彦 | 桑名 卓夫 | 瀧島 秀二 | 野館 賢司 | 光島 禎 | 渡邊 悦生 |
| 上田 惇生 | 小林 滉 | 武田 正雄 | 野村 誠 | 三橋 眞成 | 渡 直也 |
| 植田 稔 | 酒井 芳克 | 立花 雅夫 | 橋谷 秀樹 | 光山 嘉俊 | |
| 内海 敏春 | 酒徳 和彦 | 田中 隆充 | 橋本 洋二 | 宮内 厚徳 | |
| 海老澤 洋子 | 桜井 博行 | 田中 正知 | 浜田 淳 | 三宅 國博 | |

建設学科 (旧: 建設技能工芸学科) 非常勤講師

| | | | | | |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 相澤 信男 | 石川 大輔 | 上蘭 正文 | 大谷 雅之 | 梶原 正憲 | 川又 周太 |
| 青木 卓也 | 石坂 達男 | 上田 惇生 | 大塚 楨太 | 鹿島 嘉彦 | 神田 雅子 |
| 青木 徹 | 石澤 光夫 | 上原 勝利 | 大塚 勝利 | 片岡 勇征 | 神田 善明 |
| 青木 敏雄 | 石田 昌也 | 碓井 勝也 | 大野 末信 | 片渕 重幸 | 菊地 守 |
| 青木 春雄 | 石塚 俊仲 | 内島 春市 | 大場 豊実 | 片山 富男 | 北原 昭博 |
| 青木 義隆 | 石塚 弘 | 内田 桂太郎 | 大橋 政博 | 片山 豊廣 | 城所 政博 |
| 青島 広季 | 石橋 修一 | 内田 直人 | 大平 得 | 加藤 重朗 | 木野 和夫 |
| 青島 裕之 | 石渡 誠輝 | 宇根水 昇 | 大森 文彦 | 加藤 昌司 | 木下 昌澄 |
| 青山 恭之 | 磯田 信賢 | 宇野澤 幸政 | 大矢 謙二 | 加藤 登 | 公木 崇 |
| 浅見 武 | 市川 祥路 | 浦島 眞佐男 | 尾形 泰一 | 加藤 英雄 | 日下 文夫 |
| 厚沢 秋成 | 一木 恭輔 | 江川 慎吾 | 岡田 智尚 | 加藤 博 | 朽木 宏 |
| 虻川 明美 | 井戸 嘉文 | 江口 典秀 | 岡田 広幸 | 金井 一二 | 熊谷 知久 |
| 阿部 宏 | 伊藤 昭男 | 榎本 栄治 | 岡田 康継 | 金澤 久雄 | 熊野 可文 |
| 阿部 洋嗣 | 伊藤 直志 | 榎本 由佳 | 岡本 直 | 金丸 陽子 | 倉島 正義 |
| 阿部 雅晴 | 伊藤 計 | 遠藤 和人 | 小川 晴果 | 鹿沼 修 | 倉橋 甫任 |
| 新井 孝夫 | 伊藤 雄一朗 | 遠藤 純 | 小川 裕紀 | 加沼 毅一 | 栗林 成明 |
| 新井 康夫 | 伊藤 雄次 | 遠藤 修由 | 沖野 喜佳 | 金子 功 | 栗原 桂一 |
| 新井 安男 | 稲生 克義 | 遠藤 良雄 | 小熊 喬 | 金田 照夫 | 栗原 隆 |
| 新井 勇司 | 稲田 豊 | 遠藤 良直 | 小倉 直美 | 兼平 雄吉 | 栗原 博行 |
| 荒岡 淳也 | 井上 貴也 | 生川 朋 | 小沢 数晃 | 鎌田 修 | 栗原 幸夫 |
| 荒岡 光義 | 井上 照郷 | 生川 勝久 | 小澤 幸男 | 嘉村 克明 | 栗原 洋一 |
| 安藤 紀雄 | 猪股 正吾 | 大川 紀夫 | 織田 健一郎 | 荻谷 健司 | 久留島 通宏 |
| 飯島 勇 | 今井 弘 | 大木 孝介 | 小田 俊幸 | 軽部 照明 | 黒須 令二郎 |
| 飯島 義仁 | 今井 湧一 | 大窪 力司 | 小田 英樹 | 川上 浩史 | 毛見 虎雄 |
| 井口 晃王 | 今木 繁行 | 大久保 雅一 | 小野 清 | 川島 敏雄 | 小池 英一 |
| 池内 忠彦 | 今村 昌一 | 大倉 彰 | 小幡 義男 | 河田 孝志 | 小池 徹雄 |
| 池田 将明 | 入澤 重哉 | 大澤 賢一 | 小原 猛 | 河谷 史郎 | 小出 昌克 |
| 石井 英一 | 入谷 拓哉 | 大島 伸夫 | 香川 光男 | 河野 俊尚 | 光野 隆 |
| 石井 隆 | 岩澤 智 | 大杉 勉 | 柿原 直美 | 河原 調 | 河野 信之 |
| 石河 公一 | 岩田 徹一 | 太田 邦夫 | 角田 勝行 | 河原 太三郎 | 古賀 誉章 |
| 石川 四郎 | 岩渕 茂樹 | 大滝 俊広 | 梶 芳晴 | 川人 俊希 | 木暮 実 |

建設学科（旧：建設技能工芸学科）非常勤講師

| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|--------|-------|
| 小島 正美 | 島中 英博 | 田中 昭雄 | 那須 武秀 | 邊見 仁 | 安井 弘明 |
| 小菅 喜郎 | 清水 昌二 | 田中 国光 | 奈良 裕隆 | 北条 哲男 | 安岡 正人 |
| 小菅 瞳 | 清水 知昭 | 田中 健二 | 奈良 禧徳 | 細井 智亨 | 安田 俊哉 |
| 小寺 努 | 清水 博史 | 田中 伸幸 | 新島 稔 | 堀 竹市 | 矢野 弘 |
| 後藤 伸一 | 莊子 敏弘 | 田中 久雄 | 西村 修 | 本郷 誠二 | 矢野 道和 |
| 五藤 高志 | 白井 裕泰 | 田中 博良 | 西村 眞一 | 本間 勤也 | 矢部 喜堂 |
| 小林 明美 | 白沢 好美 | 田中 文男 | 西村 信男 | 前川 行正 | 山岡 昭義 |
| 小林 弘和 | 白鳥 秀幸 | 田中 文雄 | 沼倉 眞澄 | 増田 一眞 | 山川 智久 |
| 小林 宏臣 | 新屋敷 隆 | 田部井清安 | 根本 明 | 町田 清之 | 山岸 俊之 |
| 小林 正幸 | 須々木昭一 | 丹内 康弘 | 野田 哲章 | 町田 知啓 | 山口 俊彦 |
| 小林 靖史 | 鈴木 芳 | 千葉 一輝 | 野村 忠臣 | 松井 郁夫 | 山崎 暁子 |
| 小林 裕 | 鈴木 光 | 千葉 清 | 野村 誠 | 松岡 信夫 | 山崎 健二 |
| 小松 洋之 | 鈴木 健寛 | 塚越 英夫 | 萩原 忠和 | 松崎 峰夫 | 山崎 久康 |
| 小松 俊二 | 鈴木 規道 | 塚田 寿 | 萩原 弘明 | 松島 隆 | 山崎 博志 |
| 小柳 敏博 | 鈴木 啓允 | 月岡 正夫 | 白田 勇樹 | 松田 健一 | 山田 上 |
| 小山 千重 | 鈴木 浩之 | 佃井 周一 | 橋本 沢子 | 松永 恵一 | 山田 光起 |
| 金 美紀 | 鈴木 眞 | 辻 勉 | 長谷川秀樹 | 松藤 久良 | 大和 彩佳 |
| 近藤 一成 | 鈴木 正行 | 辻 正哲 | 長谷部孝昭 | 松本 修一 | 山本 義雄 |
| 近藤 照夫 | 鈴木 亮二 | 津田 修 | 長谷部 浩 | 松本 元意 | 山本 一真 |
| 今野 勝二 | 須田松次郎 | 土田 裕康 | 畑 敦史 | 馬淵 博行 | 山本 幸子 |
| 今野 義視 | 須藤 永力 | 土屋 潤 | 畑 一男 | 宮前 守 | 山本 淳子 |
| 齊藤 昭一 | 須永 力治 | 寺本 仁 | 馬場 勇 | 丸一 俊雄 | 山本 達也 |
| 齊藤 薫 | 関根 一三 | 土居 進 | 馬場 茂 | 丸山 和彦 | 山本 義雄 |
| 佐伯 良知 | 関根 隆明 | 東内 勝美 | 林 章二 | 丸山 幸俊 | 山本 一真 |
| 酒井 正勝 | 関根 正行 | 藤間 利一 | 林 秀樹 | 丸山 幸彦 | 山本 康伸 |
| 酒井 義尚 | 関谷 浩一 | 遠山 則孝 | 原 伸輔 | 水上 邦夫 | 横井 長夫 |
| 坂口 昇 | 曾我 義勝 | 戸引 一則 | 原口 浩 | 水谷 篤 | 横井 忠志 |
| 坂本 征 | 高石 常雄 | 飛内 圭之 | 針ヶ谷栄次 | 三橋 守 | 吉川 利晃 |
| 坂本 忠規 | 高岡 敏明 | 戸部 征三 | 日暮 一雄 | 緑川 雅之 | 吉澤 清三 |
| 坂本 清人 | 高嶋 智浩 | 富田 重直 | 飛坂 基夫 | 峰政 克義 | 吉田 邦雄 |
| 櫻井 久敏 | 高田 博尾 | 富田 玲子 | 飛田 郁也 | 宮城 賢吉 | 吉田桂一郎 |
| 佐々木 昭 | 高梨 智浩 | 豊川 忠幸 | 日野 敦 | 三橋 守 | 吉田 信一 |
| 佐々木邦夫 | 高野 肇 | 中 清保 | 平井 雄二 | 宮坂 公啓 | 吉田 拓正 |
| 佐々木昌孝 | 高橋 修 | 中 忠司 | 平方 桂一 | 宮迫 浩 | 吉保 映 |
| 佐々木 亮 | 高橋 定信 | 永尾 重光 | 平坂 良太 | 宮島 清 | 米野 雅之 |
| 佐藤 岩夫 | 高橋 孝治 | 永尾 弘孝 | 平野 光男 | 宮嶋小一郎 | 若菜 清治 |
| 佐藤 幸恵 | 高橋 辰雄 | 中島 修一 | 平山 和行 | 宮嶋 信一 | 和田 勝悦 |
| 佐藤 順一 | 高橋 富男 | 中島 宏 | 平山幸一郎 | 宮島 秀夫 | 和田 智一 |
| 佐藤 和 | 高橋 宏樹 | 中島 陽子 | 廣瀬 吉次 | 宮前 守 | 渡邊 章 |
| 佐藤 幸博 | 高橋 裕 | 中島 洋志 | 廣田 徹 | 村上 幸一 | 渡辺 浩一 |
| 佐藤洋二郎 | 高橋 良仁 | 永田 好一 | 福井 星一 | 村上 博 | 渡邊 重行 |
| 佐野 公章 | 瀧山 有二 | 中田 善久 | 福島 教仁 | 村山 幸義 | 渡邊 進 |
| 佐山 忠雄 | 田口 勇 | 中武芳志郎 | 福島 正雄 | 森下 洋一 | 渡辺 珠枝 |
| 澤田 和紀 | 田窪 順治 | 長谷 芳春 | 福原 春吉 | 森田 佳伸 | 渡邊 秀雄 |
| 澤本 武博 | 竹下 勝美 | 中根 徹也 | 藤井 和俊 | 森本 修人 | 渡辺 秀輝 |
| 舌間孝一郎 | 竹島 克朗 | 中村 修司 | 藤倉 均 | 守家 和志 | 渡辺 隆一 |
| 地頭蘭 博 | 竹田 弘 | 中村 隆夫 | 藤崎 孝博 | 森山 武広 | 古茶 直己 |
| 品川 勝也 | 田澤 仁 | 中村 勉 | 藤平 秀一 | 森脇 貴志 | 山国 宏樹 |
| 地主 富雄 | 田嶋多賀男 | 中山 昭 | 藤原 孝宏 | 諸岡 永長 | |
| 篠田 敦子 | 田島 裕敬 | 中山 和則 | 船越 亮二 | 諸本 敏明 | |
| 柴田 正文 | 田代 充雄 | 中山 健二 | 古澤 武 | 門藤 恵子 | |
| 隅田 一夫 | 立花 雅夫 | 中山 實 | 古谷 繁基 | 八木 沢康衛 | |

大学院非常勤講師

| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|--|
| 飯田 孝司 | 金井 英夫 | 嶋矢 志郎 | 田中 正知 | 野村 俊彦 | |
| 石館 陸男 | 金子 勇雄 | 鈴木 克美 | 津田 精一 | 日高 保雄 | |
| 石原 秀郎 | 木村富士雄 | 清木 俊行 | 中田 善久 | 前川 行正 | |
| 今田 邦弘 | 木村 峰男 | 高橋 邦雄 | 中村 悠一 | 松本 和夫 | |
| 大谷 浩一 | 朽木 宏 | 田中 伸幸 | 西村 哲郎 | 三宅 健作 | |

ものづくり大学 10年のあゆみ

2011（平成23）年10月発行

編 集 10年のあゆみ編集委員会

発 行 ものづくり大学
〒361-0038 埼玉県行田市前谷333番地
TEL.048-564-3800

印刷・製本 コスモプリント株式会社
埼玉県行田市忍2-9-15